

# 研究所報

目次

蒙蔵条約100年目の学術協定	1
2013(平成25)年度「指定研究」(追加)研究組織一覧	2
2012(平成24)年度「指定研究」等研究経過報告	2
2013(平成25)年度「一般研究」(追加)研究組織一覧	11
2012(平成24)年度「一般研究」研究結果概要	11
海外学会参加報告	35
海外研究調査報告	40
国内研究調査報告	42
公開講演会・公開研究会報告	47
共同研究調査報告	50
全国大学史資料協議会研究会報告	54
彙報	56

## 蒙蔵条約100年目の学術協定

西藏文献研究 研究代表者・教授 福田 洋一

2013年夏、モンゴル国立大学社会科学部と真宗総合研究所の間で学術交流の協定が締結された。わが西藏文献研究班が真宗総合研究所での窓口となり、今後共同調査や共同研究を行っていくこととなった。

折しも100年前の1913年に、モンゴルとチベットの間に国際条約が締結された。1911年10月に勃発した辛亥革命によって清朝が崩壊したのを受け、両国がお互いを独立国家として確認し合う内容であった。

モンゴルは、清朝が崩壊した直後の1911年12月、ゲルク派の転生僧ジェブツンダンパ8世を皇帝として推戴し独立を宣言した。ジェブツンダンパは、ダライラマ5世に、チョナン派の高僧ターラナータの化身として認定されたことから始まるモンゴルの代表的な転生僧である。この即位式も、1895年に行われたダライラマ13世の即位式と酷似しており、ダライラマ政権を模倣しようとする意図が見られる。

一方、ダライラマ13世は20世紀初頭、イギリス軍や中国軍の侵入から逃れるために各地を転々としてラサを離れていたが、辛亥革命が起こると東チベットに侵攻していた中国軍を掃討し1912年暮れにラサに帰還した。上記の蒙蔵条約は翌1913年1月に締結されたのである。「我々モンゴルとチベット両国は、満洲政権の支配下から出て中国と離れ、それぞれ独立国家を作った。過去から現在に至るまで、両国の宗教は等しく、緊密な関係であったので、今、それをさらに堅固なものとするために以下の条約を締結する。第一条：モンゴル人たちが独立国家を作り、ゲルク派の主ジェブツンダンパ御前を鉄豚年の11月9日に皇帝として推戴したことを、チベットの皇帝ダライラマ御前が称揚し、堅固にして不変であるとお認めになった。第二条：チベット人たちが独立国家を作り、ダライラマ御前を皇帝として推戴したことを、モンゴル皇帝ジェブツンダンパ御前が称揚し、堅固にして不変であるとお認めになった。」モンゴル、チベット両国が中国から独立して民族国家を形成し、それぞれの皇帝を首長に据えたことを確認している。チベット側からはダライラマ13世の特使ブリヤート

僧のドルジエフが締結に当たったが、条文の表現は必ずしもダライラマの意向に沿うものではなかった。むしろ、中国から独立して民族国家を樹立しようとしていたモンゴル側の意図を反映したものと言える。

ダライラマ13世は、その条約締結の1ヶ月後にチベット人民に当てて「自立の布告文」を宣布する。曰く「慈悲深き仏の予言の通り、チベットは、最勝の聖者たる観音菩薩が化身の姿で、〔古代のソントゥエンガムボ等〕法王三祖から今にいたるまで途切れることなく現れて、この地を支配し、衆生を適切な方便と大悲心によって護ってきた。かつて、チンギス＝ハンやアルタン＝ハンなどのモンゴル王や、明朝などの中国の王などが順次現れたが、最勝の勝者である偉大なる五世(ダライラマ五世)の御世に至った時、満洲の皇帝と施主・帰依処の関係を結び、それを互いに護ってきた。チベットは他国のような経済や軍事力、機械は持っていないけれども、仏法に則った平和な自立した国家であるので、今、外交・軍事のあらゆる事務において監督をいっそう強化して、自らの土地を固守できる大規模な軍備を布きつつあるのであれば、〔中国軍の侵入に備えて〕すぐに兵を送らなければならない。」この布告文はチベットの「独立宣言」と言われることが多いが、「中国の支配からの独立」という観念はここにはない。むしろ、チベットは、もともと独立した国家であったこと、そして満洲王朝による保護がなくなったので、自国を守るために富国強兵に励むべきことを国民に訓示しているのである。

その後の歴史は、両国の願いからは大きく外れた形で展開した。モンゴルは仏教を捨てて共産化し独立国となった。チベットは仏教の伝統を維持することはできたが、その代償に独立を失いダライラマを初め僧侶たちはインドに亡命することとなった。蒙蔵条約締結後100年目に、モンゴル国立大学との学術協定を結んだ我々も、両国のこの100年間の歴史に与っていることを忘れてはならないと思う。

## 2013(平成25)年度「指定研究」(追加)研究組織一覧

### ■「指定研究」研究員の追加 (2013年4月1日付)

研究名	研究員名
国際仏教研究	研究員 織田 顕 祐 (教授・仏教学) 箕浦 暁 雄 (准教授・仏教学・人文情報学)

### ■「指定研究」嘱託研究員の追加 (2013年4月1日付)

研究名	嘱託研究員名
国際仏教研究	嘱託研究員 大西 和彦 (ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院客員研究員・本学客員研究員)

## 2012(平成24)年度「指定研究」等研究経過報告

### 「建学の精神」教育推進研究

### 大谷大学建学の精神の具現化

研究代表者・学長 草野 顕之  
(日本仏教史/真宗史)

#### 【研究目的の現状】

本研究は、「建学の精神」の具現化を課題とし、以下の3つの視点から研究を推進するものである。

- ①「建学の精神」の現代的表現化
- ②「人間学Ⅰ」の共通資料集の作成
- ③「建学の精神」を活かした学科教育の在り方

「建学の精神」とは、直接には大谷大学初代学長清沢満之による「開校の辞」(明治34年、移転開校式)と、第3代学長佐々木月樵による「大谷大学樹立の精神」(大正14年入学者宣誓式訓辞)を指す。

視点①では、本学が今まで教育の根幹に据えてきた両学長の訓辞の意義を再確認し、これを現代的形で表現していくことを目指す。両訓辞は、それぞれ「私立学校令(明治32年公布)」と「大学令(大正7年公布)」における宗教教育に対する厳しい制約のもとで公開されたものである。本年は、そのような当時の歴史的状況を加味したうえで両訓辞の持つ意義を再検証し、その精神が持つ現代的意義の確認と表現を含めた具現化

の問題について検討した。

視点②では、本学の「建学の精神」に基づく教育を最も体現する科目である「人間学Ⅰ(文学部)」あるいは「仏教と人間Ⅰ(短期大学部)」に関して、教育の基礎となる共通資料の作成に向けた検討が期待された。当初は「人間学」における仏教教育全般にわたる共通資料の作成が目指されたが、現在は焦点を絞り、「建学の理念」に特化したテキストを作成する方向で検討が進められている。上記①の研究内容を踏まえ、学生のみならず、教職員が共通に「建学の理念」を学ぶことができるような基本テキストを作成することが現実的であると思われるため、その方向での検討に入っている。

視点③は、以上の①および②での成果を踏まえ、大谷大学の建学の精神と各学科における教育との連関について検討作業をおこなうことを目指されたが、この件についてはまったく着手することができないでいる。今後の課題として残される。

#### 【研究会の開催】

##### 第1回研究会

◇2012年4月19日(木) 16:20~17:50

場 所: 響流館4階 真宗総合研究所内 ミーティングルーム

内 容: 本年度の活動について

課題Ⅰ: 近代化過程における「宗教学校」「宗教教育」の位置

課題Ⅱ: 本学における「建学の精神」の位置

##### 第2回研究会

◇2012年5月17日(木) 16:20~17:50

場 所：響流館4階 会議室  
 テーマ：真宗大学東京移転開校の背景  
 講 師：西本祐攝氏 (大谷大学講師)

#### 第3回研究会

◇2012年6月21日(木) 16:20~17:50

場 所：響流館4階 真宗総合研究所内 ミーティング  
 グループ  
 テーマ：真宗大学東京移転開校の願い  
 講 師：西本祐攝氏 (大谷大学講師)

#### 第4回研究会

◇2012年7月18日(水) 18:30~20:00

場 所：響流館4階 真宗総合研究所内 ミーティング  
 グループ  
 テーマ：清沢満之と「宗教」  
 講 師：西本祐攝氏 (大谷大学講師)

#### 第5回研究会

◇2012年10月3日(水) 15:00~17:00

場 所：響流館4階 真宗総合研究所内 ミーティング  
 グループ  
 形 式：公開研究会  
 テーマ：明治期の宗教教育における国家と学問と建  
 学の精神  
 講 師：高橋陽一氏 (武蔵野美術大学教授)

#### 第6回研究会

◇2012年11月22日(木) 16:30~18:00

場 所：響流館4階 会議室  
 形 式：公開研究会  
 テーマ：佐々木月樵『樹立の精神』を背景から読む(1)  
 講 師：織田顕祐氏 (大谷大学教授)

#### 第7回研究会

◇2012年12月20日(木) 16:20~18:30

場 所：響流館4階 真宗総合研究所内 ミーティング  
 グループ  
 形 式：公開研究会  
 テーマ：佐々木月樵『樹立の精神』を背景から読む(2)  
 講 師：織田顕祐氏 (大谷大学教授)

#### 【内容報告】

西本祐攝氏

《清沢満之の「開校の辞」の持った意味と、その現代的

表現化》

清沢が「開校の辞」に表明する願いの背景と、特に「宗教学校」と語られることの内実を確認しようとする3回の研究報告。

1896年に従来我真宗高倉大学寮と分離して真宗大学と名乗る教育機関が京都に誕生する。しかし、そのカリキュラムや教員構成等は宗門内僧侶を養成することに主眼を置く従来の体制を踏襲するものであった。これを受けて、清沢は1892年に開始した宗門改革運動を、1897年以降強力に推進しようとする。彼は、真宗大学を東京と京都の二カ所に新築すべきであり、先に東京に設置すべきことを主張した。実際に東京に移転開校する際には、大幅なカリキュラム改編と諸分野の教員が新しく採用され、旧来の真宗大学とは大きな変化を遂げている。これは清沢の「[真宗大学構想]」と呼ばれる資料における学科編成と多くの一致点が見られる。その目的は「僧侶の精神的教育」を目指すものであったが、単なる宗門的職業僧侶の養成ではなく、新しい時代に対応していく仏教者、宗教者を養成することを目的としてスタートしたものと考えられる。

「開校の辞」では、そのような真宗大学が「宗教学校」とであると言われ、特にその教育の根幹が「本願他力の宗義の基づく」人物の養成にあると言われた。これは「宗教学校」としての拠り所が、親鸞、さらには親鸞が帰った本願他力にあることを表現したものである。清沢の言う「宗教学校」とは何であるのかについては、特に第3回目の報告「清沢満之と「宗教」」で集中して報告と議論がなされた。ここでは清沢が「宗教」という言葉に託して語ろうとする内容や「本願他力の宗義」とは何かが考察された。同時に清沢は特に教育に関して、諸分野の研究者と交流を持ち、宗門外に眼差しを向けることを期待した。そこには真宗の学を、一宗の僧侶の学ではなく、広く開かれた教えとして位置づけようとする清沢の意図があったことが確認されるが、これは、人間の普遍的な課題に対峙する人物の養成を願ったものであることが確認された。

高橋陽一氏 →清沢満之の思想的背景を踏まえて、清沢の「宗教学校」の意味を検討。

《明治期の宗教教育における国家と建学の精神》

清沢満之の「開校の辞」にある「宗教学校」という言葉が当時の社会において持った意味を明らかにするという目的で、高橋陽一先生(武蔵野美術大学)を招聘し「明治期の宗教教育における国家と建学の精神」というタイトルでお話をうかがった。明治時代中頃の「宗教学校」(宗教系私立大学)の置かれた制度的な位置づ

けは、「学問」の対象として「宗教」を教える場であることであり、そこには「学問」としての自由さと同時に規制を受けるという側面があった。このように、「宗教」が制度化される一方で、当該期の日本においては「宗教」という言葉が、religionの翻訳語、つまり、仏教やキリスト教という枠組みや一定の宗派に限定されない開かれた意味での新しい日本語の言葉として議論されていた。つまり、当時の「宗教学校」という言葉は、近代的な意味での開かれた「宗教」を教える場としても捉えられるというのである。

織田顕祐氏

《佐々木月樵の「樹立の精神」の持った意味と、その現代的表現化》

『樹立の精神』に付される各タイトルにしたがって検討が進められた。「本学の歴史」「宗教と教育」「先哲苦難の歩み」「本学の願い」「仏教の解放」「学風」「三 motto」。

これについて、はじめに、『樹立の精神』諸本の紹介と若干の対校作業がなされた。特に学生手帳のもととなる「自筆本」と、修正が加えられている「要覧本」との違いに注目し、学生手帳の『樹立の精神』のみからでは見えない背景が確認された。例えば「要覧本」だと、「大正九年に最後の受難に打勝った」とあるが、自筆本（手帳版）にはない。これはおそらくは、真宗大学が大学令にもとづく「大学」になるか、専門学校令にもとづく「専門学校」となっていくかの大きな混乱を意味するものと考えられることが確認される。そのような視点から「先哲苦難の歩み」や「仏教の解放」の章が読まれるべきであることが提言された。

第7回研究会では、月樵の学風の側面から『樹立の精神』を読み進められ、内容の確認がなされた。仏教の「学」の解放や宗教と教育の関連の問題について、月樵の視点から確認すべきことが提言された。

その他

「私立学校令」と「宗教学校」の関連の問題

○「私立学校令（明治32年）」の対象は、主にキリスト教系の大学であった。（昨年度の磯前氏の報告による）

○宗教教育規制の問題に関しては「私立学校令」そのものではなく、「文部省訓令12号（明治32年8月）」（少し軽い程度のもの）にあった。

「一般の教育をして宗教の外に特立せしむるは学政上最必要とす…中略…法令の規定ある学校においては課程外たりといへとも宗教上の教育を施し又

は宗教上の儀式を行うことを許さざるべし」

⇒ただしこれは、仏教教育が宗派教育ではなく、「学」としてなされるものであれば問題がないという内容のものとして理解された。

⇒この訓令も後に修正案が出され、実際には宗派の儀式や僧侶養成なども行われていた。

## 国際仏教研究

### 諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開

研究代表者・准教授 井上 尚実  
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。本年度も英米班、ドイツ・フランス班・東アジア班の三班に分かれて研究活動を進めてきた。各班の研究結果の概要は以下の通りである。

#### 〈英米班〉

##### I. 翻訳研究活動

(1)佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」翻訳研究について  
2009年度から4年間継続してきた佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」英訳については、以下の日程で翻訳研究会を行い、全体の訳語や表現の一貫性を確認し、序文を付して完成した。校正が終わり今年度の研究所紀要に掲載された（30号1～31頁）。

第1回研究会 5月31日(休) 14:30～16:00

第2回研究会 10月8日(月) 18:00～20:00

第3回研究会 11月20日(火) 14:30～16:00

なお、次に取り組む翻訳研究のテキストについて選定に入り、2013年度中にその計画を立てる予定。

##### II. 国際学会・シンポジウム関係

(1)第11回ヨーロッパ宗教学会 (European Association for the Study of Religions)

8月23日(休)から26日(日)の4日間、スウェーデンのストックホルム市Södertörn Universityを会場に第11回ヨーロッパ宗教学会が開催された。大会テーマはEnds and Beginnings（終わりと始まり）で、英米班で

はUnderstandings of History and Salvation in Japanese Pure Land Buddhism (日本浄土教における歴史と救済の理解) というテーマでパネルを組んで研究発表を行なった。概要は以下の通り。

Panel: Understandings of History and Salvation in Japanese Pure Land Buddhism Presenters:

- 1) KIGOSHI Yasushi (Shin Buddhist Studies)  
"The Degeneration of Buddhism and the Development of Pure Land Thought"
- 2) Robert F. RHODES (Buddhist Studies)  
"A Modern Pure Land Interpretation of Buddhist History: Soga Ryojin and Shinran's View of Buddhist History"
- 3) Michael CONWAY, lecturer (Shin Buddhist Studies)  
"The Advent of a Savior on Earth: Soga Ryōjin's Discovery of a New Beginning for Amida Buddha"  
Respondent: Katja TRIPLETT (Marburg University)

## (2)国際真宗学会ヨーロッパ支部大会

8月31日(金)から9月2日(日)の3日間、デュッセルドルフ市のEko Haus (慧光寺)を会場に第16回ヨーロッパ真宗学会が開催された。今回のテーマはThe Importance of Sangha (僧伽の重要性)で、国際研からは藤枝真研究員が「日本における仏教各宗派の脳死と臓器移植に対する立場」について研究発表を行なった。

他にアメリカ宗教学会(AAR)年次大会(11月17日(土)から20日(火)、シカゴ)への参加を予定していたが、日程の都合で今年度は参加できなかった。AARは海外の仏教研究者が最も多く集まる学術大会の一つであり、今後も研究発表を含めて英米班から研究員の派遣を続ける必要がある。

## (3)2013年度の海外学会への発表申し込み等

次年度の海外学会での研究発表の準備と申し込みを行なった。

- ・16th IASBS第16回国際真宗学会学術大会(2013年5月31日(金)~6月2日(日)、バンクーバー)  
パネルを組織して2月14日に発表申し込みを済ませた。
- ・23rd World Congress of Philosophy第23回世界哲学会議(2013年8月4日(日)~10日(土)、アテネ)  
仏教哲学(Buddhist Philosophy)のセッションでの発表申し込みを行なった。

## (4)シンポジウム開催の準備

- ・ハンガリーの学術協定校エトヴェシ・ロラード大学(ELTE)との合同シンポジウム  
2013年10月26日(土)27日(日)にELTEで開催される合同シンポジウムFaith in Buddhism(仏教における信)の発表準備(題目、プログラム作成)を進めた。  
近日中にプログラム(添付資料参照)を大学HPに載せる予定。
- ・Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology出版記念シンポジウム  
近代学術アンソロジーCultivating Spirituality(SUNY, 2011)の出版を記念した真宗近代学術をテーマとするシンポジウムの計画を進めた。編集を担当したMark L. Blum教授 Robert F. Rhode教授とミーティングを行い、開催時期については2014年度の前期(5月末から6月頃)で検討中。

## III. 公開講演会の開催

今年度は以下のような4回の公開講演会を開催した。

- (1)2012年6月25日(月) 16:20~17:50  
講師:阿満道尋氏(アラスカ大学 アンカレッジ校 アジア言語学科講師)  
講題:「第二次大戦前の北アメリカにおける日本仏教の近代的発展」  
会場:響流館3階 マルチメディア演習室
  - (2)2012年7月2日(月) 16:20~17:50  
講師: Mikael Bauer氏(リーズ大学 講師)  
講題:「Monastic Lineages and Ritual Participation: A Proposed Revision of Kuroda Toshio's Kenmitsu Taisei Model. (法脈と法会出仕:黒田俊雄の顕密体制モデルの一つの修正案)」  
会場:響流館3階 マルチメディア演習室
  - (3)2012年10月11日(木) 16:20~17:50  
講師:辛嶋静志氏(創価大学国際仏教学高等研究所 教授・所長)  
講題:「言葉の向こうに開ける仏教の原風景—経文に見える「浄土」の意味—」  
会場:響流館3階 マルチメディア演習室
  - (4)2012年11月23日(金) 16:20~17:50  
講師: Lambert Schmithausen ランベルト・シュミットハウゼン氏(ハンブルク大学名誉教授)  
講題: Some Remarks on the Origin of Ālayavijñāna 「アーラヤ識の起源に関するいくつかの見解」  
会場:メディアホール 響流館3階
- 今年度4回の講演会のうち、第1回と3回は国際的

に活躍する日本人研究者に真宗・浄土教研究に関連した講演をお願いした。第2回と4回は、近年の注目すべき研究について海外の仏教学者に講演していただいた。第4回のシュミットハウゼン教授は高名な唯識学者であり、メディア・ホールに大勢の聴衆が集まった。

#### IV. その他

国際研が収集してきた未整理の図書の整理・公開については、研究補助員の業務として継続しているが、引き継ぎが十分でない面があって、あまり進まなかった。来年度は専門的に仏教学関係のデータ・ベースを扱える嘱託研究員に担当してもらうことを検討中である。国際研の活動・公開講演会などの広報や研究成果の公表については、大学HP・サイボウズ掲示板などのメディアの積極的に活用できた。

#### 〈ドイツ・フランス班〉

##### 1. 学会参加・研究発表

◇第16回ヨーロッパ真宗学会について(発表参加:藤枝真)

2年ごとに行われているこの学会は、国際真宗学会(IASBS)のヨーロッパ支部大会と国際仏教文化教会(IABC)の学術大会という二つの側面をもち、今大会は“The Importance of Sangha”(サンガの意義)が共通のテーマとして掲げられて、それぞれの組織の主旨に合わせた発表(50分の持ち時間で質疑応答10分を含む)がなされた。

真宗学、仏教学、心理学など、様々な研究分野からの発表があるなかで、藤枝は生命倫理をめぐる宗教的言説の位置づけが変化していく様子を発表し、議論の多面的な性格を保つために、サンガが社会に向けて発言する重要性を強調した。

発表日および題目は以下の通りである。

2012年8月31日(金) (European Branch Conference of the IASBS)

Fujieda, Shin: “Sangha and its Participation in the Public Debate on the Issue of Brain Death / Organ Transplantation”(脳死・臓器移植問題に関する公的議論へのサンガの寄与)

##### 2. 研究者との交流・調査について

上記の大会の前後に、ドイツの宗教学・神学・仏教学研究者と交流し、またドイツ国立図書館での情報収集を行った。

大会前には、フランクフルトでマルティン・レップ氏(元龍谷大学教授)と、またマールブルクではシュ

テファン・イェーガー氏(マールブルク大学神学博士)と会談し、ドイツでの宗教研究の現状や、生命倫理を巡る今日の問題について教示を受けた。

また、大会後には再びマールブルクに赴き、ゲルハルト・マルセル・マルティン氏(マールブルク大学名誉教授)と会談し、これまでの本学との共同研究の歩みやこれからの研究のあり方について意見を交換した。

##### 3. シンポジウムの論文化(刊行準備)

2010年にフランス国立高等研究院においておこなわれたシンポジウム「フランスと日本におけるナショナル・アイデンティティと宗教」で口頭発表した原稿を加筆修正し、論文化(英語・フランス語)したものを同研究院のフィリップ・ポルティエ教授に送り、フランスでの刊行の準備をすすめた。現在、以下の全4編の論文のフランス語訳が完了している(※番場論文は自身でフランス語で執筆)。

ロバート・F・ローズ “The Buddhist-State Relationship in Japan: Some Observations on the Thought of Saichō and Kūkai, Two Early Medieval Monks of the Ninth Century”(日本における仏教と国家—最澄と空海の思想についての一考察)

村山保史 “State and Religion in the Thought of D. T. Suzuki”(鈴木大拙の思想における国家と宗教)

藤枝真 “Keeping Up the Grand Narrative: National Identity and State Shintoism in the Public Sphere”(「大きな物語」を保ち続けること:公共領域におけるナショナル・アイデンティティと国家神道)

番場寛 “Essai sur le discours religieux dans le Japon contemporain - Autour des différents noms de Shinran et du Namuamidabutsu”(宗教の〈ディスコース〉への試論—親鸞と南無阿弥陀仏の異名をめぐって)

#### 〈東アジア班〉

中国社会科学院歴史研究所との共同研究

中国社会科学院歴史研究所とは2010年に学术交流協定を締結し、交流に努めてきた。本年度は2年目に当たり、本学から2名が先方を訪問、先方から3名を本学へ招聘し、交流を深めた。また、今後の交流に関する協議も行った。

1. 2012年7月30日(月)~8月2日(木)、桂華淳祥教授、松川節教授が、中国社会科学院歴史研究所を訪問し、研究発表を行った。

- 石刻史料から見た金代佛教と帝室 桂華淳祥  
 ○パスパ文字モンゴル文ウサギの年聖旨の断片について 松川 節

滞在中に個人の研究活動として

桂華 首都博物館参観

松川 中央民族大学蒙古語言文化学院訪問

2. 2012年9月24日(月)~10月1日(月)、林存陽研究員・陳麗萍助理研究員・烏雲高娃副研究員の3名を招聘し、本学にて研究活動を行い、公開研究会を開催した。

9月25日(火) 午後4時~6時

マルチメディア演習室(響流館3F)

○清代学者の師友観

林存陽(中国社会科学院歴史研究所研究員)

○敦煌石窟壁画中の婚姻資料—弥勒経変を中心に

陳麗萍(中国社会科学院歴史研究所助理研究員)

○洪武本『華夷訳語』の漢字音訳の規律

烏雲高娃(中国社会科学院歴史研究所副研究員)

本学以外では、京都大学・龍谷大学を訪問、資料調査・研究者間の交流を行った。

## 西藏文献研究

### チベット語文献及びパーリ語 貝葉写本のデータベース化

研究代表者・教授 福田 洋一  
(仏教学)

#### 研究目的

大谷大学は北京版チベット大蔵経や貴重な蔵外文献などをはじめとする多数のチベット語文献、タイ王室寄贈の多数のパーリ語貝葉写本を所蔵している。これらは、本学はもとより国内外のチベット研究やパーリ仏教研究のための重要な資料となっている。本研究は、これら本学所蔵の重要な文献資料を

- (1)専門の研究者が十分に活用できるよう整理し、データベース化すること
  - (2)重要・貴重と思われるものについては電子テキスト化・デジタル画像化して公開すること
- を目的としている。この目的を達成するために、2012年

度は以下の研究をおこなう予定である。

#### 1. チベット語文献の電子テキスト化

本学所蔵のチベット語文献のうち稀観書であるツァンナクパ『量決訳註』および『サンブ明鏡史』を主な研究対象とする。『量決訳註』については、最も分量の多い第一章について、そこに含まれているダルマキールティの『量決訳』偈の部分が一目で分かるようにし、偈のサンスクリット・テキストも掲げ、偈と註釈との対応関係がわかるように工夫した校訂テキストのPDFファイルをネット上で公開する予定である。『サンブ明鏡史』については、その電子テキストおよび訳注の作成をおこなう。また『中論』『入中論』に対するツォンカパによる註釈の電子テキストの校訂もおこなう。

#### 2. 北京版チベット大蔵経の写真撮影とネット上での公開方法の検討

北京版チベット大蔵経のうちテンギェルの撮影を継続するとともに、蓄積された画像データの公開方法について検討する。また、公開中の北京版チベット大蔵経オンライン目録のデータを見直し、必要な修正を施す。さらに、大谷大学所蔵蔵外文献目録の電子データについてもネット上での公開をめざす。

#### 3. パーリ語貝葉写本のデジタル化

本学所蔵の稀観写本『マハーブッダグナンヴァータ・アッタカター』のローマナイズを進めるとともに、重要あるいは貴重な写本の撮影と整理をおこない、デジタルデータ公開に向けての検討をおこなう。

#### 4. 寺本婉雅の日記の翻刻

村岡家所蔵・寺本婉雅関連資料に含まれる寺本婉雅の二種類の日記のうち、刊行済みの『蔵蒙旅日記』では記述の薄い/記述のない1899.9.1~1900.12.31〔最終記事は1900.7.27〕間の日記(『新旧年月事記』の表題を持つ)の翻刻と研究をすすめる。

#### 5. 海外の研究者、研究機関との交流

中国・北京の中国蔵学研究センターにおいて開催される第5回北京チベット学国際セミナー(8月1日~5日)に参加する。随時、海外のチベット学研究者による公開研究会を開催する。本学所蔵のパーリ語貝葉写本の価値を世界に知らせるとともに、写本研究の最新動向を知るために、アイルランドのChester Beatty Libraryで開催される写本関係国際シンポジウムに参加する。また、タイ・バンコクの寺院でのパーリ語貝葉写本調査をおこなう。

#### 2012年度研究成果

##### 1. チベット語文献の電子テキスト化

ツァンナクパ著『量決訳註』(大谷蔵外No. 13971)の

電子テキスト化について、校訂・編集作業を進めた。最も分量の多い第1章について、そこに含まれているダルマキールティの『量決択』偈の部分が一目で分かるようにし、偈のサンスクリット・テキストも掲げ、偈と註釈との対応関係がわかるように工夫した校訂テキストが完成し、当研究班のWebサイトで公開した。第2章についても今年度内に完成・公開する予定である。第3章は校訂・編集の最終段階に入っている。

『サンブ明鏡史』(大谷蔵外 No. 13981)の電子テキストについては、ウメー書体(草行書に相当)のウチェン書体(楷書体)への翻刻作業は終了した。しかし、大谷大学図書館所蔵の写本が唯一の資料であるため、校訂作業を進めるにあたっては、内容を十分に理解する必要があり、校訂作業とともに和訳の作業も同時に進めることが必要となった。そのため、9/28、29に学内外の研究者を交え研究会を開催し、ゴク翻訳官(1059-1109)の継承者に関する記述部分について(8b1-10a3)、嘱託研究員・西沢史仁氏が作成した仮校訂本と試訳を検討した。

## 2. 北京版チベット大蔵経の写真撮影とネット上での公開方法の検討

公開可能な写真データはPDF化し、文献ごとに切り分けて、当研究班のWebサイト上にあるPeking Tripitaka Online Search(北京版チベット大蔵経オンライン目録)とリンクさせる形で公開している。しかしこの方法では、検索結果を見なければ、見たい文献のPDFにたどりつけない。そこで、公開されている文献のPDFに直接リンクを張った一覧のページを別途作成し、閲覧の便を計った。

さらに、今後も北京版の撮影を続けていくために、撮影方法の確認、撮影したデータを公開可能なPDFにまで加工する方法などの確認を行った。

大谷大学所蔵蔵外文献目録の電子データについては、著名者のデータに修正を加え、オンラインでの検索等の機能が作動することをローカル上で確認した。

## 3. パーリ語貝葉写本のデジタル化

本学図書館・博物館からの依頼をうけて、博物館所蔵のタイ王室寄贈パーリ語貝葉写本の元梱包布地64枚と組紐などの撮影を実施した(2012年9月3日~13日)。

稀観写本『マハーブッダグナンヴァータ・アッタカター(Mahābuddhagūṇavāta atṭhakathā)』については、クメール文字からローマ字への転写が半分完了した。

## 4. 寺本婉雅の日記の翻刻

村岡家所蔵・寺本婉雅関連資料に含まれる寺本婉雅の二種類の日記のうち、刊行済みの『蔵蒙旅日記』(芙蓉書房、1974年)では記述の薄い、あるいは記述のない

1899.9.1~1900.12.31[最終記事は1900.7.27]間の日記の翻刻が終了した。

## 5. 海外の研究者、研究機関との交流

中国・北京の中国蔵学研究センターにおいて開催された第5回北京チベット学国際セミナーに嘱託研究員・ツルティム・ケサン(白館戒雲)および研究員・三宅伸一郎を派遣した(2012年8月1日~5日)。ツルティム・ケサンは「チベット前伝期仏教略史」、三宅は「Life of sKyang sprul Nam mkha' rgyal mtshan (1770-1832) and his chronological table of Bonpo」と題する発表を行い、また海外の研究者との情報交換を行った。

2012年11月26日には、ネパールにあるボン教僧院ティテン・ノルブツェ僧院長テンバ・ユンドウン師を招き、「ボン教の歴史とその思想」と題する公開講演会をおこなった。翌日にも同師を招き、ボン教の現状や教義に関してディスカッションをおこなった。

アイルランドのダブリンで開催された東南アジアの写本研究を含む国際会議(The 14th International Conference of the European Association of Southeast Asian Archaeologists)に嘱託研究員・清水洋平を派遣した(2012年9月17日~9月21日)。清水は学会参加後、同地に所在するチェスター・ビーティー図書館(Chester Beatty Library)において、大谷貝葉の中の稀観文献『マハーブッダグナンヴァータ・アッタカター』の関連写本の調査を実施した。その結果、イギリスの大英図書館(British Library)から、同館所蔵のパーリ語写本コレクションのうち大谷貝葉と関連するパーリ語写本についての調査許可を得ることができ、清水を同図書館に派遣した。

## 大谷大学史資料室

### 大学史関係資料の収集・整理

室長・准教授 藤田 義孝  
(フランス文学)

本資料室の任務は、大谷大学の歴史に関わる様々な資料を収集・整理し、適切な保管の方策を講じた上で、それらを広く公開し活用できるようにすることである。ただ、これまでに出版してきた『大谷大学近代一〇〇年のあゆみ』、『大谷大学百年史』などの成果にもかかわらず



らず、未だ十分に整理できていない資料は多い。そのため、2012年度も資料を順次分類整理しながら、経年劣化にさらされている西方寺の貴重なフィルム資料をスキャナーでデジタル化して保存する作業を並行して行い、これを完了した。

また、前年度から引き続き、全国111の教育機関が加盟する全国大学史資料協議会の研究会に参加することで、諸機関との可能な連携や、アイデアの交換、ノウハウの共有を図った。研究会から持ち帰った成果を、具体的にどのようにして本学における大学史関係資料の保存・公開方法の改善に役立てるかという点は今後の検討課題として残される。

さらに、2011年度より図書館1階の入り口に借り受けることのできた大学史史料展示ケースを活用し、2012年度にも2度の展示替えをしながら大谷大学の歴史に関わる展示を行った。この展示は、大谷大学史資料室のこれまでの蓄積を公開する場であるとともに、学生・教職員をはじめ多くの関係者の関心を喚起することを意図したものである。

## 東本願寺海外布教資料室

### 大谷大学図書館所蔵 「東本願寺旧蔵資料」 海外布教関係部分の整理

室長・教授 桂華 淳祥  
(東洋史学)

大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」に含まれる海外布教関係部分は、おもに20世紀前半における東本願寺の海外布教に関する公文書の綴りで、当時の海外布教の実態を伝える貴重な資料である。この未整理の資料を整理して「資料一覧」を作成するとともに、資料自体を適正な形態にまとめて保存することを目的とする本資料室では昨年度に引き続き次のような活動を行っている。

資料には1～165の仮番号を付しているが、その1～18(満州部分、2008年真宗総合研究所紀要掲載部分：旧一覧)のうち1～9までのデータを新形式一覧へ移行する作業を行う。さらに新形式一覧には項目として設けられているが、旧一覧には記載のない法量などの調査にも着手した。それ以降の番号のものについては新

一覧の形式に従って順次整理作業を進めている。ちなみに新形式一覧とは、後世、他の機関との情報共有をより円滑にするために従来の資料一覧の体裁を変更したものである。

また本資料整理の補助作業として、これら資料の記事と対比しての確認あるいは補足をするために、東本願寺の機関誌(『真宗』『宗報』など)の人事報告や、『宗門開教年表』の記述の典拠の確認作業を行っている。

## デジタル・アーカイブ資料室

### 大谷大学所蔵貴重資料の デジタル・アーカイブの構築

室長・准教授 藤田 義孝  
(フランス文学)

本学は多くの貴重な資料を所蔵しているが、それらの多くはじかに現物に接しない限り利用できない状況になっている。この状況は、利用促進の側面からはいまでも無く、資料保存の側面からも決して望ましくない。そこで、本学所蔵の貴重な文献資料を半永久的に保存し活用していくため、資料をデジタル・データ化し、分類整理・保存する作業を進めてきた。

その一環として、2010年度より本学図書館所蔵の古典籍資料を書誌データベースとして登録する作業を続けている。図書館所蔵の古典籍資料は現在約3万部14万冊を数えるが、その検索方法は長らく従来の冊子目録のみであり、その改善のために書誌データを整備・公開することが図書館の積年の課題であった。

作業委託可能な業者を開拓することで、本学図書館所蔵の古典籍資料の書誌データベース整備と資料公開に向けて2010年度は約1500件、2011年度は2400件のデータ蓄積を完了したが、2012年度も引き続き古典籍資料のデータベース登録作業を行った。2012年度の蓄積データ件数は既に『研究所報』No. 61にて成果報告済みである。なお、2011年度秋からホームページ上で公開されている図書館所蔵古典籍データベース試行版には、2013年10月現在で5601件の項目が登録されている。

また、多くの学内学会を有する大谷大学では、様々な学術刊行物が発行されているが、それらの利用もいまだ決して十分とは言えない。これら学内から出版された学術刊行物を公開するための基本システムが概ね

整ったため、今後は収容するコンテンツの整備とともに、さらに詳細な仕様と公開手続きの確定作業を進めていく。

## 2013(平成25)年度「一般研究」(追加)研究組織一覧

「一般研究」共同研究 協同研究員の追加 (2013年8月1日付)

研究名	研究課題及び研究組織
【予備研究】 一般研究(柴田班)	研究課題 学際的利用を可能とするマルチプラットフォーム対応型系図表示ソフトウェアの研究 協同研究員 平塚 聡(元立命館大学助手) 齋藤 望(国土利用再編研究所副理事長)

※研究所委員会(2013年7月12日開催)追加(協同研究員2名)採択による

### 【個人研究】

研究名	研究課題及び研究組織
【2013~2014年度科研費採択】 一般研究(古荘班)	研究課題 「宗教間体験の現象学」構築のための基礎的研究 研究代表者 古荘 匡義(任期制助教・特別研究員)
【2013~2014年度科研費採択】 一般研究(木島班)	研究課題 ディケンズと絵画 研究代表者 木島 菜菜子(任期制助教・特別研究員)

※2013(平成25)年度日本学術振興会科学研究費助成事業(研究活動スタート支援)の採択により、2013年8月30日付発令。任期:2013年8月30日~2015年3月31日(但し、科研費研究期間:2013年8月30日~2015年3月31日)

## 2012(平成24)年度「一般研究」研究結果概要

### 共同研究

### 元朝期~明朝初期の 言語接触に関する文献学的研究

研究代表者・准教授 渡部 洋  
(中国語・近世中国語文法)

本研究の目的はモンゴル語と漢語のバイリンガル史料を始めとする多言語史料を文献学的に研究し、元朝から明朝初期に於ける多言語接触下の言語状況を明らかにするための基礎資料を作成することにある。

平成21年に大谷大学真宗総合研究所より一般研究の研究費を得て中国での現地調査と資料収集を行い、更に平成22年には科学研究費補助金を受けモンゴル国ハラホリン市のエルデニゾー寺院を始め各地の遺跡や碑石の調査を行い、我々の研究にとって計り知れない収穫を得ることができた。そして、平成23年度に大谷大学真

宗総合研究所の研究紀要に『達魯花赤竹公神道碑銘』の訳注(「漢文・モンゴル文対訳「達魯花竹君之碑」(1338年)訳注稿)を掲載することができた。平成24年度はこれまで月に一二度の研究会を通して解読してきた『張氏先塋碑』、『勅賜興元閣碑』、『西寧王祈都公神道碑』、『少林寺聖旨碑』等を含む八つの碑文と『甲種本 華夷訳語』についてのデータ整理を継続して行っている。また、元代の多言語接触の状況を理解するには他の時代の状況を知る必要があるので元明以降のバイリンガル史料を解読していくことになった。最初に満州語、モンゴル語、チベット語合璧の『喇嘛説』(1792年)の解読を行い、その後満州語、モンゴル語、チベット語合璧の『重修無垢浄光舍利仏塔碑記』(1641年)の解読を行った。この二つの史料解読を行うにあたって満州語文書の研究をされている承志氏(追手門大学)に参加していただきモンゴル語と満州語の相違点を指摘していただいた。その結果研究会では活発な議論が行えた。また、承志氏に『喇嘛説』の全体像と歴史的背景についてもご報告していただいた。その中で清朝がチベットやモンゴルの化身ラマの認定に介入していく過程が『喇嘛説』成立の歴史的背景と密接な関係があったこと

を詳細にのべられた。今後元代の多言語接触の状況を明らかにしようと考えている我々にとっては貴重な報告であった。この後漢文、モンゴル文、女真文対訳の『奴兒干永寧寺碑』(1413年)のモンゴル文の解説を行った。今回特別に牛根靖裕氏(立命館大学)に参加していただきモンゴル文を日本語に訳していただいた。そしてその訳について研究会の参加者全員で検討した。そしてこの次に烏蘭氏が発表した「從新現蒙古文殘葉看羅桑丹律《黄金史》與《元朝秘史》之關係」(『西域歴史語言研究集刊』4 2010 pp171-180)の中で紹介されている新史料「殘葉A」について検討した。この史料はチベットで新たに発見されたもので、内容は『元朝秘史』の第90章、21a26-21b14に相当する。『元朝秘史』の成立過程を考察する手がかりとなる史料の一つである。この史料と『元朝秘史』とを比較対照しながら検討したが、「殘葉A」においてモンゴル語の対格を表す助辞*i*が属格にも用いられている事例が見つかった。この用法についてモンゴル語文献では18世紀以降にしか見られないとする見解と、ペルシア語文献の記述から推測して15世紀には既に成立していたとする見解がだされ、「殘葉A」の成立年代を確定するポイントとなるのでそれぞれの見解について研究会参加者全員で議論した。

24年度は以上の史料の解説と検討以外に中国から研究者を招いて講演を行った。今年の3月に中国社会科学院から来ていただいた聂鴻音氏と孙伯君氏に講演をしていただいた。この講演は我々にとって大変参考になるものであった。明代に『西蕃訳語』が編纂されるが、こうした漢人と異民族とのコミュニケーション用の辞書的道具は古代から存在し、その具体的な編纂過程は明らかではない。しかし、聂氏と孙氏の話によると皇帝から命じられた役人が各地に行き調査して編纂するが、ただ、ほとんどが現地に住み、漢語を使うことのできる役人が調査し編纂するとのことであった。また、両氏によると大谷大学所蔵の『西蕃訳語』は表紙が黄色なので清朝時代の乾隆帝に献じた正本である可能性が高いとのことであった。現在中国故宮博物館にあるのは表紙が青色の副本だけで正本はないとのことであった。大谷大学所蔵の『西蕃訳語』は元々故神田喜一郎氏のものであるが、神田氏がどのようなルートで入手したのか不明である。我々も入手ルートを含めこの『西蕃訳語』に見られるチベット文字や漢語等について総合的な調査が必要であると感じ、今後の課題の一つとして取り組んでいきたいと思う。

大雑把ではあるが、以上が24年度の研究活動である。21年度から始まった研究活動で得られたデータは膨大な

ものになった。今後は如何に整理し発表していくかが一番大きな課題となるはずである。碑文に関しては訳注という形にすることが決定しているが、『甲種本 華夷訳語』についてはすべて和訳にすること、注釈や各言語の対照語彙集をつけることなど色々な案が出ていて話し合っているところである。ただ、この研究会に参加する者それぞれの都合もあり全員が決まった時間に集まって作業するのは非常に難しいところがある。そのため、今後は個々に作業を分担し合っただけ早く形にして研究雑誌に掲載できるようにしたいと考えている。

## 共同研究

### 日本における 西洋哲学の初期受容 —清沢満之の東京大学時代 未公開ノートの調査・分析—

研究代表者・教授 池上 哲司  
(倫理学)

本研究の目的は、清沢満之(1863-1903)の遺稿中に発見された東京大学(および大学院)在学時代の哲学関係講義録と思われる自筆講義ノートの全体を翻刻してフェノロサを中心とする東京大学の外国人哲学教師たちの講義内容を公開することであり、この作業を通じて日本における最初期の哲学思想受容過程の一面を解明することである。本研究は同名の科学研究費補助金交付研究として2010年度から2012年度にいたる3年間の研究期間をもつものであるが、研究実施計画として予め設定しておいた課題は以下のとおりであった。(1)講義録の編集(資料調査、外国人哲学教師資料作成を含む)、(2)講義録の思想的分析、(3)清沢における西洋哲学思想受容の思想的分析。これらのうち、(1)が2010年度の重点課題であり、(2)(3)が2011年度、2012年度の課題であった。2012年度は(1)の作業を継続しつつ、それと連携しながら(2)(3)の作業をすすめた。

(1)および(2)に関する研究成果は以下の通りである。市島謙吉の「フェノロサ哲学講義」および清沢満之と高嶺三吉の講義録の編集を前年度から継続して行った。とりわけ、清沢と高嶺とのノートが同年のものであり、内容的にも一致している箇所が発見されたために、こ

れら二つのノートの解明に力を注いだ。

編集作業を進めるにあたって最大の問題は、講義録の講義が誰によってなされたものなのか、さらにその講義がいつなされたかという点であった。清沢ノートの内容からしてノート間の順番はある程度推定できた。しかし、フェノロサの名前が記されているノートは別として、それ以外のはフェノロサによる講義であることの決定的な確証が得られなかった。というのは、清沢が受講していた時期の『東京大学年報』が欠落しているためフェノロサの講義内容を確認することができなかったからである。そこで、清沢と同学年に入学した高嶺三吉のノート(筆記時期がある程度記されている)を参考にすることにして、清沢ノートと高嶺ノートを比較し、内容の一致する部分を軸として清沢ノートの筆記時期を推定しようとしたわけである。たしかに、これは回り道ではあるが、編集作業と思想内容分析のためには必要不可欠な回り道であると判断して、清沢ノートと高嶺ノートの対応すると思われる部分を翻刻し、さらに翻訳する努力に集中した。その成果が、池上哲司監修・竹花洋佑・西尾浩二・朴一功翻刻・翻訳・校閲『フェノロサ「哲学史」講義』(2013年3月)である。

これによって、これまで東大時代の学生たちの回想等でしか知られていなかった、フェノロサが行った哲学関係授業の内容がその一部とはいえ具体的に、かつ読みやすい形で提供されたことになる。これを基盤として、フェノロサの講義と仏教者であり哲学研究者であった清沢の思想との厳密な比較研究、影響関係の確定に関わる研究も現在継続中である。

今後は、研究課題名は違えども、範囲を拡大した形でフェノロサを中心に他の外国人哲学教師の講義ノートを逐次翻刻・翻訳していくことを予定している。これを通してこれまでほとんど知られていなかった明治初期の外国人教師を通じての哲学思想受容の全貌がより一層明らかになるはずである。

(3)に関するものとして、清沢を介してフェノロサ哲学の影響を受けた諸思想についての研究等の成果は、研究論文として以下のものを公開した。①村山保史「近代真宗仏教者の犠牲観(一)―多田鼎と暁烏敏を中心として―」(『思想史研究』第15号、2012年、88-100頁)、②竹花洋佑「田辺元の思想形成と西田の『永遠の今』―微分から瞬間へ―」(『日本の哲学』第13号、2012年、102-127頁)、③藤田正勝「日本如何接受「哲学」」(『日本問題研究』第26巻第1期、2012年、6-12頁)、④藤田正勝「比較思想の可能性と意義」(『比較思想研究』第38号、2012年、14-21頁)。

## 共同研究

# 新出土仏教遺物と文献史料の統合による13～17世紀北アジア史の再構築

研究代表者・教授 松川 節  
(モンゴル学)

本研究は、モンゴル高原のオルホン河・トーラ河流域を調査対象域とし、新たに出土・発現した13世紀～17世紀までの仏教遺跡や文字資料が、従来の文献学的歴史研究といかに整合性を持つか、また統合可能かを明らかにしつつ、仏教をキーワードとして浮かび上がる北アジア史の新たな地平を追究すること、すなわち、新出土仏教遺物と文献史料の統合による13～17世紀北アジア史の再構築を目的としており、初年度に当たる今年度は、13・14世紀カラコルムの仏教寺院から出土した遺物を調査・研究する基盤整備のために、基礎研究と現地における予備調査(2012年5月1日～5月7日、8月15日～8月24日、9月8日～13日)とを行った。その成果は、5月26日、10月20日、3月2日にそれぞれ大谷大学で開催された研究集会にて報告され、1)カラコルムの仏教寺院に西夏仏教的要素が見られるという従来の見解は、再検討が必要なこと、2)カラコルムの仏教寺院に建立されていたとされる高さ100メートルの仏塔の様式については、契丹、高麗、ネパール、チベットの同時代仏塔との綿密な比較検討を通して明らかにする必要があること、3)13・14世紀のモンゴル高原全体に流布した仏教について、考古学的出土遺物が少なからず発現しており、それらを含めた総合的な研究が必要であること、以上の成果を得た。その意義・重要性は、従来、ほとんど研究されてこなかった13・14世紀モンゴル時代モンゴル高原における仏教伝播の状況について、考古学的証拠から再構築するための方向性を得た点にある。

当初、本年度にエルデニゾー僧院において小規模な発掘調査を行い、13・14世紀カラコルム都市遺蹟との関連性及びカラコルム築城以前の8～12世紀の古い文化層との関連性について追究する予定であったが、発掘許可を取ることができず、次年度持ち越しとなった。しかし、本年度の主たる研究実施計画である「仏教的出土遺物の調査・研究による基盤整備」については予定

どおりの研究成果を挙げているため、当初計画はおおむね順調に進展していると言える。また、研究成果の地域還元をはかるため、本年度中にモンゴル語による学術雑誌 *Орхоны хөндийн өв* (『オルホン溪谷遺産』) 第2号を発刊する予定であったが、諸般の理由により年度内に刊行できず、この経費を次年度に繰り越した。平成25年6月末刊行予定である。

今後の推進方策としては、エルデニゾー僧院において小規模な発掘調査を行い、当該地域における13~17世紀モンゴル仏教の各文化層を抽出し、関連地域との差異を検証する。考古学、歴史学、仏教学、寺院建築学、保存科学の各方面からアプローチを行う。またそれと並行して、文献史料を博捜し、考古資料と文献資料との校合作業を開始する。

## 共同研究

# 曇鸞撰『讚阿弥陀仏偈并論』 の原初形態の復元と その思想史的意義

研究代表者・教授 加来 雄之  
(真宗学)

2012年度予備研究(一般研究)の研究計画に基づいて研究概要を報告したい。本共同研究は、曇鸞(476?-542?)によって撰述された「讚阿弥陀仏偈并論」の原初形態の復元と、それにもとづいて曇鸞浄土教を思想史的に解明することを目指す準備研究であり、二つことを課題とした。

(1)一つは、『讚阿弥陀仏偈』と『略論安楽浄土義』とが本来『讚阿弥陀仏偈并論』という一書であったことを明らかにし、そのうえで曇鸞の著述が『無量寿経優婆提舍願生偈註(以下、『浄土論註』)と『讚阿弥陀仏偈并論』という二部であったという視点に立ち、曇鸞の浄土教思想を総体的に理解することにある。そのために『讚阿弥陀仏偈并論』の原初形態を想定し復元する準備として中国・日本における古写本を蒐集して検討した。また従来の曇鸞浄土教思想の研究は、『浄土論註』を中心としてなされてきたが、曇鸞の浄土教思想およびその思想がどのように受容されたかを理解するには『讚阿弥陀仏偈并論』と対照しつつ総体的にかつ有機的関係を主題とした研究が不可欠である。準備研究の一

貫として、江戸期の講録のうち二つの未公開資料に注目した。一つは真宗大谷派の学僧であり『略論安楽浄土義』の講義録がある雲華院大舎の『讚阿弥陀仏偈講義』である。もう一つは浄土真宗本願寺派の学僧であり『讚阿弥陀仏偈』『略論安楽浄土義』の両書の関係についてすぐれた知見を有する誓鑑の『略論安楽浄土義讚慧録』である。

また『浄土論註』と『讚阿弥陀仏偈并論』との有機的な思想関係を明らかにするための準備をすすめたので、その一端を研究成果として公表する予定である。

(2)いま一つは、平安、鎌倉、室町時代における曇鸞の原典遺文の訓点資料(未公開資料を含む)の諸本を網羅的に蒐集し総合的に分析し、曇鸞の原典が、日本においてどのように受容され、またどのように伝承が形成されていくかの過程を解明することである。

準備研究の一年間では、『讚阿弥陀仏偈』について、とくに詳細な訓点を有するものとして、平安時代の大原来迎院蔵良忍手沢本、鎌倉時代の親鸞『教行信証』所収本、室町時代書写と伝えられる大谷大学蔵円空写本模写本、明治時代の南條神興校訂七祖聖教所収本の翻刻を終え、訓点を比較対照できるかたちで公開した。(加来雄之『『大無量寿経』の讚歌と問答—曇鸞撰『讚阿弥陀仏偈并論』を読む』(2012年)の資料篇に掲載)。また『略論安楽浄土義』については、南條本と良忍手沢本と室町時代書写本である京都府常楽寺本の翻刻を終えた。予備研究の成果として『讚阿弥陀仏偈』については良忍手沢本・円空写本模写本・南條本の三本を、『略論安楽浄土義』については良忍手沢本・常楽寺本・南條本の三本の訓点を含めた翻刻の対照表を『研究所報』に掲載する予定である。

この度、研究成果として翻刻する良忍手沢本『讚阿弥陀仏偈』『略論安楽浄土義』の両巻には、執筆僧・葉源の手になる詳細な訓点が施されている。両巻はこれまで底本や校訂本として採用されてきたが、訓点が紹介されたことはない。本研究班では2013年3月6日に改めて両巻について圈点、朱点、ヲコト点などについての調査を行った。(ちなみに『浄土真宗聖典全書 I 三経七祖篇』(2013年3月、本願寺出版社)所収の『略論安楽浄土義』は良忍手沢本を底本とするが、訓点は採用していない。)

また東京女子大学の金子彰教授の指導のもと、曇鸞の訓点資料における「語彙・訓点索引」を編纂する方針などを決定し、『讚阿弥陀仏偈』四本の語彙・訓点の索引作成に着手しているので、その成果の一端を今後、公表したい。

## 共同研究

ジュラ紀放散虫群集  
の数値年代研究代表者・准教授 鈴木 寿志  
(地質学・古生物学)

オーストリー・アルプスの北部には、北部石灰アルプスと呼ばれる石灰岩を主体とした地帯が東西に伸びている。北部石灰アルプスは石灰岩を主体とするが、石灰岩の間には放散虫岩が少なからず分布する。研究協力員のVolker Diersche博士は、1980年の論文で北部石灰アルプスの放散虫岩に焦点をあて詳細に記載した(DIERSCHE, 1980)。その中で特筆すべきことは、放散虫岩の間に火山起源の凝灰岩が挟まれているということであった。元来、放散虫岩は陸から離れた遠洋域に堆積することが多いため、陸に起源をもつ火山灰は到達しにくい。本共同研究では2012年9月にDiersche博士に案内をいただき、放散虫岩の間に凝灰岩が挟まれる層準を現地調査することができた。

調査地域はオーストリー国ザルツブルク州ウンケン地域のグシャイトグラバーン(Gscheidgraben)である。ここには厚さ約20mの赤色放散虫岩が、赤色石灰岩の上位に層状に堆積している。放散虫岩層の基底からおおよそ14m上位の層準に厚さ2cmの凝灰岩薄層が挟まれる。この凝灰岩ならびに周辺の放散虫岩を採集し、日本へ持ち帰った。

持ち帰った放散虫岩は、微化石の抽出のために希フッ化水素酸で処理された。溶解残渣の中から放散虫個体を拾い出し、電子顕微鏡用試料台に並べた後、大谷大学で金属蒸着(金-パラジウム合金)を施した。その後、京都大学大学院人間・環境学研究所の走査型電子顕微鏡を用いて、化石の写真を撮影した。

その結果、凝灰岩層直下および直上の放散虫岩から、以下の放散虫化石が同定された：*Archaeodictyomitra aparium* (RÜST 1885)、*Cinguloturris* sp.、*Eucyrtidiellum ptyctum* (RIEDEL & SANFILIPPO 1974)、*Gongylothorax favosus* DUMITRICA 1970、*Hsuum brevicostatum* (OZVOLDOVA 1975)、*Loopus doliolum* DUMITRICA 1997、*Mirifusus dianae* (KARRER 1867)、*Pseudodictyomitra primitiva* MATSUOKA & YAO 1985、*Spongocapsula perampla* (RÜST 1885)、*Stichomitra annibill* KOCHER

1981、*Tetracapsa* sp.、*Zhamoidellum ovum* DUMITRICA 1970、*Archaeospongoprimum imlayi* PESSAGNO 1977、*Tritrabs* sp.。これらの放散虫化石は、北部石灰アルプスの*Zhamoidellum ovum*帯最上部～*Podocapsa amphitreptera*帯(SUZUKI & GAWLICK, 2003)に相当すると考えられ、オックスフォード階上部～キンメリッジ階に対比される。ただし、キンメリッジ階の指標種である*Podocapsa amphitreptera*が今のところ発見されていないので、オックスフォード階上部の化石帯の可能性が高い。

凝灰岩の岩石薄片を作成し、偏光顕微鏡にて観察した結果、100ミクロン以下の斜長石・石英・アルカリ長石からなる鉱物が多数含まれることを確認した。特に斜長石は短柱状から針状の自形を示すことが多く、この岩石が火山灰の固結した凝灰岩であることが分かる。放射年代を測定するためにアルカリ長石の中からカリ長石の検出を試みた。カリウムを含む鉱物があれば、カリウム-アルゴン法、もしくはアルゴン-アルゴン法の放射年代測定が可能であり、放散虫化石の年代を「今から～年前」という数値で示すことができる。微小領域をレーザーで溶かし、その中のアルゴン同位体比を測定する方法が、協同研究員の周藤正史博士によってドイツのポツダム大学で開発された。この方法で分析するために、表面を研磨した径12mmの円盤状試料を作成し、波長分散型X線分析を電子線マイクロアナライザによって行ったところ、わずかながらカリウムの濃集領域を確認することができた。その鉱物はカリ長石とみられるが、大きさは最大で50ミクロン程度であった。残念ながらカリウム-アルゴン法もしくはアルゴン-アルゴン法の放射年代測定を実施するには、対象鉱物が小さすぎるため、年代測定をあきらめなければならない結果となった。

今後この凝灰岩の年代測定を行うにあたり、次の可能性が考えられる。

- (1)大きなカリ長石が含まれる部分を探し続ける。
- (2)岩石を粉碎し、ジルコンの鉱物分離を試みる。ジルコンが得られれば核分裂飛跡法もしくはウラン-鉛法の年代測定を実施する。

(1)に関しては、ひたすら岩石を切っては切片を作成し、カリ長石を探すことになり、偶然に左右される。またそのための費用がかさむこととなる。遠洋域の放散虫岩堆積場まで火山灰が空中を飛んで運ばれたことを考えると、大きなカリ長石が含まれる可能性は低いであろう。今のところ岩石薄片中でジルコンの存在は確認されていないが、大量の凝灰岩を粉碎して、重液・電磁分離の方法によって鉱物分離を行うことで(2)の年代測定を行うことが可能かもしれない。

文献：DIERSCHKE, V. (1980): *Geotektonische Forschungen*, Heft 58: 1-217. SUZUKI, H. & GAWLICK, H.-J. (2003): *Gmundner Geo-Studien*, Bd. 2: 115-122.

## 共同研究

# 保育者の資質向上へ向けた リカレント・モデル・ カリキュラムの開発

研究代表者・教授 徳岡 博巳  
(児童福祉学)

本研究は、短期大学部幼児教育保育科を卒業して幼稚園教諭・保育士（以下、「保育者」として働いている人たちに対するリカレント教育のあり方を検討し、保育者の資質向上へ向けたリカレント・モデル・カリキュラムの開発を目的とするものである。

現在、保育現場が求められる役割や課題はより複雑で多様化している。当然のことながら、そこに働く保育者には、より専門的な知識や技術が求められるようになってきている。

一方で、保育者を目指す学生については、基礎学力やコミュニケーション能力の低下、社会性の欠如、といった問題が垣間見える。

こうした現状を考えると、従来の保育者養成における教育内容や方法では十分とは言えず、改革が求められていることがわかる。養成期間の延長や、単なる新しい情報の伝達といった表面的なカリキュラムの操作だけでは限界があり、新たな（より広義の意味での保育者養成）の考えを導入する必要があるだろう。同時に、新人保育者にとってこのような現場に入っていくことはハードルが高く、その後も困難さを抱え続けていることが見て取れる。卒業生が現場に出て一人前の保育者として成長するまでをフォローアップすることは、保育者養成を担う大学としての責務であると考えられる。

本研究では、2年間の保育者養成課程を完成教育としてではなく準備教育と捉えている。つまり、卒業後も日々の幼児教育・保育活動の中で自分自身をふりかえり、成長し続ける保育者の養成をイメージしているのである。養成校での学びから現場を経て、また養成校へと循環する中で、現在の幼児教育・保育現場の困

難な課題への対応に必要な専門性を獲得していく力を身に付けた保育者であり、それをフォローするリカレントのあり様や養成方法を解明したいと考えている。

なお、本研究は徳岡博巳（研究代表：幼児教育保育科）、藤本芳則（幼児教育保育科）、山内清郎（教育心理学科）、西村美紀（幼児教育保育科）、亀田十未代（幼児教育保育科）、中田千穂（幼児教育保育科）の6名の共同研究であり、打ち合わせ及び研究検討会を7回（2011/12/22、2012/1/25、5/2、5/23、6/27、9/26、2013/1/31）行なった。

まず最初に、本研究の取り上げるリカレントについての枠組み、定義付けを行なうため、6名のメンバーによりフリー討論をした。何故、今リカレントが必要なのか、どういう内容のリカレントであるべきか、教育・保育現場の状況や卒業生の実態、現在養成校で学ぶ学生の状況等が話し合われた。（4回：2011/12/22、2012/1/25、5/2、5/23）また、2008年から2009年にかけて全国保育士養成協議会専門委員会が実施した「指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する調査」のデータをもとに卒業生の動向を考察した。それらにより得られた結果より、本研究ではリカレントを学校から職場へ、学生から保育者への移行の時期にある2～3年目の卒業生を対象にし、知識・技術の学び直しと同時に人間関係を円滑に継続、発展、或いは拡大できるコミュニケーション力の養成の場の提供と考える必要があろう。

次に、卒業後の保育者の資質向上に向けたカリキュラムを検討するにあたり、本学の養成課程在学中に、どのような事を学び、教育・保育現場へと出ていくのかについて、主に実習の事前事後指導で行なっているアンケート調査をもとに、その実態把握を中田が行なった。具体的には、2012年度大谷大学短期大学部幼児教育保育科2回生81名（男性13名、女性68名）を対象に、2011年2月～2012年10月の間に行われた実習の事前事後指導の授業内（計5回）にアンケートを実施した。この調査を通して、実習に行くまで子どもとふれあう機会が全くない学生が4割を超える中、養成機関での計5回の実習を通して基本的なところから学び始め、卒業前にやっと保育という仕事の多様な部分に目が向き始め、そして保育現場に出ていくという流れが浮かび上がってきた。

保育者の養成課程は、専門職能教育課程である。所管省庁に認可を受けるために学校が用意する教育課程は、専門性を培うための科目によって構成されている。その科目群を見ると、保育者養成においては、たいへ



んな多様な学問分野を要することがわかる。そのような多くの専門分野にまたがった学習経験を、学生一人ひとりの内側で、保育という一つの統合された専門性へと構造化されていくよう援助するのが、養成課程のあり方であろう。さらに、「保育」は単なる学問分野を超えて、より価値観、世界観、文化といった生活や生き方の側面をも含んだ実践である。こうしたことから、西村は保育者の専門性の向上を目指したリカレント教育のあり方を探るために、まず保育者の「専門性」とはいかなるものか、先行研究をもとに、分析・整理することによってまとめた。

保育者は、経験を積むことで、保育の専門家となる。経験を積むというのは、現実の子どもたちに対応する保育技術の向上とともに、保育に対する考え方、つまり保育観の輪郭が明確になっていくことである。とするなら、保育者のためのリカレント教育は、これら保育技術や保育観を向上させることが大きな目的となる。それには、新しい知識を提供するだけでは不十分であり、保育者が、みずからの保育を点検し評価する視点が必要である。こうした視点に立って、藤本は保育者の技術面での専門性、特に「絵本の読み聞かせ」を具体例としてとりあげ、保育者として子どもたちと向き合う前と後で、どのような違いがみられるかを比較することで、どのような点に留意してリカレント教育を構想すべきかを考察した。

また、亀田は「反省的実践家」あるいは「成長し続ける保育者」像を目指す上で、今後のリカレント教育のあり方、および具体的な教育内容・教育形態はどうあるべきか、その手がかりとなるものを探った。本研究では、幼児教育保育科の卒業生で、現在も保育の現場で働いている人（4年経験11名、2年経験7名）を対象に「保育者の専門性（保育力）について」のアンケート調査およびヒアリング調査を通して、現場の保育者のニーズを探り、リカレント教育に求められている教育内容や取り組み形態等をより明確化させる試みを行った。同時に、完成された保育者像として現役を定年退職され、現在は大学教員をされている元保育士からもヒアリングを行い「自ら学び続ける力」を育むために何が必要かを考察した。

本研究では、最終的には「保育者のリカレント教育カリキュラム」において、すぐに実際に使用できる教材の開発を目指しているが、山内は、その前段階としてリカレントにおいて効果的に機能する教材テキストを開発するために、

- ①リカレント教育と保育者養成教育との違い
- ②講義や演習で使用される教科書とは異なる性質を

もったリカレント教育教材の特徴

③テキストを有効に機能するためのファシリテーション技法  
の3点について考察を行なった。

近年は、「反省的実践家としての保育者」という概念を中心に、「仕事を続けながら、成長し続けること」、「組織の一員としての自覚を持つこと」という、専門職としての姿が模索されている。卒業生が職業人になり、その職場での学びから成長をし続けるわけだが、いきなりそれができるわけではなく、移行期間のようなものがあるのではないか？この時期に、学生から職業人への橋渡しをするサポートが求められている。しかしながら、本研究は、やっとスタートしたに過ぎず、今後保育者の養成に関わる様々な分野の教育者がそれぞれの専門領域におけるリカレントのあり方を持ち寄り、或いは保育現場と連携しながらシステムを構築していく必要がある。

## 共同研究

### ラグ・ヴィラ博士の 中国旅行記の和訳研究

研究代表者・准教授 三宅 伸一郎  
(チベット学)

本研究の課題は、20世紀インドを代表する東洋学者にして政治家であり、アジアの貴重な古典文献を収集・保存するとともに、「Śatapitaka Series (百蔵)」の名のもとにその複製出版をおこなっているInternational Academy of Indian Studiesの創設者であるラグ・ヴィラ(Raghu Vira, 1902-1963)博士の中国旅行記*Prof. Raghuvira's Expedition to China*の和訳作成である。*Prof. Raghuvira's Expedition to China* (以下本書)は、ラグ・ヴィラ博士が1955年4月からの4ヶ月、中国政府の招待によって、内モンゴルおよび青海省などチベット文化圏を含む中国各地を旅行した際のヒンディー語による日記であり、当時のインド・中国関係を知る上でも、また、1960年代後半から始まった文化大革命以前の中国の宗教状況(例えば寺院の状況など)を知る上でも貴重な情報を与えてくれるという意味において、きわめて重要な文献である。また、ラグ・ヴィラ博士は、

中国からの帰国後、中国の拡大主義的傾向を指摘し、ネルーの対中国友好政策を批判し、ヒンドゥー・ナショナリスト政党・野党Jana Sanghに加盟した。中国訪問は、彼の政治的立場の大転換点であった。彼がなぜそのような考えを持つようになったかを解く鍵が、本書には記されている。つまり本書の研究によって、1954年の国交樹立直後の現代インド・中国関係を知る上で、貴重な情報が提供される。以上のように本書は、文化大革命直前の中国の宗教状況を知るうえでも、現代インド・中国関係史を繕くうえでも、貴重な資料であるにもかかわらず、ヒンディー語で書かれているため、Śatapīṭaka Seriesというチベット学者にはよく知られたシリーズの1冊として刊行されているにもかかわらず、注目されることはなかった。翻訳はもちろん、本書に言及した研究は、管見の及ぶ限り存在しない。

そこで、この貴重な資料である本書の内容を内外の研究者に提供すべく、和訳の作成をおこなうこととした。研究代表者とヒンディー語のネイティブ・スピーカーである研究分担者Dash Shoba Raniとの2名で定期的に読み合わせをおこない、以下の部分について和訳草稿を完成させた。

1. インドを出発し広州を經由し北京に到着するまでの記録 (pp. 1-13: ~1955年4月27日)
2. 甘肅省の省都・蘭州から青海省の省都・西寧を経て同省最大のチベット仏教寺院クンプム寺(塔爾寺)を訪問した後、西安を訪問するまでの記録 (pp. 90-97: 6月7日~14日)  
\*クンプム寺については、各堂宇ごとに、安置されている尊像等の様子が詳細に記述されている。また、クンプム寺では、青海省でのチベット語ラジオ局の開設に尽力した教育家スラブ・ギャツォ(gSung rab rgya mtsho)氏が案内の任にあたったことが記述されている。
3. 内モンゴ訪問時の記録 (pp. 47-51: 5月20日~22日)  
\*内モンゴでは、フフホトのシレート・ジョー(席力図召)、フフホト郊外の法禧寺およびTa-chao-vū-lyāng-ssa?の3ヶ寺を訪問したことが記述されている。

時に詩的な表現を交えながら、インド人の視点から見た中国の文化や社会の様子が、細かい筆致でいきいきと描かれている。玄奘『大唐西域記』や法顕『仏国記』等、インド訪問した中国の求法僧たちの旅行記は存在しているものの、時代が異なるとはいえ、インド知識人の視点から見た中国の記録は、本書が唯一のものであろう。

本書には多数の写真が収録されており、それぞれに

キャプションが付されているものの、ヒンディー語と英語によるもののみであり、中国の地名・人名などの固有名詞を示す際に必要不可欠である漢字による表記はない。そこで、今回、共同研究員・李学竹氏の協力を得て、キャプションに現れている地名・人名などの固有名詞について、そのほとんどの漢字表記を知る事ができた。

また、本書の著者ラグ・ヴィラ博士の子息であるロケシュ・チャンドラ(Lockesh Chandra)博士と連絡をとることができた。ロケシュ・チャンドラ博士からは、われわれの研究に対する激励と、将来の和訳刊行に対する理解を示す書簡をいただいた。また、本書の書誌的情報に対するわれわれの瑣末な疑問に対しても、丁寧に答えていただいた。さらに、International Academy of Indian Studiesのニルマラ・シャルマ(Nirmala Sharma)教授を通じ、ラグ・ヴィラ博士の事績に関する貴重な資料を送付いただいた。

今回の研究で完成した和訳草稿については、注釈を加えた上での発表する予定である。

## 個人研究

# 変動期の社会における 法秩序の再構築

## —南アフリカとカンボジアの比較社会学的研究

研究代表者・准教授 阿部 利洋  
(社会学)

紛争を経験した社会が、その後どのようにして司法の正当性を回復し、社会構成員の法的ニーズに応えていくのか。その過程で、どういった独特の問題が生じ、どのような反応が展開することになるのか。そうした社会における法秩序の再構築は、理論的にはどのように把握できるのか。これらの問いに対し、本研究は、南アフリカとカンボジアという対照的な社会を比較対象として取り上げ、社会学的な分析手法を用いて答えることを目的とする。また、このアプローチにより、従来、政治学的・法学的考察に限定されがちであった平和構築・「移行期の正義」研究に、新たな知見を提示することを目指す。

上記の目的のもとに遂行された昨年度の研究概要は次のとおりである。

南アフリカでは、ケープタウンとジョハネスバーグにおいて、社会的資源の再配分をめぐる人種間・民族間の緊張関係に関する聞き取り調査を行った。ケープタウンではカラードとカテゴライズされる人々のうち、そのカテゴリーを否定し、先住民コイサンとしてアイデンティティ・ポリティクスを展開しているグループに注目した。ジョハネスバーグでは、アフリカ各地からの移民が集住するヨール地区で、どのような社会秩序創出の動きがあるのか、コミュニティ・メディアの存在に着目し、ジンバブエ人研究者と共に共著論文を執筆した。

カンボジアでは、プノンペンにて、特別法廷の社会的受容を社会学的観点から分析することをテーマにしたワークショップを開催し、カンボジア・イギリス・シンガポールからの関連研究者と意見交換を行い、論集刊行へ向けた修正作業を進めた。また、ローカル・メディアの実証分析を継続し、体制側/反体制側の報道傾向が、特別法廷の正当性にどのような影響を及ぼしているか、検討した。

上記の実証研究を、従来の移行期正義分野における理論的展開に重ね合わせることで、「移行期正義プログラムの意図せざる結果」や「同プログラムの設定する目標とは異なる社会的効果」に対する考察が、十分に議論されてきていないことが明確になってきた。そこで、その知見をまず日本社会学会大会において報告し、関連研究者からのコメントを受けたいうで、なかでも社会学理論における社会運動論のフレームが、上記の問題を考察するにあたり有益であることを確認した。

昨年度の成果は以下のとおり。

[論文4点]

1. 「参加にともなう公的承認——南アフリカ真実和解委員会とカンボジア特別法廷の事例から」『体制移行期の人権回復と正義』(日本平和学会編、早稲田大学出版部) 23-40頁、2012年4月
2. 「警察改革とコミュニティ・ポリシング」『アジア研究ワールド・トレンド』2012年11月号(アジア経済研究所) 34-37頁、2012年11月
3. Reconciliation as Process or Catalyst: Understanding the Concept in a Post-conflict Society, *Comparative Sociology* vol.11, 2012 (Brill), pp. 785-814
4. Perceptions of the Khmer Rouge tribunal among Cambodians: Implications of the proceedings of public forums held by a local NGO, *South East Asia Research* vol.21 no.1 2013 (IP Publishing), pp. 5-26

[口頭発表7回]

1. 「南アフリカにおけるカラード・アイデンティティ

の台頭」、日本アフリカ学会第49回学術大会(於・国立民族学博物館) 2012年5月27日

2. 「南アフリカの体制移行とポスト・マンデラの国民統合」、シンポジウム「アフリカ諸国における独立後50年の回顧と展望——独裁制と独裁者の再検討」(於・信州大学) 2012年6月30日
3. "Perceptions of the Khmer Rouge Tribunal among Cambodians: Implications from the Proceedings of Public Forums Held by a Local NGO," Workshop on 'Justice in What Ground?: Cambodian People's Perception of the ECCC' (Phnom Penh) 2012年9月15日
4. 「移行期正義と社会学」、日本社会学会第85回大会(於・札幌学院大学) 2012年11月3日
5. 「南アフリカにおける和解政策後の社会統合とカラード・アイデンティティの台頭」、アジア経済研究所「紛争と和解——アフリカ・中東の事例から」研究会(於・上智大学) 2012年12月1日
6. "Lawyer Mandela's Court Tactics and the Potential Function of South African TRC," International Forum on Conflict Resolution through Reassessment and Utilization of African Potentials (The Garden Hotel, Harare, Zimbabwe) 2012年12月8日
7. "The ebb and flow of assemblage in Cambodian non-governmental organisation (NGO) movements: The case of human rights initiatives led by diaspora-returnees on the Khmer Rouge Tribunals," Workshop on "Community Movements in Mainland South East Asia" (Faculty of Social Sciences, Chiang Mai University) 2013年3月8日

## 個人研究

### 民族文化祭の比較研究

研究代表者・教授 飯田 剛史  
(社会学)

「民族まつり」とは、「民族」ないし「民族文化」をテーマに含んで公共の場で催されるまつり、と定義する。本研究は、「民族まつり」の形成、展開、現状、課題を現地調査を通して全体的にとらえ、その社会的、文化的意義を解明しようとするものである。

2012年度は、調査継続のほか、「民族まつり/マダン全

国交流シンポジウム」(京都10月7日)の実施に重点を置いた。これまでの研究成果総括は次の通り。

1. 民族まつりの展開

①. 1980年代：在日コリアンによる民族まつりの形成

1983年・生野民族文化祭(2002年終了)：大阪市生野区において、公立小学校校庭で、在日コリアン2、3世によって、農楽(ブンムル)他をはじめとする民族文化演目を披露。他地域に強い影響を与えた。

1985年・ワン・コリア・フェスティバル：在日コリアン2、3世とその友人の日本人による、ジャンルを超えた音楽、視覚演目を野外舞台で表現。韓国、中国朝鮮族、アメリカのグループも参加。「ワン・コリア」をめざすシンポジウム活動行う。

1990年・四天王寺ワッソ：古代に高度な文化をもって朝鮮半島から渡来した人々のパレードと聖徳太子による四天王寺で出迎え儀式をまつりで再現する。在日金融機関の主旨ではじまったが、その後、多くの在日および日本企業の支援で継続。

○民族まつりのいくつかの起源：70年代在日学生運動の背景。韓国における「民族文化」の政府・反政府側の争奪と在日「民族文化」への取り入れ。民族学校、公立校での民族教室、ハンマダン運動。日朝の古代史学、渡来人史研究。

○これらは一定の歴史的、文化的背景と不確定状況のなかでの個人の創意を起点とする社会運動形成として「自己組織性」運動の展開といえる。

②. 1990～2000年代：民族まつり/マダンの増加・広がり

在日のまつりから地域共生のまつりへ、日本人、ニューカマーの運動スタッフ、出演者としての参加、京阪神中心(伊丹、宝塚、芦屋、神戸市長田区、三田、東播磨、みのお、高槻、八尾、東大阪、枚方、奈良、京都など)に全国(福岡、福山、川崎、松本、府中など)へ展開。

民族まつりの多様化：在日コリアン中心型(マダン型)、市民グループ協働型、教員主導型、自治体イベント型、ニューカマー主体型、など

③. 2012年秋：「民族まつり/マダン 全国交流シンポジウム」を実施

21団体報告、40団体アンケート回答、78名出席

1999年「みのお」、2005年「あしや」に次ぐ3回目の民族まつりシンポジウム、「在日」「コリア」に軸足、そのなかの多様性

午前：各出席団体のまつり自己紹介。

午後：祭りと地域との関係、多文化共生について、

報告、交流。

2. 民族まつりの「まつり」性

・祝祭性：「集合的沸騰」「歓喜」による自己変革、異なる自己の発見、「やみつき」による継続性、中心メンバーのネットワーク形成、地域での定着。3F批判？(政治性・啓蒙性・教養性へ：渡来人まつり)

・「聖」性：聖なる象徴的実在としての「民族」、「聖」性から多文化選択性に

・無償性：参加者は民族まつりを通して何を得るのか？

民族性あるいは参加による自己変革、自己表現、相互承認、結合。

・社会運動性：政治性、在日社会(学生)運動史との関連性；社会運動からまつりへ

・歴史性：「民族」象徴の歴史性。「民族文化」としてのブンムルの選択、学習、普及。

3. 民族まつりの「地域」性

①. 地元密着型：生野、みのお、長田、伊丹、芦屋ほか多数

地方自治体からの承認。ただ町内会(自治会)との関連は希薄

②. 広域型：ワン・コリア、四天王寺ワッソ、日韓交流おまつり(日・韓政府主催)

③. 地域拠点型 運動拠点、磁場としての地域：東九条マダンの強い「磁場性」：研究論文集

4. 民族まつりと「多文化共生」

20世紀後半は、「寛容」、「反差別」の世界的流れ。21世紀、「排外」、「差別」の風潮。

民族まつりは、民族的マイノリティのカウンターカルチャーとして出発(1980年代)

日本人の参加、自治体からの助成、後援の獲得：民族祭りの公共性の承認獲得。

民族的マイノリティの国家政策的承認(2006年総務庁「多文化共生推進プログラム」)

各民族まつりによる「多文化共生」の多様な受けとめかた

・積極派：渡来人まつり(松本)、伊丹マダン、

・受動派・無関心派

・抵抗派：エイサーまつり(同化を警戒、「異和共生」を主張)

2010年以降、排外主義動向のなかで「多文化共生」は貴重な拠点性

5. 民族まつりの課題：今後の展開、継続の可能性。後継者、予算、自治体、地域との関係、ニューカマー参加。多様化、拡散化、停滞化。消費される「民族」

文化。排外的運動との関係。

民族まつり運動は、マイノリティの人権尊重、寛容化、共生の促進に貢献しうるか。

#### 6. 研究動向と課題

研究論文、論説はこれまで約80編。韓国人、米国人研究者も論文発表。

運動論、祝祭論、自己組織性論、エスニシティ論、アンデンティティ論、地域形成論、地域福祉論、政治性論、教育論、多文化共生論など多様。東九条マダニに関心が集中

#### 7. 実践的課題

研究の継続と広がりをつかむか。

民族まつり研究はいかにして、民族まつり運動の発展に寄与しうるか。

本研究の基軸のひとつとなる日本-アフリカ関係史の研究は、日本におけるアフリカ史学の乏しさもあり、先行研究はまだ少ない。筆者は今まで、アフリカ諸国や欧米などの研究者による関連研究も含めて、その既往の研究概観や意義・問題点の分析をいくつかの機会で行ってきた。たとえば、古川哲史「アフリカ史——精神と学界の脱植民地化に向けて」（『歴史と地理』651号、山川出版社、2012年）、同「2007年の歴史学界：回顧と展望——アフリカ」（『史学雑誌』117編第5号、史学会、2008年）、同「日本-アフリカ交渉史の諸相を考える——いくつかの研究課題と展望」（『アフリカ研究』72号、日本アフリカ学会、2008年）、同「書評：藤田みどり『アフリカ「発見」——日本におけるアフリカ像の変遷』、岩波書店、2005年」（『アフリカ研究』68号、2006年）等である。

日本-アフリカ関係史あるいは関係論研究では、関係が生じた時期の同定など、基本的な事実関係が曖昧なままにされている場合があり、それが他の研究者の論考にまで引用・利用されている問題もある。したがって本研究では、先行研究で使われている史・資料の再検証作業を含む。

2012年度においては、前年度からの継続である先行研究の概観と検証を行うとともに、関連の史・資料や情報の収集を国内外で続けた。アフリカ系アメリカやアフリカ系ディアスポラ研究の進展するアメリカ合衆国でも資料調査を行った。さらには、本研究の主たる対象時期にくわえて、近年の中国をはじめとする東アジア-アフリカ間の政治・経済関係の急速な展開に関わる文献や情報も含んだ。その上で、現在、具体的な考察や論文執筆段階に入っている。

本年度の研究成果のひとつに、本研究テーマ〈世界史における東アジアとアフリカ〉の学術的意義を確認するとともに、国際政治や国際経済、文化交流といった分野の現場あるいは日本の学校教育の現場（とりわけ歴史教育）で、本テーマが重要な意味を持つことを再認識できたことが挙げられる。より本格的な研究成果は、学術集会や近刊の学術誌での論文、共著書の出版などで公表される。

## 個人研究

# 世界史における東アジアとアフリカ — 国際共同研究のための基盤形成 —

研究代表者・教授 古川 哲史  
(歴史学／比較文化・社会論)

本研究は筆者が現在まで取り組んできた〈第二次世界大戦期までの日本-アフリカ関係史〉の研究成果を出発点に、対象地域を東アジア（主に中国、朝鮮半島、日本）にひろげて、19世紀末から20世紀半ばにおける東アジアとアフリカとの関係を世界史的な視点から明らかにすることを目的とする。従来、世界史あるいはアジア史やアフリカ史において、個別に扱われてきた諸相を繋ぐ接続性を見出す作業であり、いくつかの事例をもとに、その関係性について歴史学および歴史哲学的考察を試みる。

本研究は、理論かつ実証面での個人研究活動であるとともに、この大きなテーマを国際的な規模で論じるための国際共同研究を組織、開始させる意図もある。さらには、筆者の将来的課題の一つ〈世界史における東アジアとアフリカ、アフリカ系ディアスポラの研究〉(East Asia, Africa, and the African Diaspora in World History)に、どう結びつけることができるかを展望として考察する試みでもある。(本研究は筆者が代表の科学研究費助成事業・基盤研究Cによる研究である。)

## 個人研究

# 日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』「津島貝葉」の校訂テキスト作成

研究代表者・講師 DASH Shobha Rani  
(インド学・仏教学)

本研究は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金〈基盤研究（C）〉2011年度～2014年度）の研究助成によって行なっている。その内容は、愛媛県宇和島市津島町に保管されている「津島貝葉」と名付けられたオディアー（オリヤー）語版『マハーバーラタ』の貝葉写本に関するものである。当貝葉写本は17世紀の初頭頃に書写され、江戸時代中期頃に日本に伝来したと考えられている。コロニー（Karaṇī）書体を使用し、中世オディアー語で書かれた221葉（両面記載）からなるこの貝葉写本の内容はインド東部・オディシヤ州の15世紀半ばの有名な詩人サーララーダサ（Sāralādāsa）によってオディアー語で書かれた『マハーバーラタ』すなわち、『サララー・マハーバーラタ』（Sāralā Mahābhārata）の「森林章」の第一部に相当するものである。

本研究は、インド叙事詩『マハーバーラタ』の研究、とりわけその受容史の解明に有益である当該写本の校訂テキストの作成を中心とし、「津島貝葉」の異本の入手および「津島貝葉」を底本とした『サララー・マハーバーラタ』「森林章」第一部の校訂テキストの作成を目的としている。これらの目的を達成するために研究を進め、2012年度は、以下のような成果を得た。

- (1)2012年8月1日～4日まで、北京の中国蔵学研究中心の主催で行なわれた第5回チベット学国際セミナーに参加し、サンスクリット部会で「Exploring Palm Leaf Manuscript Research: with a special reference to Odisha」という題名で研究発表を行なった。サンスクリット語『マハーバーラタ』と比べ、オディシヤ版の「地方マハーバーラタ」はどのように地域の伝統文化に染められた別のバージョンの『マハーバーラタ』になっているかを「津島貝葉」の研究を通して説明し、本研究内容を国内外の研究者に公表する事ができた。
- (2)オディシヤ州立博物館所蔵より『サーララーマハーバーラタ』「バナバルバ」（森林章）の4本の写本のデ

ジタルデータを研究資料として入手した。これらを「津島貝葉」の校訂テキスト作成に異本として用いる。

- (3)海外研究協力者のDr. M. Maithrimurthi（ハイデルベルグ大学・ドイツ）とProf. U. N. Sahoo（ウトカル大学・インド）と懇談し、2012年度に行なった研究内容を精査し、改善した。さらに、出版レイアウト及び校訂のための正しい用語を確定するなどの共同研究も行なった。
- (4)チェンナイのマドラス大学の東洋研究所（Oriental Research Institute）を訪問し、所長のSiniruddha DASH教授より南インド、とりわけタミル・ナードゥ州の貝葉写本研究の現状について貴重な情報を得た。また、Prof. K.V. Sharma Research Foundation研究所を訪れ、研究員のDr. Mamata MISHRAより貝葉写本によく記される2種類のコロフォン（プリー・コロフォンとポスト・コロフォン）に関する研究について教示を受けた。貝葉写本研究の新たな側面について学べた事はこれからの研究に極めて有益であるに違いない。
- (5)現地でも本研究が評価され、当該貝葉写本の詩人サーララーダサの生誕600周年記念式典（2013年2月16日）の際に、オディシヤ州知事より表彰を受けた（<http://www.otani.ac.jp/news/nab3mq0000029mdv.html>）。これは、今後の研究に活力を与えてくれるものである。

## 個人研究

# プラトンの中期イデア論の生成

研究代表者・本学非常勤講師 西尾 浩二  
(哲学・倫理学)

本研究の目的は、古代ギリシアの哲学者プラトンが中期対話篇（『国家』など）で提示する形而上学的理論である「中期イデア論」に関して、彼の前期対話篇（『エウテュプロン』『ソクラテスの弁明』『メノン』など）にまで遡り、その生成の背景を明らかにすることである。本研究は、平成23年度から25年度までの科学研究費補助金交付による研究であり、具体的な目的として以下の諸点が設定されている。(1)プラトンの前期対話篇にみられるソクラテスの「何であるか」の問い（「勇

気とは何であるか」など一般に「定義の探求」とみなされている問い)から中期アイデア論が生成するには、どのような背景があるのかを明らかにすること、(2)この(1)の解明過程で前期対話篇のうちでもとくに「敬虔とは何であるか」を主題とする『エウテュプロン』に焦点を当て、探求における定義の優先性の問題や、アイデア論とのつながりをはじめとしてさまざまな論点から、この対話篇を総合的に研究し、解説・注解付き翻訳を作成し公刊すること、(3)これら(1)(2)を踏まえて中期アイデア論を捉えなおし、それによって中期プラトンの教育思想へ新たな光を当てることである。平成24年度は、前年度に引き続き(2)に力点を置いて研究を進めるとともに、(1)についても考察を加えた。

具体的な活動として、まず前年度におこなった先行研究調査を踏まえた考察である。とりわけ探求における定義の優先性をめぐる問題について考察を進めた。この問題は、たとえば「美とは何であるか」(美の本質あるいは定義)をまず知らなければ「何が美しいものか」(美の事例)も「美は有益なものか」(美の特性)も知ることはできない、といった立場がソクラテスのものであるのかどうか、またそうした立場が哲学的に正しいのかどうか、という問題である。プラトンの原典にはこの立場を示唆するように思われる箇所が複数見られる。だがソクラテスは「何であるか」を知らないと主張するのだから、この立場は(対話篇でソクラテスがしているように見える)事例を用いた定義探求すら不可能にしかねないことになる。つまりこの問題は、ソクラテスの対話活動(「何であるか」の探求)の有効性、ひいては広く哲学的探求の有効性にもかかわってくるのである。近年では、こうした立場(「ソクラテスの誤謬(Socratic fallacy)」とも称される見解)をソクラテスが実際にとっていたとするギーチの問題提起(Geach, P. T. (1966) 'Plato's *Euthyphro*: An Analysis and Commentary', *Monist* 50, 369-82)に端を発し、この問題をめぐる大きな論争が研究者の間に生じており、ソクラテスにこの立場を帰する陣営とそうでない陣営に分かれて今もなお論争が続いている。この問題に関する先行研究の調査の結果、従来の研究はいずれの陣営もほぼ共通して、一方でソクラテスの知の否認(知らないという発言や態度)とのつながりを意識しつつ、しかし他方で(ギーチが論考中で示唆したとおりに)アイデア論とは切り離れた形で問題の解明を模索していることがわかった。研究代表者はこの点に何らかの不備があるのではないかと考え、現在、アイデア論の生成をも視野に入れた形での解明を試みて考察を加えているところである。

また、こうした先行研究に基づく考察と平行して、

前年度に引き続き、前期対話篇のひとつである『エウテュプロン』の翻訳を進めた(現在進行中)。翻訳の底本には、オックスフォード古典叢書(Oxford Classical Texts)中のプラトン全集第一巻の新しいデューク版(E. A. Duke, W. F. Hicken, 1995)を用い、その際に旧来のバーネット版(Ioannes Burnet, 1900)との異同にも注意を払っている。翻訳にあたっては、原典に忠実であると同時に現代の読者にも読みやすい訳文をつくるために、いくつかの工夫をした。まず多数のコメンタリー—古典的なアダム(J. Adam, *Platonis Euthyphro*, Cambridge University Press: Cambridge, 1890)やバーネット(J. Burnet, *Plato: Euthyphro, Apology of Socrates, Crito*, Clarendon Press: Oxford, 1924)から、最近のベイリー(J. A. Baily, *Plato's Euthyphro & Clitophon*, Focus publishing/R. Pullins Company, 2003)まで—を参照した上で、研究代表者自身も注解を新しく作成しながら翻訳作業を進めた。また多数ある英語訳と日本語訳をつねに参照し、いくつかのドイツ語訳とフランス語訳をも部分的に参照した。さらにまた、『エウテュプロン』とも関連性の深い『ソクラテスの弁明』について、主要な注解と翻訳を調べ、それらを踏まえた新たな注解と翻訳の作成に着手した(現在進行中)。これらの活動に加え、最新の研究状況を知るために学会(日本西洋古典学会、関西哲学会、古代哲学会)や研究会(古代哲学フォーラム)にも参加した。以上の研究成果を踏まえ、平成25年度は当初の研究目的に沿って研究成果をとりまとめ公表することをめざす。

## 個人研究

### 戦後社会におけるジェンダー・セクシュアリティ秩序の形成と新たな親密性の構築

研究代表者・任期制講師 赤枝 香奈子  
(社会学)

本研究は、近代西欧に由来する「同性愛」という知が、非西欧社会における同性同士の親密な関係にいかなる影響を及ぼしたか、とくに「レズビアン」などと呼ばれてきた女性同士の親密な関係に注目し、近現代社会を支えたジェンダー・セクシュアリティ秩序の生成と、その過程で生み出されてきた、従来の家族とは

異なる新たな親密性について考察することを目的とする。その際、日本とフィンランドという女性同性愛に対し、異なる抑圧形態をもった二つの国を比較し、近代的性規範を構成する多様で矛盾に満ちた要素を浮かび上がらせながら、新たな親密性が生み出される社会的条件や政治的力学について検証する。

戦前の日本では、女学生など若い女性たちの間で親密な関係がしばしば見られた。そのような関係は西欧の性科学の知をもとに「仮の(=一時的な、後天的な)同性愛」と呼ばれた。女性同士のすべての親密な関係が許容されていたわけではなかったが、「仮の同性愛」にかんしては、女性なら誰でも経験しうるもの、また将来経験するであろう(しなればならない)異性愛の前段階とみなされ、むしろ推奨される側面もあった。そこでは、未婚男女の異性愛の方が危険視され、警戒されていたのである。すなわち、戦前の女性に対するジェンダー規範の中には、「同性との親密な関係を築きうる」という性にまつわる規範も含まれていた。そこには、同性愛を処罰する法が、明治の一時期を除いて存在しなかったという社会的背景も影響している。

本研究において、戦後日本のジェンダー・セクシュアリティ秩序の形成にかかわる事象について広く文献調査を行った結果、このような同性愛にある意味寛容ともいえる性規範は、戦後、大きく変化することがわかった。中等教育以上の男女共学化によって、「仮の同性愛」の温床とみなされていた女学校は解体され、女性同士の親密な関係を築きうる場そのものが大幅に減少した。かわって、突如として時空間を共有することになった若い男女に対しては、グループ交際という形での「明るい男女交際」が、教育、マスメディアを巻き込んで勧められるようになった。やがて同性愛はタブー視されるようになっていくのだが、それまでにはいくつかの段階があり、同性同士の親密な関係が即座に否定され、異性愛が実践されるようになったわけではなかった。また、同性愛批判言説は、そのみが単独で存在したわけではなく、戦後間もなく発刊された雑誌等に見られるポルノグラフィックな性描写の氾濫、戦後、街にあふれた私娼をめぐる対策、赤線の成立と廃止、純潔教育に見られるような「正しい」異性愛教育、1960年代後半のフリーセックス・ブームなどと密接に関連しつつ、戦後日本の新たなジェンダー・セクシュアリティ秩序の一翼を担っていたことが明らかになった。

本研究の最終年度である平成24年度は、この戦後日本のジェンダー・セクシュアリティ秩序の形成過程において、女性同性愛に対するホモフォビアや「レズビアン」という主体が顕在化するプロセスを解明するた

め、1970年代以降まで射程を広げ、国立国会図書館等で関連資料を収集し、調査、研究を行った。その成果をクア学会第5回研究大会で報告した。

一方、フィンランドでは19世紀後半から、同性愛を処罰したり、差別的に取り扱う法律が存在したが、それらは1990年代末までにすべて撤廃された。その後、2002年に同性同士のパートナーシップ制度が導入されてからすでに10年以上経つ。パートナーシップ制度やレインボー・ファミリーなど、同性同士のカップルを中心とする新たな親密な関係がいかなる社会的条件のもとに生み出され、それについてどのような議論がなされているのか明らかにするため、夏に文献調査を中心とする現地調査を行った。とくに、このようなセクシュアル・マイノリティの社会的包摂にかんして重要と思われる「人権」をめぐる問題に着目しながら、関連する資料や文献を国立図書館やヘルシンキ大学図書館等で収集した。

## 個人研究

# 触法知的障害者の更生と地域生活定着を促進するピアサポートプログラムの開発と評価

研究代表者・教授 脇中 洋  
(発達心理学・法心理学)

本研究(2012~2014年度・科研費基盤研究(C)課題番号24530750)では、知的障害が疑われる受刑者(触法知的障害者)の矯正施設出所後に地域生活定着が促進されることを目的とした更生プログラムの一環として、ピアサポートプログラムを出所前後にわたって行う。そのことによって、プログラム内容を練成しながら評価を行う実践的研究である。

具体的な研究目的は以下の(ア)~(エ)の4点に分けられる。(ア)ピアサポーター養成プログラムの練成、(イ)ピアサポート活動の試行的実践、(ウ)ピアサポートの有効性を確かめるための触法知的障害者の更生状況の評価、(エ)矯正施設や出所後の福祉施設職員への研修と評価。

司法制度改革の一環としての行刑改革は、民間活力を導入したPFI刑務所(社会復帰促進センター)を導入したり、地域生活定着支援センターを各都道府県に設



置したりすることによって、比較的犯罪傾向の進んでいない受刑者の再犯を防ぎ社会復帰を促す施策を図って来た。

だが矯正統計年報によると、年間約3万人弱の新規受刑者のうち知能指数70未満ないし測定不能の者が3割近くを占めている。この事実は、知的障害が疑われる受刑者が相当数を占めていて、出所後も地域生活定着のために福祉的な支援を必要としていることを表している。特に矯正施設出所時に帰住先あるいは就労先のない触法知的障害者は生活の基盤がなく、再犯の可能性が高いとされる(日本犯罪社会学会2009)。このため触法知的障害者等を受け入れる福祉施設を増やす目的で、施設職員向けの研修プログラムの開発がなされている(独立行政法人のぞみの園2010、2011)。

その一方で、刑務所におけるそれまでの処遇は懲罰的な意味合いの強い受刑作業を中心としてきたため、具体的な更生プログラムについては欧米諸国で行われてきた認知行動療法を中心とする再犯防止のための心理教育を試行的に導入し始めている段階である(刑事立法研究会2005)。ところが認知行動療法は当事者の知的機能を前提として行動変容を図るものであり、受刑者の理解能力を越えて心理教育を行うことに困難さを抱えている。

そもそも知的障害のある受刑者は社会的に弱い立場にあるため、被害体験を持つ者が少なくなく、自尊感情に乏しい者が多い(内田他2011)。彼らの更生の過程において不可欠なプロセスとして、自らの経歴を振り返り最低限の自己肯定感を取り戻すことも含まれるであろう。こうして過去を振り返り新たに生き直す矜持がなければ、自らの加害経験を見つめて反省悔悟し、被害者に対して慰謝の念を抱くことも難しいと思われる。こうした背景および課題のもとに、本研究では触法知的障害者の真の更生過程の一環としてピアサポート活動を構想し、その社会的実装を目指すものである。

ピアサポート活動の利点として、同じ問題を抱えている当事者同士が説明を要することなく理解し合えることや、ピアサポーターが先行して具体的に活動している生きたモデルとなるために社会復帰プロセスにおける現実的な目標になること、ピアサポーターは自分が世話を受けるだけの存在ではなく社会的役割を担って他者の役に立てるといふ喜びを抱くことができ、主体的に生きる意欲を取り戻せること、こうした活動で役割を得て責任を担う経験が就労訓練のステップの一つになること等があげられる。

なおこれまでの高次脳機能障害者を対象としたピアサポート実践(中塚・脇中2007)で明らかになった重要

な点は、社会の側に過剰に適応することを求めるのではなく自己認識を高めて適切な自己主張を図ること、ピアサポーターが相談に乗るばかりでなく可能な範囲で「活動をともしにする」点に有効性があること、ピアサポーターの残存機能が必ずしも高くなくても当事者を尊重する構えを持てばその機能と責任を果たせること、ピアサポーター養成を含めて組織的で長期にわたる支援体制を構築することがあげられる。

もちろんピアサポート活動はそれ自体で完結したプログラムではなく、他の受刑活動や生活支援と連動することによってその効果を発揮する。そこで矯正施設のみならず地域生活定着支援センター、更生保護施設、救護施設、グループホーム、障害福祉施設の職員を含めた組織間連携状況の調査研究が必要となる。

2012年度までは矯正施設出所後の社会内処遇の動向を把握するために、カナダ・ヴィクトリアのハーフウェイハウスを調査したほか、国内でも地域生活定着支援センターや救護施設、社会福祉施設の調査を行った。また社会復帰促進センターの特化ユニット(知的障害者専門の工場)のクラウニング講座における受刑者の変化を観察した。さらに社会復帰促進センターでは、教育統括担当の刑務官と共同研究に向けた協議を行い、矯正プログラムの一環としてのクラウニング講座の評価を行う方向で調整を行うことができた。

そこで2013年度は、クラウニング講座における知的障害受刑者を縦断的に調査して、自己肯定感、自己効力感の変容を調べるほか、引き続きヴィクトリアの仮出所者の聞き取り調査を重ね、新たに米国ホノルルにおける受刑者が社会復帰するプロセスを調査する予定である。これらの活動を通じて、触法知的障害者の更生状況の評価とともに矯正施設や出所後の福祉施設職員を対象とした組織論的な連携も評価対象とし、個人の発達臨床的かつ能力論的な変容だけでなく、領域横断的な調査及び評価を行う。

これら矯正施設における改善指導やピアサポート活動の最終的效果(地域での就労または安定的生活)の確認には5~7年間を要すると見込まれるが、本研究では当初3年間にプログラムの開発と実践を行い、その中間評価を行う。

## 文献

独立行政法人・国立重度知的障害者総合施設のぞみの園(2010)『平成21年度障害者自立支援調査研究プロジェクト「福祉の支援を必要とする矯正施設等を退所した障害者等の地域生活移行のための効果的な支援プログラムの開発に関する研究」報告書』

独立行政法人・国立重度知的障害者総合施設のぞみの園(2011)『平成22年度障害者総合福祉推進事業「福祉の支援を必要とする矯正施設等を退所した知的障害者等の地域生活移行を支援する職員のための研修プログラム開発に関する調査研究」報告書』

刑事立法研究会(2005)『刑務所改革のゆくえ 監獄法改正をめぐる』現代人文社

中塚圭子・脇中 洋(2007)「高次脳機能障害者が社会へつながるために」福祉と人間科学18. pp.71-93.

日本犯罪社会学会(2009)『犯罪からの社会復帰とソーシャル・インクルージョン』現代人文社

内田扶喜子・谷村慎介・原田和明・水藤昌彦(2011)『罪を犯した知的障がいのある人の弁護と支援 司法と福祉の協働実践』現代人文社

## 個人研究

### タイ国を中心とする 東南アジア撰述仏教説話写本の研究

研究代表者・本学、神戸国際大学非常勤講師 清水 洋平  
(仏教学・南伝仏教)

東南アジア大陸部の上座仏教圏には、土着の文化とハイブリッド化し、独自の発展を遂げた仏典が多く存在する。しかし、このような東南アジア撰述の仏典の多くは、現在、貝葉や折本紙による写本のまま、一部寺院の経蔵に無差別に保管されているものが多く、所在やその内容は不詳のものが多い。また、所蔵環境も良くないことから隠滅の危機に瀕している。この状態を危惧する研究者並びに研究機関がその調査・収集、或いはカタログの作成に努力している。

このような現状を踏まえての本研究は、タイ国を中心に従来より同地に継承されたクメール文字で記された貝葉写本を中心に、同国に流布する東南アジア独自撰述の仏教説話写本を調査・収集し、その網羅的な研究を目指すものである。先ずタイ国中部地域の寺院が所蔵する貝葉写本の所在目録を作成し(ほぼ完了)、個々の文献の一次資料としての資質を検証し、併せて既出の所在目録との横断的な整理を行う。そのことを通じて、東南アジア撰述仏教説話写本研究の基礎となる一次資料所在目録及びデータベースの構築とその公表を目的とする。以降、個別写本研究に進み、特に東

南アジアの積徳行について文献学的な裏づけに基づく仏教学の立場からの研究に歩を進める。

本研究は、従前の科研プロジェクト「タイ国中部地域の王室寺院が所蔵する東南アジア撰述仏教説話写本の研究」(研究活動スタート支援 22820077)を承け、その研究課題の中で作成した同地域の寺院が所蔵する貝葉写本の文献タイトルのみを記した所在目録を改善し、国内外の研究者、研究機関の要望に的確に応え得る新たな所在目録・データベースの構築を先ず行うため、本年度は、次の整理作業を実施した。

- (1)タイ国中部地域の王室寺院が所蔵する貝葉写本の所在目録の作成を通じて、浮かび上がってきた個々の文献の写本資料としての資質を整理する。(例：同一タイトルの文献であってもその内容分量に異なりがあり、同一文献に複数のバージョンがある可能性がある。よって、十分な区分けが必要である。)
- (2)これらの整理作業に加えて、本年度は、①ダブリンに所在するThe Chester Beatty Library(世界各地から集められた写本を中心とする2万点以上の美術品を収蔵することで有名)、並びに②ロンドンに所在するThe British Libraryを訪問する機会を得た。従って、これらの機会を活用し、上記(1)の整理作業を進める中で他の写本との比定確認の必要性が生じた一部の文献について、両図書館が所蔵するクメール文字パーリ語写本の中から、関連する文献写本との比定確認の作業を実施した。①では、ペンシルバニア大学のDr. Justin McDaniel准教授、中村元東方研究所の田辺和子博士の協力により実施できたものであり(2012年9月16日、17日)、②は、The British Libraryからの招聘依頼があり、両図書館が所蔵する未公開の東南アジアのパーリ語仏典写本資料について調査を行う機会を得たため、その折りに実施したものである(2013年2月15日～3月16日：但し、3月7日～14日までは大谷大学真宗総合研究所の業務を行った)。

これらの比定確認の作業により、上記(1)の整理作業に伴う、その正確性を高めることができた。

尚、本年度は、2012年8月20日に東京国立博物館で開催された平成24年度アジア民族造形学会大会において、今までの調査で得られた様々な情報の中から、特に写本に関わる全般的な造形に視点を当てた研究発表を行うと共に、発表内容を『アジア民族造形学会誌』第13号に執筆した。また、The Chester Beatty Libraryが所蔵するクメール文字パーリ語写本のうち、東南アジア撰述の仏教説話文献と関連の深い写本についての比定確認の作業については、その調査の報告の一部を『大谷大学真宗総合研究所研究所報』第61号に掲載した。

## 個人研究

後期田辺哲学における  
象徴概念の研究

研究代表者・本学非常勤講師 竹花 洋佑  
(哲学・日本哲学)

本研究の目的は、田辺元の象徴概念の理解を通して彼の後期哲学の意味と可能性とを明らかにすることである。本研究は次の三つの課題から構成されている。(1)田辺の象徴概念の基本的意味とその思想史的背景を明らかにすること。(2)後期の田辺哲学の中での象徴の意味を、彼の宗教哲学ないしは共同体論の核心的概念である「実存協同」との関わりにおいて解明すること。(3)『ヴァレリーの藝術哲学』および『マラルメ覚書』の中で田辺が論じる象徴詩の問題との関係で田辺の象徴概念の具体的な可能性を明らかにすること。

第一に、象徴概念の基本的意味を明らかにしておくことが研究の前提として必要とされる。まず田辺が象徴概念を提起する際の背景を発展史的および思想史的なアプローチから明らかにすることが求められる。象徴概念は後期哲学の出発点となった『懺悔道としての哲学』において重要な位置を占めるものであるが、しかしそれはかなり唐突な仕方でも語られるものである。したがって、象徴概念の基本的な意味を理解するためには、田辺のそれまで思索の展開において象徴ということが論じられる必然性がどのようにして生じてきたのか、さらにそうした必然性が生まれる契機となった思想史的背景はどのようなものであったかを理解する必要がある。第二に、象徴と種という二つの概念の関連性を捉えることが求められる。両者は共に否定的媒介性という意味を担う概念であり、象徴の基本的意味を捉えるためには、その否定的媒介性の内実が種とどのような共通性と相違性をもつのが具体的に見定められなくてはならない。

第二の課題は、後期の田辺哲学の中での象徴概念が有する意味と位置とを、彼の宗教哲学ないしは共同体論の核心的概念である「実存協同」との関わりにおいて解明することである。象徴と種との関連性を捉えるにあたって留意されなければならないのは、否定的媒介性を担うものは種から象徴へと移行するにもかかわらず、後期においても種という概念は放棄されている

わけではない点である。後期における種と象徴との並存という問題を捉えるためには、媒介性という論理的なアプローチ以外の視点が求められる。すなわち、種も象徴も共に田辺の共同性の概念に関わりをもつことに注目することによって、後者の前者との関わりおよび後者の概念の後期における位置を田辺の「実存協同」という構想との関係で明らかにする必要がある。

最後に田辺が論じる象徴詩ないしは象徴主義との関係で象徴概念の具体的な意味を明らかにしていく。そのためにはまず田辺がヴァレリーやマラルメの象徴詩をどのように理解しているかを明らかにすることが必要となる。田辺の象徴詩の解釈の内実を、田辺が批判的に対決している解釈やそれ以外の現在の主な解釈との関係で明らかにした上で、象徴概念の哲学的意味の解明を行っていく。具体的には、その意味を死や偶然性の問題において顕わとなる人間の個性性と「実存協同」として語られる個体の共同性とが結びつく地点として捉えることを目指していく。

このような研究の目的をふまえて、2012年度は以下の研究を行なった。

- (ア)田辺の思想形成において西田哲学が果たした役割、具体的にいえば、西田の「絶対無」概念を厳しく批判したはずの田辺がなぜその後「絶対無」という概念を受容することになったのかという問題を、『ヘーゲル哲学と弁証法』における田辺の思想を発展的に精査することを通して明らかにした(『田辺の思想形成と西田の『永遠の今』』、『日本の哲学』第13号、日本哲学史フォーラム、昭和堂、2012年)。
- (イ)田辺が戦前・戦後を通じて一貫して「種」の概念に込めているNatur in Gott(神における自然)あるいは「プラトンの質料」という考えの持つ意味を「種の論理」の修正の問題との関係で捉えることを試みた(『種の論理の基本構造とその展開—「種」概念の修正の意味をめぐって』、日本哲学史フォーラム、2012年7月12日、京都大学)。
- (ウ)西田哲学と田辺哲学とを共に「生の論理」として把握した場合、田辺の「生の論理」の特質が、西田におけるような生命の表現の論理ではなく、生を否定的媒介性とみなすところにあることを明らかにした(『生と論理—西田の田辺批判と「種の論理」の意味』、『日本の哲学』第14号、日本哲学史フォーラム、昭和堂、2013年)。

この中で特に重要なのは(イ)と(ウ)の研究である。本研究は、田辺の「絶対媒介の論理」の中心概念である否定的媒介性の所在が戦後においては「種」から「象徴」へと移行しているにもかかわらず、戦後においても「種」

の概念が重要なものとして残り続けるのはなぜかという問いを明らかにすることを大きな課題とするものであるが、(イ)で明らかにした「種」概念の性格はこのことを捉えるために欠くことのできない視点である。また、田辺は「象徴」という概念を常に「表現」との対比で用い、後者に対する前者の意味を強調するが、このような枠組みが田辺において最初に形成されて行く場面を(ウ)において明らかにしている。

## 個人研究

### バガヴァティー・アーラーダナーの 新校訂本作成と全訳による ジャイナ教の断食死研究

研究代表者・任期制助教 河崎 豊  
(インド学・仏教学)

修行の最終段階で断食死を選択することを理想とする点は、ジャイナ教修道論における大きな特徴の一つであり、ジャイナ教史の最初期以来、ジャイナ教徒は断食死を実行するためのマニュアルの内容を有する教典群を、連綿として作成し続けてきた。

そのような教典群の中で、最重要の価値を持つ文献の一つとして位置づけられているのが、シヴァーリア(1～2世紀)作『バガヴァティー・アーラーダナー』(以下、BhA)である。現在ではジャイナ教空衣派の代用聖典の一つである BhA は、断食死に至る次第を扱う、まとまった記述を持つ文献としては現存最古のものである。また、言語学的に未だ十分に解明されていないジャイナ・シューラセーナ語という中期インドアーリア語のひとつによって記述されていること、当時の俗信や文化史的な情報を豊富に含むことなど、広くインド古典学・言語学に貴重な情報を提供する。

しかしながら、BhAの全体が現代の学問的水準に照らされた上で批判的に校訂されたことも、また全編にわたって批判的に現代語訳されたこともない。従って、BhAに関する研究は極めて低調であるのが現状である。

そこで本研究は、

- ①ヴァーリア(1～2世紀)作『バガヴァティー・アーラーダナー』(以下、BhA)の、写本に基づく新たな校訂本の作成
- ②新校訂本に基づく現代語訳の作成

③以上2点を行なう上で付随する、個別的な教義研究の3点を大きな目的として企画されたものである。

研究初年度である本年度は、予備的作業を中心として以下のことを行なった：

まず、現存するBhAの写本の所在を調査するため、ジャイナ教の写本カタログを入手し確認する作業を行なった。具体的にいうと、ヨーロッパで出版された写本カタログについては、Catalogue of the Jaina Manuscripts at Strasbourg および Die Jaina-Handschriften der preussischen Staatbibliothek の2カタログを、インドから出版された写本カタログについては、Descriptive Catalogue of Manuscripts in the Government Manuscripts Library のジャイナ教部分のほか、Asiatic Society of Bombay が所蔵するジャイナ教写本のカタログ、またパタンとジャイサルメールにあるジャイナ教図書館の写本カタログを確認した。更に、Descriptive Catalogue of Manuscripts Preserved in Devarddhigani Ksamamramana hastapratā Bhandagaraについても出版分は確認を行なったが、当該カタログは現在も出版が継続中であり(現時点でvol.15まで出版)、このカタログについては次年度以降も随時確認していく予定である。

次に、代表者が作成した暫定的なBhAの校訂本と下訳に基づき、2012年10月より毎週一回のペースで研究会を開催し、原典および訳文について検討を行なった。本年度に取り扱ったのは、BhA第33章「連続的指導」部分のうち、「真実語の掟」箇所全体(817詩節以下)と、それに続く「不淫の掟」箇所(871詩節以下)である。「連続的指導」とは、断食死の直前に、修行者の耳元で師僧らがジャイナ教の主要な教義を囁いて「おさらい」させるものである。そしてその内容は、初期のジャイナ教思想・実践論を研究する上でも看過し得ない価値を持つと判断し、当該章の検討から始めることとした。

この研究会での検討を経た研究成果として、まず「真実語の掟」箇所については、そこで扱われる「正しくないことば」の概念を、他のジャイナ教文献における類似箇所と比較し、BhAが真実語・虚偽の概念を、広く「会話のマナー」の一環として再解釈・再編成している事実を指摘した内容の論考を作成した。この論考は、『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』24号(2013年秋に出版予定)に掲載される予定である(原稿受理・初校済)。

次に、後者の「不淫の掟」の箇所は分量が膨大であり、現在も当該箇所の研究会は継続中である。ただし、当該箇所の冒頭部分における「10種類の非性的禁欲」という法数項目について、白衣派聖典に見られる類似的法数項目の内容と比較検討した上で、「10種類の非性的

禁欲」の祖形的法数を白衣派聖典に求めることは不可能であること、BhAの著者のシヴァーリアは、当時彼が知り得た聖典・注釈に散在する性的禁欲に関する記述を収集し、独自の法数項目にまとめ上げた可能性が強いことを指摘した論考を準備した。この論考は、『中央学術研究所紀要』42号（2013年秋に出版予定）に掲載される予定である（原稿受理済）。

## 個人研究

# 保育者の悩み・学習ニーズの変容と同僚性を基礎とした研修に関する実証的研究

研究代表者・任期制助教 黒澤 祐介  
(社会福祉学)

### 1. 研究の目的

本研究では、保育者の悩みがどのように変容していくのか、また、どのような保育者を取り巻く環境要因が変容に影響を与えているのかを、「同僚性」に着目しながら、2年間のアンケートによる追跡調査で実証的に解明する。

また、7名の新人保育者に対して同僚性を基礎とした多職種による協働的なカンファレンス型のモデル研修を実施し、アンケートによる追跡調査を利用して、その効果を他の新人保育者と比較し評価する。

### 2. 研究の方法

2年間を通じて、京都市内の公立保育所26ヶ所の約400名の正職保育士（除く管理職）に対しアンケート調査を実施する。調査項目は、同僚性に関する淵上（2005）の研究の質問項目を参考にした。年齢、経験年数等の保育者の属性/保育に対する満足度/保育での悩み/同僚性、相談、サポート状況/各種研修の状況/職場環境、等について、計138項目を主に4件法で調査した。

アンケート用紙は各保育所で保育者に配布してもらうが、回収については個別の郵送にて行った。調査対象保育士には個人IDを付与した上での追跡調査であることを説明し、同意の上で2年間に4回の追跡調査を行う。

第1回目（平成24年9月実施）のアンケート回収数は247通であり、回収率は60.3%であった。

### 3. 結果

第1回目のアンケートで「同僚性」に関わる質問項目と相関関係があった主な項目は以下の通りであった。

「管理職との関係はよい」と相関関係があった項目 〈研修について〉 「自身のメンタルヘルスについての研修を受けたい」	$p < 0.05$ $r = -0.130$
〈職場について〉 「勤務時間・勤務体制に満足している」	$p < 0.05$ $r = 0.155$
〈職場内の会議について〉 「発言に対して、周りは共感の反応を示してくれることが多い」	$p < 0.01$ $r = 0.991$
「職場の研修体制は十分に整っている」	$p < 0.01$ $r = 0.194$
「同僚保育者との関係はよい」と相関関係のあった項目 〈葛藤を感じる場面について〉 「保護者への対応はどうかについて保育所の方針と葛藤がある」	$p < 0.01$ $r = -0.190$
「気になる子どもについてどう考えるかについて保育所の方針と葛藤がある」	$p < 0.01$ $r = -0.226$
〈ストレスについて〉 「仕事のために心にゆとりがなくなったと感じることがある」	$p < 0.05$ $r = -0.133$
〈研修について〉 「保育の基礎的理解の（年齢ごとの発達特性など）の研修を受けたい」	$p < 0.05$ $r = 0.160$
「自身のメンタルヘルスについての研修を受けたい」	$p < 0.01$ $r = -0.269$
〈職場について〉 「勤務時間・勤務体制に満足している」	$p < 0.05$ $r = 0.157$
〈満足感について〉 「今の仕事に心から喜びを感じることもある」	$p < 0.01$ $r = 0.255$
「この仕事は自分の性格にあっていると思う」	$P < 0.01$ $r = 0.195$
「保育の仕事に満足している」	$p < 0.01$ $r = 0.210$
〈職場内の会議について〉 「会議においては全員に発言権が確保されている」	$p < 0.01$ $r = 0.221$
「リーダーの意見のみが重視されることがある」	$p < 0.01$ $r = -0.228$
「職場の研修体制は十分に整っている」	

$p < 0.01$   $r = 0.182$

#### 4. 考察

会議において管理職が指導的ではなく「発言に対して共感を示す」ほど保育者との関係も良いという分析結果が出た。一方、同僚保育士との関係の良さは、会議で「全員の発言権の確保」や「リーダーの意見のみが重視」されることと相関していた。これらの結果をふまえ、今後のカンファレンス研究では、管理職からの「共感」や保育者同士の「対等性」を重視することで、カンファレンスを通じて同僚性をどのように育むか実証的に解明する。

また、管理職・同僚保育士との関係性の良さに「勤務体制」や「研修体制」の良さに関連していることの意味を考察していく必要がある。自由記述では「時間外勤務が多く、わが子のことを丁寧に見られない」や「その日の体制の自分のところだけを見る職員も多い」などに意見があり、実際の事務作業量やシフト等の体制がどのようになっているのか、今後詳しく調査をすすめたい。

### 個人研究

## 「民族学校」の日韓比較研究 —日本の「朝鮮学校」と 韓国の「華僑学校」を中心に

研究代表者・任期制助教 宋 基燦  
(社会人類学)

この研究は、日本の「朝鮮学校」と韓国の「華僑学校」への人類学的現場研究を通じて、各々の学校の現状とその教育のもつ意味を実証的に把握し、それを比較することによって、異質な民族集団に対する日本と、かつて日本の植民地だった韓国両国のナショナリズム言説と実践における連続性と差異を実証的に確認することを目的としている。

この研究の目標を達成するために、本研究は現場研究の場所を基準に大きく「朝鮮学校の研究」と「韓国の華僑学校の研究」に分けて進められている。ところが、本研究の代表者の職場が日本にあるため、「韓国の華僑学校研究」は時間的・空間的な制約がある上に、韓国の華僑学校の閉鎖性は、学校空間に対する現場研究

の障害になっている。

そのために韓国の華僑学校とそのエスニックコミュニティに対する調査は、朝鮮学校への研究から確認された「争点」に絞った形で随行されている。現時点まで韓国の華僑学校への調査は、主に文献調査と韓国の仁川市におけるチャイナタウンの華僑コミュニティへの参与観察で行われている。現在は関係づくりと、共同体の文化・景観と地方自治体の行政との関係などへの理解を中心に現地調査を進めているが、今年の調査では華僑学校とその学生、保護者に対する調査を進めていく予定である。

今年の夏休み期間中に行われる予定の学校現場への調査のために、7月17日から21日まで予備調査を行ったが、今まで学校への現場研究に否定的だった華僑学校の校長先生から学校の現場研究に関する前向きな返答をもらうことができた。8月末から予定されている本調査の結果と今までの調査内容をまとめて今年10月12日に開かれる日本社会学会大会で報告する予定である。

朝鮮学校への調査は、本研究の代表者が過去に調査した「J初級学校」と「H中級学校」に対する再調査と過去の研究当時の生徒と教師、保護者への追跡調査の二本柱で進められているが、現在のところは、過去の研究当時の関係者への追跡調査を中心に、過去の調査記録の再解釈を試みている。特に朝鮮学校の卒業生へのインタビューは、10年前の調査の時は中学生だった卒業生自ら当時の経験を語ってもらうことで、当時の調査内容と照らし合わせて調査内容を確認することができる。また当時は聞く事ができなかった、いろいろな出来事に対する成人になった卒業生自らの「解釈」は、とても興味深く、当時の研究内容を修正し、これからの研究の方向性を考える上で大変参考になるのである。

### 個人研究

## 作家疑滞文学からみる 「満洲国」時代の中国文人の 心象風景に関する研究

研究代表者・教授 李 青  
(中国現代文学・中国語)

2012年度は作家疑滞文学からみる「満洲国」時代の中国文人の心象風景に関する研究をテーマとした。一年

間に亘る研究成果としては、次の四点に纏められる。

### 一、二度に亘る現地調査。

最新の研究動向の調査を含めて、2012年5月2日から7日まで、国家図書館（北京）を中心に資料調査を実施した。

古い時代の資料のデジタル化に伴い、地方に散逸されている貴重な資料が国家図書館に集められているという。そこで今回は満州国関係の最新研究を念頭に置きながら、ここ5年来の博士論文、修士論文を中心に閲覧、ダウンロードをするのが、最大の目的だった。満州国の研究はすでにこれまで多くの成果があった。特に中国人文芸グループ「芸文志派」に関する研究は盛んになった。新しい研究書や専門書を閲覧していくうちに、見つけることができた。

北京での調査中に三回ほど国家図書館に足を運んだ。システムは利用しやすいように改善され、筆者にとっては短時間に多くの資料に触れることができた。ただ、時間が短かったこともあり、よく分からない部分もあり、うまく見つけられない資料があった。次回の調査時にもう少し丹念に資料を読みたい。

この度の研究対象の疑滞は「芸文志派」の重要なメンバーであり、創作に於いてロシア文学の影響を受けている。ロシアの存在は疑滞文学及び満洲国時代の中国文人にとっては、無視できない一要素の一つだと考えられる。東北地方に生まれ育った作家達はロシア文化との接点是如何なるものなのかを解明する目的で、大連と旅順を調査地にし、平成25年3月23日から27日にかけて、元南満洲鉄道株式会社（以下、「満鉄」略す）と日露戦争の激戦地だった旅順を訪れた。

満鉄本社は大連に設置しており、付属図書館の規模は大連のが一番大きいと言えよう。残念ながら、今回は工事のため、資料を閲覧することはできなかった。満鉄本部の見学は印象深かった。入り口の天井に垂らしたしゃれたシャンデリア、柱の彫刻、階段の美しい取っ手、……往時の満鉄の栄光と植民地に施された建築の工夫を伺わせた。陳列館に満鉄の歴史、満鉄社員たちが使っていた道具及び様々な遺留品が展示されていた。

続いて日露戦争の跡地である旅順で日露戦争の跡地や日露監獄旧址などを見学した。

### 二、中国の若手学者との交流

中国では、植民地の研究は80年代から始まり、以来研究成果の多くは世界に注目されている。若手の研究者の輩出は植民地研究に新しい息吹をもたらした。昨年五月に一回目の研究調査時に清華大学の王成教授をはじめとする研究者とも研究成果や将来の協同研究の可能性について意見交換することができた。今年の3

月に大連旅順での研究調査で大連科技大学の本学の留学生だった張彤准教授と交流する機会をもつことができた。張さんは自身と仲間達の研究を紹介してくれた。若手研究者の間で植民地時代の研究が盛んに行われていることを知り、今後は共同研究の路を切り開く約束をした。

二回目の実地調査では作家達が当時置かれた創作環境の現場に立ち、往事の心境を感じ取ることができた。

### 三、貴重な史料の入手

国家図書館では多数の博士・修士論文を多数入手した。若手研究者の研究動向、研究方法、史料の使用方法を垣間見ることができた。他にマイクロフィルムによるコピーができた。なお、清華大学の王成教授との交流から学術界の最新活動状況や出版状況を紹介して頂き、参考になった。国家図書館にしき所蔵していない貴重な史料に触れることもできたのが意外な収穫である。

二回目の資料収集は満鉄図書館に関わる施設の調査や「満洲国」時代に縁のある地方の見学を中心に行った。満鉄関係の資料や植民地建築などの資料を大連で入手した。

特に、協定校東北師範大学歴史学科の曲曉範先生から、昨年整理されたばかりの『鞞印深深—ある偽滿軍官の日記』を紹介された。日記の著者は満洲国の軍人であり、1938年1月から1945年12月（ただし1944年は散逸）の日記である。日記の内容は大変豊富であり、身辺の雑事ばかりでなく、国際情勢や「満洲国」の様々な出来事が克明に記されており、往事の「満洲国」の情勢を理解する格好な一次資料と言える。

### 四、論文発表

研究期間中に論文を二編発表することができた。「『新京図書館月報』からみる〈満洲国〉時代の文化」（『文藝論叢』第79号 2012年10月）では、『新京図書館月報』から反映された中国人作家とその創作を中心に論じた。「芸文志派」、特に主要メンバー古丁などが深く関わっていたことが分かった。主に『新京図書館月報』を分析した。

二編目の「『新京図書館月報』のライブラリアンたちの記録(一)」（『文藝論叢』第80号 2013年3月）では、ライブラリアンたちがどのように図書館運営、図書館報に関わってきたのか、文学者たちと図書館報の関わりは如何なるものなのか、彼等の書いたものを中心に分析した。

一年間の研究生生活の中で、旧満鉄図書館に所蔵されていた書物を中心に、中国人作家、とりわけ「芸文志派」グループに焦点を当てながら見てきた。実地調査

と満鉄資料の収集によって、「芸文志派」及び研究対象とする疑滞文学に対する理解が深まった。本研究は多くの収穫があったものの、課題がけっして完結した訳ではない。今後は更なる資料の発見に努めながら、問題の核心部分に迫りたい。

## 個人研究

# 日本中世における 治水・利水に関する史料的研究

研究代表者・任期制講師 川端 泰幸  
(日本中世史学)

### 1. 研究目的

農業を基本的生業とする前近代日本では、生産を安定的におこなうための治水・利水が不可欠の営みであった。用水確保や災害対策において、その技術や知恵が現代にまで活かされている場合も少なくない。本研究では、開発の時代とも呼ばれる日本中世の治水・利水関係の文献・金石史料を網羅的に収集し、8世紀～16世紀後半の列島社会における治水・利水の特質と、治水・利水を媒介とする人びとの営為を明らかにすることを目的とする。

もとより、治水・利水に関わる研究はこれまでも多くの研究者によってなされてきた。とりわけ、農業構造改善事業の一環である圃場整備事業が展開した1970年代以降、中世以来の農村景観が失われていくという危機に直面した歴史学界が、景観保存・復元を目指した荘園調査では、治水・利水は重要な課題として位置づけられた。ただし、これらの現地調査・復元研究と、膨大に残されている文字史料をつき合わせていく研究は決して多くない。そこで、本研究では古代・中世の刊本史料集から網羅的に治水・利水に関わる史料を収集し、その特質を検討し、日本史における治水・利水の変化過程を跡づけることを目的とした。

### 2. 方法

今回は1年という期間に収集・検討することが可能な範囲として、8世紀末～12世紀に焦点を絞ることとした。この期間は、日本史の時代区分としては古代も含んでいるが、中世における治水・利水の特質を知るためには、古代からの連続・不連続を捉える必要がある

ため、この範囲を設定した。基礎作業としては、8世紀末の天応元年(781)から12世紀後半の元暦2年(1185)に至る主要な古文書類を網羅的に収集した史料集『平安遺文』を基本テキストとして位置づけ、治水・利水関係史料の収集・検討を行った。

### 3. 成果

9世紀における治水・利水に関わる記述が登場する早い例としては、官吏交代にあたっての規則などをまとめた『延暦交代式』に引用された太政官符が挙げられる。そこには「応に溝・池・堰・堤を修理すべき事」と記されるとともに、「事は良田に帰す、良田の開きは実に溝・池に在り、」とあって、農業生産向上・安定化のために、溝や池・堰・堤などの修理を国家が推進したことが窺える。こうした国家主導的な農業政策は、大和国益田池(現奈良県橿原市)の築造事業などからも見る事ができる。益田池は国家が銭100貫文という莫大な公費を大和国に対して給付し築造させた農業用灌漑池であり、国家公共事業としての農業振興策であった。

災害への対応という点では、たとえば、山城国の鴨川・葛野川(桂川)などの首都を流れる大河川の洪水被害を防ぐために、防鴨河使や防葛野河使という役職が設置されている。この二つの役職は、平安京という都市における災害対応の一つと位置づけられよう。こうした傾向は大規模災害をたびたび被った9世紀の特徴でもある。著名な貞観11年(869)5月の貞観大地震では陸奥国が多大な人的・物的被害を経験するとともに、翌々月の7月には肥後国でも台風・津波が発生して、6郡にわたって水没するという被害も受けている。これらに対する国家の対策についてはなお検討しなければならないが、各国の官吏などからの報告が迅速に上申されており、水害対応への意識もかなり高まっていったものと考えられる。さらに、2年後の貞観13年(871)閏8月には異常気象が重なり、大雨によって京都でも大洪水・水難の被害を受けており、この時は鴨川堤防の強度を弱めるという理由から周辺地域における耕作を禁じるという対応を行っている。このような国家による情報の収集と対応というかたちは10世紀にも同様に看取されるものである。

続いて、11世紀ごろに入ると、治水・利水のあり方が大きく変化することも明らかとなった。あくまで、文献史料から読み取れる範囲のことではあるが、11世紀以降はそれ以前の国家主導型から、東大寺や東寺など各地で大規模な所領=荘園をもつ荘園領主が主導する型に変化するのである。荘園制とは、寺社や貴族・王家



などいわゆる「権門」と呼ばれる諸権力体が、それぞれの経営基盤として各地に大小さまざまな規模の荘園を保持し、経営を展開していくものであり、治水・利水も、現地⇄荘園領主という枠組みの中において展開されるようになる。以上のように、膨大な史料群の網羅的収集・検討の中から、国家主導型から荘園領主主導型の治水・利水へと変化していく過程が、古代末から中世前期の転換であることを明らかにすることができた。なお、この研究で得られた成果の一部は「日本中世の水利と共同体」(『中国水利史研究』第41号、2013年)に反映した。

## 個人研究

# 日本における子供向け シェイクスピア 翻案物の研究

研究代表者・准教授 三浦 誉史加  
(英文学・英米文化)

本研究は、明治期から現代にかけて、様々なメディアを通して日本で発信された子供向けシェイクスピア翻案物を分析し、少年少女を主な消費者層としたシェイクスピア表象の大きな枠組みの中で検証しながら、日本の子供教育においてシェイクスピアが持つ役割を明らかにする取り組みの一助とすることを目的とし、明治期から昭和期にかけて発行された少年少女向け雑誌に掲載された改作に焦点を当てた。国立国会図書館、菊陽町図書館、大阪府立中央図書館国際児童文学館、神奈川近代文学館、都立多摩図書館を中心に収集した雑誌掲載作品のうち、2012年度は『ハムレット』<sup>i</sup>『テンバスト』<sup>ii</sup>について研究発表を行った。

子供向けの雑誌に『ハムレット』が発表されたのは、明治20年代に入ってからのものであった。<sup>iii</sup>現時点までに、明治期から昭和期までの少年少女雑誌を調査して見つけた『ハムレット』ものは、少女雑誌13篇、少年雑誌1篇である。少女雑誌掲載分に特徴的であるのは、少女を読者対象とする性質上、オフィーリアの苦悩が焦点化されるなど、プロットが少女を軸に展開する傾向にあることである。それが最も顕著な形で表れているのは、宝文館より発刊された『小令女』(大正15年6月号)に掲載された「オフィリヤ」(櫻木暮路・文)で

あろう。櫻木版ではハムレットはほとんど登場しない。本作の関心の焦点はデンマーク国内の政治性ではなく、あくまでオフィーリアという少女である。

少女を中心に展開する型においては、オフィーリアは原作以上に無垢で安全となる。そればかりか、クロウディアスを始めとする他の登場人物がオフィーリアの役割を引き受ける形で、その少女性は周囲へと拡散し、管理される少女と、少女を管理する側の境界線を曖昧にしている。ここでは、少女だけではなく、彼女を取り巻く世界そのものが純粹で不可思議な少女と化しているのだ。戦後昭和20年代の少女雑誌においても、こうした傾向が継承されている。

『テンバスト』においては、少女の焦点化がエアリエルの役割を変質させる。同作品の子供向け改作物のほとんどは、チャールズ&メアリー・ラム著『シェイクスピア物語』に準拠している。ラム版では、エアリエルはいわば語り手の役割を担っており、1888年の日本初訳以降に出版されたラム訳のほとんどはそれを踏襲しているのに対し、同作品において対象読者が児童であることを初めて書籍タイトルに謳った蘆谷蘆村著『こどものシェイクスピア』(警醒社、1926年)所収版では、語り手としての性質を示す台詞をカットしている。これを始めとして、蘆谷版はエアリエルの役割を縮小し、幻想性を弱める傾向を持つ。

蘆谷版に特徴的である幻想性の縮小が再び現れるのが、戦後数年経った少女雑誌(『少女ロマンス』昭和25年4月号、『少女サロン』昭和28年11月号掲載分など)においてである。いずれも、ラム版に比べてエアリエルが登場する場面が割愛される一方で、ミランダの描写を格段に増やしている。そこでは、ラム版における家父長制の範疇を超える可能性を示唆するミランダの台詞はカットされ、美しく愛らしい、夢見る少女としてのミランダ像が強調されている。少女への関心が、超自然的存在であるエアリエルへのそれを凌駕しているのである。

明治政府が教育制度の近代化を促進する中で、少女達は男子教育から分離され、良妻賢母になる前のモラトリアム期を女学校で過ごすことになる。この時期は、女性の一生において特別な時期であると見做されるようになり、少女は神秘的で繊細なものとされ、少女時代は高い価値を持つようになる。<sup>iv</sup>少女雑誌表紙に描かれるこうした儂げな少女像は、太平洋戦争期、銃後を支える激しい労働に耐えうるたくましい少女像への変化を経て、終戦を迎えると再び大正期の少女像へと帰帰する。<sup>v</sup>こうした少女像は、1950年代以降、アメリカ式生活スタイルを取り入れた強い女性のイメージへと

主役を譲り渡すことになる。櫻木版ハムレットにおける作品世界そのものの少女化、また蘆谷版及び『少女サロン』『少女ロマンス』版に見られるミランダの描写はそれぞれ、大正末期に継続していた特別視された少女像、及び戦後の一時的な回帰を反映していると言えるだろう。

今後の展望としては、他作品の分析を加え、欧米圏の少年少女雑誌と比較しつつ少女表象について考察を深め、日本における子供向けシェイクスピア物研究の足掛かりとしたい。

- i 「日本の少年少女雑誌における『ハムレット』子供向け翻案物」とのタイトルにて、日本イギリス児童文学会第42回研究大会（於：大東文化会館）において2012年11月25日に口頭発表を行った。
- ii “A Study on Children’s Tales Adapted from *The Tempest* in Japan”とのタイトルにて、The 34th International Conference on the Fantastic in the Arts: Fantastic Adaptations, Transformations, and Audiences（於：Orlando Airport Marriott）において2013年3月23日に口頭発表を行った。
- iii 川戸道昭・榊原貴教編『明治のシェイクスピア《総集編》』第2巻、大空社、2004年、388頁。
- iv 今田絵里香「「少年」から少年・少女へ—明治の子ども投稿雑誌『颯才雑誌』におけるジェンダーの変容」『教育学研究』71(2), 2004年, 221-222頁。
- v 大塚英志『少女雑誌論』, 図書印刷, 1991年, 19頁。

## 海外学会参加報告①

### 第16回国際真宗学会学術大会参加報告

国際仏教研究 元研究員・教授 木越 康

国際真宗学会(International Association of Shin Buddhist Studies)は、仏教に対する関心が国際的に高まる中、1982年に創設された学会である。発足当初は、龍谷大学を中心とした本願寺派の真宗・仏教研究者や、開教使・門信徒などを中心とした会員で構成され、国際的視野の中で真宗に関する研究発表や開教に際しての課題等の報告がなされていた。1987年のカリフォルニア大学での大会から大谷大学の教員や大学院生が参加するようになり、以来、国際仏教研究班からは大会毎に研究員を派遣し参加を続けている。1993・2001・2010年の3回は本学会を会場として学術大会が開催され、国内外から多くの研究者の参加を得ている。

本年度は、5月30～6月1日の日程で、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学を会場として開かれた。テーマは“Global Pure Land Buddhism: From Its Beginnings to the Present Day”ーグローバル浄土仏教：その起源から現在までーであった。このテーマに表れているように、今大会は、これまでとは多少異なった意図をもっての開催であった。

学会名称に「国際真宗」とあるように、同学会はもちろん「真宗」、つまりは親鸞思想の研究を目的として発足した学会である。しかし今回は、「真宗研究」という専門的学問領域の枠を取りはらい、「浄土教研究」という領域の中から「真宗」を相対化するという試みとして開かれたのである。

広く浄土教思想史の中に「真宗」を置いたとき、それは鎌倉期の日本に活躍した親鸞によって興された浄土教思想のひとつの形態として了解されることになる。親鸞思想そのものが持つ普遍性をここではあえて留保するならば、歴史的にも思想的にも、ブッダの思想を源流とする浄土教思想が、その後多様化していく中でみせたひとつの現象として、「真宗」が理解されることになる。同学会が国際社会に開かれた形で大会を重ねていく限り、このような課題に突き当たることは、当然のことであったとも言えよう。今大会趣旨文には、それについて次のようである。「浄土教はあらゆる点で現代世界において最大の規模と影響力をもつ仏教のひとつである。真宗は、実践的にも思想的にも、あるいは独立したひとつの宗派としても、仏の浄土を志向するという点でそれら

と共通したものである。仏国土を建立した仏は、西方世界に浄土を建立した無量光仏、または無量寿仏を指すケースが多い。この国土や仏に関わる宗教的実践、思想、社会集団の形態はどのようにして歴史に出現したのであろうか。こうした様態を我々はどうすれば上手く描写し分析できるであろうか。日増しにグローバル化する世界において、各浄土教が直面している課題について我々はどう理解しているのであろうか。(原英文)」このような趣旨にもとづき、第1日目の夜にオックスフォード大学のゲルギオス・ハルキアス博士によるチベット浄土教に関する講演、2日目には東京大学の下田正弘教授によるインド浄土教に関する講演があった。下田教授は“Early Pure Land Buddhism Manifesting as Written Text in Ancient India: A Background for the Emergence of Buddhism of Otherness and Other Power”(書写経典として古代インドに現れた初期浄土教：「他者性」と「他力」の仏教が興隆した背景)という題で、書写経典という新たな媒体の特性を重視した大乘仏教起源論の中に初期浄土教を位置づける最新の理論を展開された。講演後は、ローザンヌ大学のインゴ・シュトラウフ教授(『阿闍国経』に酷似する内容を含み2世紀書写と推定されるガンダーラ語写本を研究中)との間で活発な質疑が交わされ、聴衆は初期浄土教研究の最先端に触れることができた。

大会は3日間で16パネルが設けられ、真宗を含めた日本浄土教や中国浄土教に関する研究、インドにおける考古学的仏教研究など、内容は多岐にわたった。その中で当研究班は、国際真宗学会発足以来、初めての龍谷大学との共同パネルとして参加し、Original Features in Shinran's Pure Land Thought: Focusing on His Elucidation of Faith and Realization(親鸞の浄土思想の特質ーその信と証の解明に注目してー)という題で研究発表ならびに討議を行った。メンバーは龍谷大学の那須英勝教授と嵩満也教授、Institute for Buddhist Studies(仏教学院)のゲーレン・アムスタッツ氏、大谷大学からは筆者に加え、井上尚実国際仏教研究班チーフとマイケル・コンウェイ嘱託研究員であった。

大会には既述の趣旨にもとづき、欧米で活躍している浄土教研究者が多く参加することが想定されたため、

日本で数回持たれた事前の合同検討会で、特に「信」と「証」の問題に焦点を絞って親鸞浄土教の思想的特徴を紹介し、専門的考察を加えることをパネル内容とすることを確かめ、各自それにもとづいた発表を行った。まず「信」の問題について嵩先生は“Historical Development of the Idea of Directing Virtue and Shinran's Idea of *Tariki Shinjin*”（回向という概念の歴史的発展と親鸞の思想における他力信心）という題で、親鸞が語る他力信心の背景に、曇鸞が『浄土論註』に取り上げている「回向」の課題があると論じ、曇鸞が親鸞の思想に及ぼした影響の一側面を明示した。次に、“The Originality of the Understanding of the Mind of Faith in Shinran's Pure Land Buddhism”（親鸞浄土教における信心理解の独自性）という発表において筆者は、親鸞の浄土教思想の一つの特徴としてある「他力の信心」を、特に法然思想の継承という側面から考察した。続いてパネルは「証」の問題に展開し、那須先生から、親鸞が提唱した現生正定聚の先駆者として源信について発表が行われた。“Genshin's Discovery of the Easy Way to Receive Confirmation for Enlightenment (*vyākaraṇa*) in the Present Life（源信が発見した現生における授記の簡単な方法）という題目で、『往生要集』に論じられている授記が、

観念念仏による救済構図の簡略化を暗示していることが述べられた。井上チーフは、“The ‘Awakening’ Open to All People: *Sotāpanna* (stream-entry) and *shōjōju* (company of the truly settled)”（あらゆる人間に開かれている目覚め—預流と正定聚—）と題する発表で、パーリ經典にみられる預流の概念と親鸞が説いている正定聚との共通性を指摘した。この四名の発表を受けて、アムスタッツ先生はコメントを加え、発表者の意図をより鮮明にするためにいくつかの質問をした。コンウェイ研究員は司会と通訳を勤めたが、会場からも質問が多く出て、親鸞思想の背景と独自性についての議論が深められた。

今大会を契機に国際真宗学会は、真宗の専門家による真宗に関する研究交流の場ではなく、今後さらに幅広い分野の研究者との対話の場となっていくことが予想される。そのような中でどのように親鸞浄土教の独自性を発信し、いかに広い視野をもって他の浄土教諸思想との対論を実施していくか。国際真宗学会の将来を思えば、同学会に大谷大学が参加し続けることの意義はますます大きいように思われる。

（以上は、井上、コンウェイ両氏の参加報告を加えて作成したものである。）



大谷—龍谷合同パネル：(右から) アムシュタッツ、コンウェイ、木越、那須、嵩、井上



下田正弘教授、マーク・ブラム教授、ジェシカ・メイン教授、パティ・ホンダ・ナカイ夫妻とパネルの交流会にて

## 海外学会参加報告②

### 第13回国際チベット学会報告

西藏文献研究 研究員・准教授 三宅伸一郎

第13回国際チベット学会（13th Seminar of the International Association for Tibetan Studies）が2013年7

月21日(日)～27日(土)の日程で、モンゴル科学アカデミーとモンゴル国立大学の主催で、主催者の1つ、ウランバー

トル市内にあるモンゴル国立大学を会場として開催された。西藏文献研究班からは、3年に1度開催されるチベット研究最大のこの国際学会に毎回メンバーが参加しているが、今回は、研究員の松川節と三宅伸一郎の2名が参加し、研究発表をおこなった。

7月21日(日)午前、モンゴル国立大学にて受付がおこなわれた。10時すぎ受付会場に到着した時はすでに人でごったがえしていたが、これまでの学会で知りあった友人たちと久しぶりに顔を合わせ、再会を喜び合った。午後2時30分より市内のIndependence Hallにて開会式が開催された。開会式ではモンゴル科学院院長B. Enkhtuvshin氏、モンゴル国立大学学長A. Galtbayar氏、ガンダン・テクチェンリン寺管長D. Choijamts師、国際チベット学会会長Charles Ramble氏からの挨拶の後、モンゴル国立大学Sh. Choima教授から「The Historical Outline of Mongolian Buddhism (モンゴル仏教概史)」、国際若手チベット学会会長Kalsang Norbu Gurung氏から「Why International Seminar for Young Tibetologists (なぜ国際若手チベット学会なのか)」と題する基調講演がおこなわれた。開会式の後、ウランバートル・ホテルに場所を移しての歓迎会が催された。

7月22日(月)より研究発表がおこなわれた。今回の参加者/発表者数は、300人以上にも及ぶとされ、PanelとSessionを合わせて63もの部会が開かれた。

三宅と松川の発表は、ともに19~20世紀のモンゴル仏教界を代表する学僧ツァワ・タムディン(rTsa ba rta mgrin, 1867-1937)に関するものであった。

三宅は「A mdo mā yang dgon pa'i bla ma dang ye shu chos lugs spel mkhan bol hel bar gyi chos rtsod skor (アムド・マーヤン寺のラマとキリスト教宣教師ボルヘルとの宗教議論について)」というテーマで、チベット語による発表を、7月22日(月)Session 15「Buddhism, Science and Society (仏教・科学・社会)」の部会にておこなった。この報告の中で三宅は、ツァワ・タムディンの全集第2巻に収録されているキリスト教宣教師とチベット人僧との宗教問答の記録『論駁文・論敵たる酔象を退治する獅子の叫び (rTsoḍ yig phyi rgol glang smyon 'joms pa'i seng ge'i ngar skad)』の内容を紹介し、この宗教議論の一方の当事者であるチベット人僧マーヤン・パンディタ(Mā yang paṇḍita)が、クンプム寺第69代座主ギヤク・ケンチェン=ケルサン・ツルティム・テンペー・ニマ(rGya yag mkhan chen skal bzang tshul khriṃs bstan pa'i nyi ma, 1858-?)の師であるであること、もう一方の当事者であるキリスト教宣教師ボルヘル(Bol hel)なる人物が、ケンブリッジ大学出身で中国布教を志願した7人の学生(いわゆるCambridge Seven)の1人Cecil Pholhill-

Turner (1860-1938)であること、この記録が1889年にアムド地方東部にあるマーヤン寺で実際におこなわれた宗教議論の貴重な記録であることを、Cecil Pholhill-Turnerの妻の伝記や『ツァワ・タムディン自伝』『クンプム寺誌』等のチベット語文献にもとづきながら緻密に考証した。なお、報告の後、ケンブリッジにCecil Pholhill-Turnerの手記が存在しているとの貴重な情報を得た。

松川は「New Perspective on the Historical Evidences and archeological findings from Monastery Erdene-Zuu (エルデネ=ゾー寺院出土考古遺物と歴史史料の統合によるモンゴル仏教史構築への新たな展望)」というテーマで、モンゴル語による報告を、7月27日(土)午前11時より、Panel 46「Relations between Tibet and Mongolia: History and documents (チベットとモンゴルの関係: 歴史と文書)」の部会にておこなった。この報告の中で松川は、モンゴルに仏教が伝播・弘通した時代区分として、ツァワ・タムディンはその著書『金冊 (gSer gyi deb ther)』において三区分別、すなわち、前期(匈奴~モンゴル帝国期の前まで)、中期(13~14世紀)、そして後期(16世紀以降)を提唱している。このうち、前期のできごととして、エルデネ=ゾー寺院がウイグル時代に最初に建立されたという見解が表明されているが、その根拠となったのは、フィンランドの有名なアルタイ学者G. ラムステッドがモンゴル語で著し、1922年にウランバートルで出版された『ウイグル国簡史』であること、しかし、実際には、この文献にはエルデネ=ゾー寺院のウイグル時代建立については言及されておらず、ザワ・タムディンは現地伝承を利用して補ったというのが真相であることを明らかにした。

7月26日(金)午後2時30分からはIndependence Hallにておこなわれた総会の中で、国際チベット学会の新会長としてがTsering Shakya氏(ブリティッシュ・コロンビア大学)が選出された。



Panel 14 での松川節教授の研究発表

## 海外学会参加報告③

### 第23回世界哲学会議参加報告

国際仏教研究 研究員・准教授 藤枝 真

2013年8月4日から10日まで、ギリシアのアテネ大学において、第23回世界哲学会議 (XXIII World Congress of Philosophy) が開催された。当会議は、哲学・思想関連の研究発表を募って5年毎に開催されるものであり、今回はその開催にあたって「探求と生き方としての哲学 (Philosophy as Inquiry and Way of Life)」という大会のテーマが掲げられた。また、今回は西洋哲学の発祥の地であるギリシアでの開催とあって、世界中から3000人を超える参加者を集めた。

国際仏教研究班からは、藤枝真 (研究員) と Michael J. Conway (嘱託研究員) が参加し、研究発表をした。

アテネ大学はアテネ市内の幾つかの場所に散在しており、会場となった哲学科の建物は、アクロポリスの丘やシンタグマ広場があるアテネ中心部から地下鉄で2駅ほど離れた住宅地の中に位置している。8月のアテネは、湿度は低いものの、文字通り射るような日ざしであり、特に午後は外を歩くのがためらわれるほどの暑さであった。

大会初日の4日(日)から講演会や口頭発表、シンポジウムがスタートした。この日には藤枝研究員が発表する「生命倫理 (Bioethics)」の部会が開かれた。部会の発表タイトルと発表者は以下の通りである。

Boris Yudin (Russia) 司会者

“Between the secular and the religious: Japanese Buddhism in the public discourse on the issues of organ transplant” (世俗と宗教のはざまで：臓器移植に関する公的議論における日本仏教)

Shin Fujieda (Japan)

“The importance of patient’s autonomy: The advance directives”

Ana Ylenia Guerra Vaquero (Spain)

“Is “dignity” a useless concept in bioethics?”

Yuehong Han & Yunbao Yang (China)

“Justice between age groups”

Nancy Jecker (USA)

““Ethical responsibility” of the physician with reference to the works of art”

Berfin Kart (Turkey)

この日の発表日程が終わった後、パルテノン神殿が

建つアクロポリスの丘の麓にある野外古代劇場で、ギリシャ首相などを招いてスピーチやオーケストラ演奏などを含む開会イベントが行われた。

6日(火)にはConway嘱託研究員が発表する「仏教哲学 (Buddhist philosophy)」の部会が開かれた。

Fumihiko Sueki (Japan) 司会者

“The Buddhist philosophy”

Sochil Chakma (Thailand)

“The role of the doctrine of mofa in Daochuo’s thought” (道綽における末法教説の意義)

Michael Conway (Japan)

“The way of life as taught by the Buddha”

Jagannath Dabhale (India)

またこの日には、J. ハーバーマスを迎えた記念講演セッションや、生誕200周年を迎えるキルケゴールに関する発表 (コペンハーゲン大学キルケゴール研究センターの研究員らによる) があつた。

9日(金)には、藤枝研究員が発表する部会が開かれた。トロント大学のA. カーン教授が組織したこのラウンドテーブルもまた、キルケゴール生誕200周年を記念するものであり、午前の一つ、午後二つのラウンドテーブルが行われ、多くの発表者・聴講者が集まった。全体のテーマは、キルケゴールとギリシア哲学・宗教・文化との関係を探ろうとするものであり、様々な研究上の関心から、北欧の思想と南欧の思想が横断的に考察された。以下は午前のラウンドテーブルの発表者と発表タイトルである。

Kierkegaard’s Relation to Greek philosophy, religion and culture

Abraham Khan (Canada) 司会者

“Climacus as a reader of Hippias Major in *Concluding Unscientific Postscript*”

Daphne Giofkou (Greece)

“The tragical roots of Antigone”

Luiz Ignacio Guerrero Martinez (Mexico)

“Kierkegaard’s Antigone: Suffering the normativity of temporal continuity”

Shoni Rancher (USA)

“Philosophy in the city: A socio-political reading of the

Kierkegaardian notion of the public”（市中の哲学：キルケゴールの“public”の概念に関する社会・政治的読解）

Shin Fujieda (Japan)

非常に大きな学術大会であり、発表者の欠席や開催情報の錯綜などの運営上のトラブルも散見され混沌とした雰囲気があった。その一方で、一つの建物の中に

数多くの部会を集中させ、会場をコンパクトにしていたことが、親密な雰囲気と自由な議論の場を作り出していた。世界中の哲学者たちの交流という意味においては、間違いなくその大会の目的は果たされていたと言えよう。



記念シンポジウムでの発表者と聴衆

# 海外研究調査報告

## 80年代後の北京語に関する調査研究

一般研究（渡部班）研究代表者・准教授 渡部 洋

本研究の目的は80年代から現在までの北京語について調査し、現代北京語の実態及び北京語と標準語との関係を明らかにするための基礎資料を作成することにある。

本年度より大谷大学真宗総合研究所の一般研究の研究費を得て本研究班のメンバーである柴田みゆき（本学准教授）、早川智美（本学非常勤講師）、清水由香里（本学非常勤講師）等と共に月に1、2回の研究会を行っている。本研究の内容としては主に2つある。1つは現代の北京を舞台にしたドラマや映画の中の台詞についての語彙語法の研究である。2つ目は中国現地での北京語についてのアンケート調査及び北京人への聞き取り調査である。我々研究班は8月23日から26日の約1週間上海と北京でこの調査を行った。アンケートは年齢層をA20～29、B30～39、C40～49、D50～59、その他に分け、どの年齢層に当たるかと出身地を書き、その後10項目の質問に答えるものである。項目はどれも同一の意味を表す北京語と標準語の両方の語彙を用意し、簡単な文の中でどちらを使うかを問うものである。このアンケートの狙いは2つある。1つはこれまでの研究で北京語であるとされた語彙が現在の標準語の中で使われているかどうかを知ることである。そのため北京語の影響が少ない呉語圏の上海でそのアンケート調査を行った。もう1つは北京でアンケート上にある北京語の語彙が今も使われているかどうかを確認することである。

上海でのアンケート調査では多くの方に御協力いただいた。特に上海に詳しい江姣姣さん（元本学の留学生）に上海人が集まりそうな、そしてアンケートを行っても問題にならないような場所を教えていただいた。また、彼女は現在ある会社（新秦商務諮詢有限公司）で翻訳の仕事をしているが、彼女の働きかけで彼女の会社の協力も得ることができた。北京では今回特別に同行してもらった湯佳偉さん（本学の留学生）に北京の状況を聞いて西単でアンケート調査を行った。北京の滞在はわずか三日間ではあるが、本研究班のメンバーである柴田と清水が加わり手分けしてスターバックスや路上でアンケートをとった。そのため当初の予想よりも多くのアンケートを回収することができた。

以上の上海と北京で回収したアンケートについての分析は今進行中で終り次第その結果を何かの形にして研

究雑誌に載せようと考えている。

また、調査は上記の他に北京人への聞き取り調査も行った。今回この調査に協力して頂いたのは湯佳偉のお母様である趙徳霞さん（49歳）である。趙徳霞さんは北京が今の大都市へと変貌していく過程を見てきた方であり、また当然のことながら北京語についてもよく知っておられる。2時間ほどの聞き取り調査ではあったが、大変興味深いことも沢山聞くことができた。例えば、10代の若い世代の者同士で話す言葉の中に時々聞いていてわからないものもあるといったことや最近になって中国語の辞書に載るようになった《靠谱》（「頼りになる、確かである」等の意味）は趙徳霞さんが北京近郊の農村で小さいころからよく耳にしたという話である。

これらのことから今の中国では世代間で異なる言葉を使うような現象が生まれていることや新語といってもよい《靠谱》が80年代以前に農村ですですに使われていたということが確認できた。《靠谱》に関しては恐らく何かの原因で突然世の中に広まったと考えられるが、原因については今後の調査を待つしかない。ただ、1つ考えられるのは大都市北京の拡大化が関係しているかも知れない。四方八方に地下鉄を走らせ高速道路を延ばした結果、北京の郊外が80年代のものと比較にならないぐらい広いものとなり北京近郊の農村は町に変わり北京のベッドタウンとなった。そのため元々農村で使われていた《靠谱》という言葉が都市部でも使われる機会を得ることになったのかも知れない。これは1つの仮説にすぎないが、全く否定もできない。今回北京人がよく買い物にでると聞いていた西単でアンケート調査を行ったが、北京人は思っていたよりも少なく北京以外の場所から来て買い物をしている人が多かった。恐らく80年代に北京城内か或いはその近辺に住んでいた多くの北京人はすでに中心部から速く離れた郊外に住み日曜日の人が混雑する日に北京の中心部に位置する西単にわざわざ買い物に出でなかったのではないかと思う。

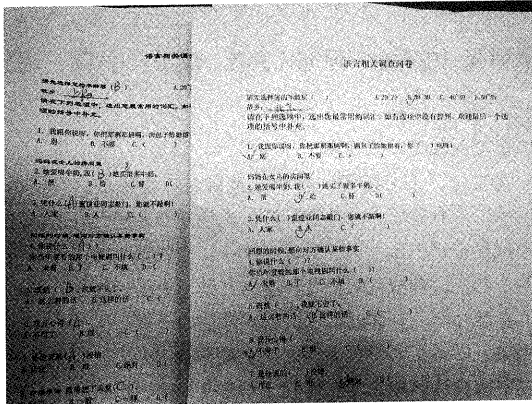
今回規模的には小さなものであるが、このような調査はこれまでなかったかと思う。そのため今回の調査から得られたデータはある意味貴重なものであり、今後の北京語及び標準語の実態解明に大いに役立つものと考えられる。今後はアンケート調査によって得られたデータ



を整理し、研究会で得られた北京語の語彙についてのデータと照らし合せて現代の北京語の実態を明らかにするための基礎資料を作成するつもりである。

最後にこの調査に多くの中国人に協力していただい

た。この調査を行っているのが日本人だと知るとより積極的に協力してくれた人も少なくない。この場を借りて協力していただいた中国人の方々に厚く御礼申し上げる。



アンケート2枚 (調査したアンケート用紙)



研究調査を終えて (左から湯佳偉・江姣姣・渡部洋)

## 国内研究調査報告①

# 鹿児島に赴いての神統流泳法、 神統流史実に関する研究調査（中間報告）

一般研究（中森班）研究代表者・教授 中森 一郎

神統流の調査研究においては、その伝承地、鹿児島に赴かなければ入手できない情報があることや神統流関係者の協力を得なければできないという状況があります。現段階までに、鹿児島市と一部同市外にて4度（①2013年5月24日（金）～同26日（日）、②同年7月26日（金）～同27日（土）、③同年8月10日（土）～12日（月）、④同年8月30日（金）～同9月1日（日））赴いての研究調査を実施しました。この間におこなった研究調査は、本研究課題の中核となる“神統流泳法について”と“神統流に関する史実について”の2点に重点をおいて実施してきました。以下、これまでの研究調査に関する中間報告です。

1. “神統流泳法について”は、現在伝承されている神統流泳法が神統流第16代宗家黒田清光（故人）の著した『薩州伝来 潮練方神統流梗概』（昭和10年、以下『梗概』）中の「神統流現代潮手練方（神統流現代游泳之義）」（pp.50-57）を流儀の根幹として継承されてきたものと捉えています。しかし、その用語は難解であり具体的泳法も独自の表現で述べ示めされてきた上、黒田清光自身による流儀解釈及び泳法解説に幾度かの変化さえ見受けられます。加えて、その後宗家を継承した宗家（第17代宗家黒田清博（故人、清光長男）、第18代黒田清定（故人、清光三男）、第19代（黒田清光甥））の表現にも解釈上で考えられる変化も若干生じています。そこで神統流の泳法についての研究調査を、①神統流泳法の解説及び用語解明、②神統流泳法のビデオカメラレコーダーによる収録の2点に分けて実施しました。

①では、神統流関係者の方々、現在の神統流泳法についての解説文並びに用語の解釈・解明を現家元の承認を経ながら進めました。具体的には、神統流の基本となる「捨の業」（浮・潜）「差の業」「抜の業」という総称「業三品（わざみしな）」におけるそれぞれの変化業「正」「奇」「要」「変」についての解説文の検討、さらにこの基本の泳法を基として表現される「応用業」の方法や技術の特定化と解説の文章化を実施しました。現状としては、未だ一部検討課題を残しています。また、黒田清光の泳法解説に見られた、泳法上の表現としての「体差」「股捌き」「足捌き」の具体的表記と解釈を検討してきました。しかし、これも未だ伝承文における用語解釈

にまで至れていません。

②では、①で解説・解釈を進めてきた中で、今後の伝承にも有益であり他者理解にも役立つと思われる泳法の保存をビデオカメラレコーダーにて収録することを目的として、神統流関係者の協力と助言を受けながら進めてきました。具体的には、基本泳法の「業三品」と「応用業」に対してのカメラアングルを設定の上、鹿児島県立甲南高等学校体育館併設プール及び鹿児島市鴨池公園プールでの収録、神統流の伝書に見られる磯海水浴場での泳技、神統流の業が生み出されたといわれる川内川流域での泳技の収録を実施しました。ここまでの収録映像は、現在、保存すべき映像を検討しながら編集を進めています。

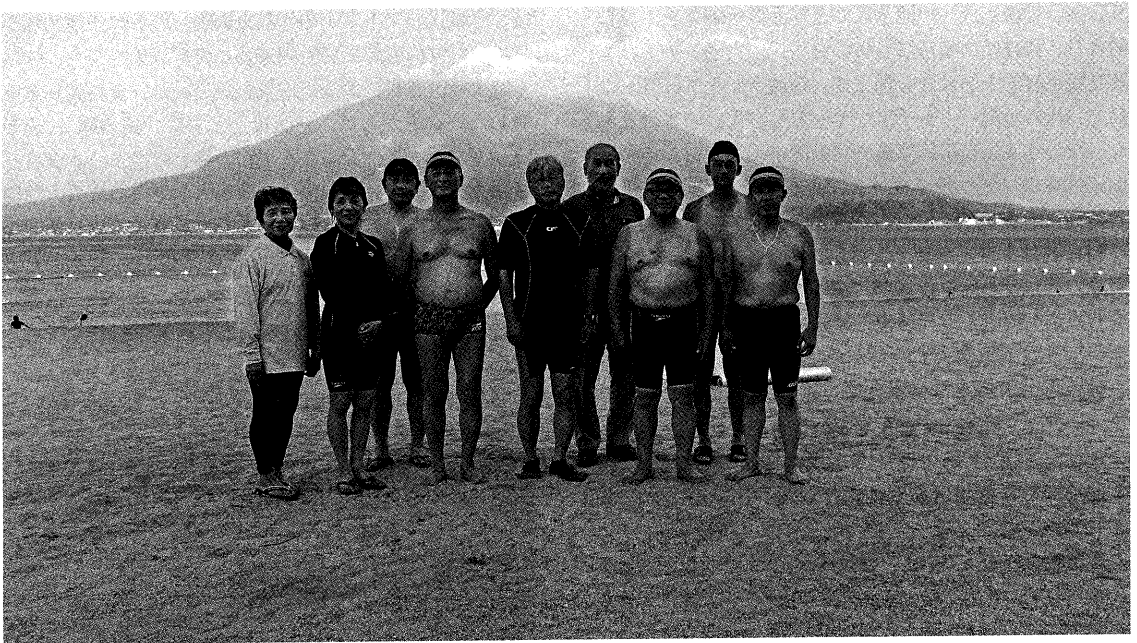
2. “神統流に関する史実について”は、過去研究代表者の中森が、明治以降を起点に資料探索をおこない、殊に大正後期以降については郷土新聞を中心として研究調査をおこない、黒田清光が神統流を世に公表する過程を明らかとしてきました。本研究調査では、黒田家の系譜及び宗家の道統に関わること並びに“神統流現代潮練方”を生み出した土壌としての鹿児島の水泳に関する調査として、①神統流宗家の家系としての黒田家について、②鹿児島における明治以降の水泳状況についての2点から資料探索を実施しました。

①では、鹿児島黒田家の出自及び系図を中心に調査を進めました。戦前に書かれた前出『梗概』中に「流祖 黒田越前守久右衛門頼定」（p.49）とあって、宇多天皇の末裔で「筑前黒田宗満十代之直裔」（同）と出自が補記されるに止まっていたのですが、戦後の黒田清光記述の資料には、近江の佐々木氏の庶流から発し黒田姓を名乗った始祖黒田宗満の四男頼満が島津家に犬追物の技量を請われ近江から鹿児島に下向してきたことが鹿児島黒田家の初めとありました。鹿児島県歴史資料センター黎明館・鹿児島県立図書館での調査において、東京大学史料編纂所所蔵“島津家文書”（国宝）に所収の黒田家系図（「緒家系図 三」の家系図の一つとして所収、墨書）と同家系図の翻刻を所収した『鹿児島県史料旧記雑録拾遺 伊地知季安著作史料集三』（ぎょうせい、2001、p.170）を複写する事ができました。この系図には、「領

筑前黒田」の「義清長男 宗満」の「三男 頼満」が、初めて薩摩に下って「島津貞久公」に仕えたと読み取れる記述が書き示されていました。この系図は近世中頃までに島津藩の記録所に提出された文書の一つとされているようです。この黒田家系図の注記「領筑前黒田」との記述から、鹿児島黒田家と筑前（福岡）黒田家との直接的な関わりや出自を示す「(黒田) 義清長男 宗満」が近江の黒田宗満と同一人物なのか等の疑問が生じています。この関連として、江戸後期ながら、島津家と福岡藩黒田家との親密な関わりも判明し、福岡藩黒田家も眼中に置きながら調査を進展させたいと考えています。

②では、明治以降の逐次刊行物と新聞を調査対象と

して進めました。黒田清光記述（『梗概』他）には、明治5年に天覧水泳のあったことや明治期に小堀流師範が招かれて鹿児島で指導していること、明治後期には鹿児島の中学校で水府流太田派が大正初期には観海流・山内流・神伝流などが指導されたことが見られます。明治期以降で水泳が盛んに行われていた鹿児島地域の状況を把握することも黒田清光が述べる神統流理解の一助となることと考えて調査を実施しました。残念ながら明治期の地元逐次刊行物及び明治15年～同30年までの新聞記事（6月～9月）からは、水泳に関する記述・記事を見出せていません。新聞記事においては、昭和初期までの探索を継続して実施する予定です。以上



2013年8月10日 磯海水浴場にてビデオカメラレコーダーによる泳法収録に参加したメンバー

## 国内研究調査報告②

# 沖縄県読谷村在住の彫刻家・金城実氏への聞き取り及び フィールドワーク調査

一般研究（福島班）研究代表者・准教授 福島 栄寿

本研究は、沖縄在住の反戦・平和活動家として著名な金城実氏（1939年～）の、彫刻家としての側面や、その親鸞思想と反戦・平和思想の關係に着目し、現代沖縄における親鸞思想の展開の考察をテーマとしている。

そこで、上記のテーマに基づき、2013年8月5日(月)～9日(金)、金城実氏への聞き取りと作品群の調査を主な目的とし、沖縄県中頭郡読谷村の金城氏の自宅兼アトリエ及び読谷村内を訪れた。加えて、金城氏が生まれ育った島で、氏の小説『ミッチアマヤーおじさん』の舞台ともなった、うるま市浜比嘉島や宜野湾市、那覇市、その他周辺地域のフィールドワーク調査を実施した。以下は、具体的な調査内容等について概要の報告である。

初日8月5日 夕方、金城実氏のアトリエへ訪問し、調査の打ち合わせを行った。金城氏とは、7月中旬に、氏自らの芸術活動と現代沖縄と親鸞思想に関して論じた草稿のやり取りを始めていたため、今回の調査滞在中に、その草稿のさらなる修正作業を進めつつ、フィールドワーク調査を実施することを確認した。

6日は、朝8時からアトリエ内の作品の調査を実施。午前10時より金城氏が生まれ育った浜比嘉島へレンタカーで向かい、一緒にフィールドワーク調査を行った。安産祈願のシルミチュー（神社）、戦時中に住民が逃げ込んだ天然のガマの跡、金城氏の小説『ミッチアマヤーおじさん』の舞台となった海岸や小島を散策したほか、金城氏の生家、奥様のご実家、金城氏一族の墓、少年時代の思い出の場所などを訪ねた。その後、さらに沖縄本島中部の太平洋側に突き出た与勝半島に位置する平敷屋区を訪れた。平敷屋区にある小高い丘には、琉球国王を批判して処刑された平敷屋朝敏（1700～1734）の顕彰碑が建立されている。顕彰碑を見た後、那覇市の朝敏の処刑場跡地などを訪ねた。夕方には、金城氏のアトリエに戻り、読谷村で琉球カラテ道場を営む比嘉正春氏と面談し、話をうかがった。琉球カラテを少年時代に習っていた金城氏にとって、カラテを通した琉球文化への視点は、彼の思想形成の根幹に関わっていることが理解された。この日は、終日、車での移動中のほか、比嘉氏との面談時も含め、すべて録音を行った。

7日、朝8時、宿泊した民宿の主である知花昌一氏

（真宗大谷派僧侶）と朝食をとりながら、金城氏とのこと、チビチリガマの入り口の「世代をつなぐ平和の像」の建立経緯、知花氏が幹事長を務める「琉球親鸞塾」について話をうかがった。その後、知花氏一族の墓と、知花氏が読谷村内に建立中の寺院建設現場を訪れた。その後、金城氏のアトリエの作品を調査。さらに午前10時から読谷村立図書館で資料調査及び資料収集をした。午後1時より読谷村立歴史民俗資料館を訪れ、資料調査を実施した。夕方からは、金城氏とともに「恨の碑」、チビチリガマと「世代をつなぐ平和の像」のフィールドワーク調査を行った。その後、立命館大学専門研究員（沖縄戦後史が専門）の桜澤誠氏とともに比嘉氏のカラテ道場を訪問し、子供たち（米兵とその子供たちの姿もあった）のカラテ稽古に励む姿を見学した。その夜、桜澤氏



金城実氏のアトリエ入り口に掛かる「琉球親鸞塾」の看板

とともに金城氏のアトリエを訪れ、沖縄の戦後史について金城氏への聞き取り調査（録音）をした。

8日、午前10時から午後3時まで、読谷村立歴史民俗資料館で、金城氏とともに資料調査をしながら、草稿の修正を行った。その後、宜野湾市内の古書店で、平敷屋朝敏に関する書籍のほか、金城氏の作品集などを購入した。夕方に真宗大谷派沖縄別院を訪問。別院の宗務役員の長谷暢氏とお会いし、沖縄における真宗の現在と課題に関して話をうかがった。

最終日9日、午前9時半から午後2時まで読谷村歴史民俗資料館で、金城氏とともに文献調査と草稿の修正作業を実施した。また所蔵資料の複写を行った。その後、再度文献資料を探すため宜野湾市内の古書店に立ち寄り、空港へ向かった。夕方の便で那覇空港を立ち、夜、予定通り、伊丹空港へ帰着した。

今回の調査は、滞在期間中の全日、金城氏と接することが出来たことで、大変恵まれたものとなった。金城氏は、今回の調査研究について大変協力的であり、先述

したように調査に向かう一週間ほど前には、自らの生き様と沖縄と親鸞思想を巡る思索について草稿をまとめて下さっていた。今回の調査中に、その草稿を手がかりに、聞き取りや現地調査を実施し、草稿の修正や内容にまつわる資料調査を金城氏と一緒にすることが出来たことは、大変有意義なことであった。加えて、訪問初日の打ち合わせで急遽実施することになった金城氏の生まれ育った浜比嘉島へのフィールドワーク調査と、金城氏一族の墓参りが出来たことは、大切な機会であった。その他、金城氏における琉球文化論にとって重要な琉球カラテについて学ぶ機会が得られ、また沖縄に調査出張中であつた櫻澤誠氏とも読谷村で合流し、戦後沖縄史を念頭に置きながら、金城氏への聞き取りが出来たことも、重要な収穫であった。その他、読谷村立図書館、同歴史民俗資料館では、必要な資料の複写、また宜野湾市内の古書店では、必要な文献を入手することも出来た。以上、タイトなスケジュールであつたが、収穫の多い研究調査となった。

## 国内研究調査報告③

### 「建学の理念」基本テキスト作成に向けて

「建学の精神」教育推進研究 研究員・講師 西本 祐攝

本研究では、「建学の精神」の具現化を課題とし、以下3つの視点から研究を推進している。

- ①「建学の精神」の現代的表現化
- ②「人間学Ⅰ」の共通資料集の作成
- ③「建学の精神」を活かした学科教育の在り方

「建学の精神」とは、直接には大谷大学初代学長清沢満之による「開校の辞」（明治34年、移転開校式）と第3代学長佐々木月樵による「大谷大学樹立の精神」（大正14年入学者宣誓式訓辞）を指す。

研究の視点①では、本学が今まで教育の根幹に据えてきた両学長の訓辞の意義を再確認し、これを現代的形で表現していくことを目指している。両訓辞は、それぞれ「私立学校令（明治32年公布）」と「大学令（大正7年公布）」のもとで公開されたものである。そのような当時の歴史的状況を加味したうえで両訓辞の持つ意義を再検証するための研究を重ね、その精神が持つ現代的意義の確認と表現を含めた具現化の問題について検討し

た。

視点②では、本学の「建学の精神」に基づく教育を最も体現する科目である「人間学Ⅰ（文学部）」あるいは「仏教と人間Ⅰ（短期大学部）」に関して、教育の基礎となる共通資料の作成に向けた検討が期待された。当初は「人間学」における仏教教育全般にわたる共通資料の作成が目指されたが、現在は焦点を絞り、「建学の理念」に特化したテキストを作成する方向で検討が進められている。上記①の研究内容を踏まえ、学生のみならず、教職員が共通に「建学の理念」を学ぶことができるような基本テキストを作成することが現実的であると思われるため、その方向での検討に入っている。

視点③は、以上の①および②での成果を踏まえ、大谷大学の建学の精神と各学科における教育との連関について検討作業をおこなうことを目指すが、現在この件については着手することができないでいる。

以上の内容を検討してきたが、本年度は、視点②に

ついて、「建学の理念」基本テキストの作成に向けた検討を重ねている。その一環として、テキストの作成に必要な資料収集を目的とした調査を行った。その内容を簡潔に報告する。

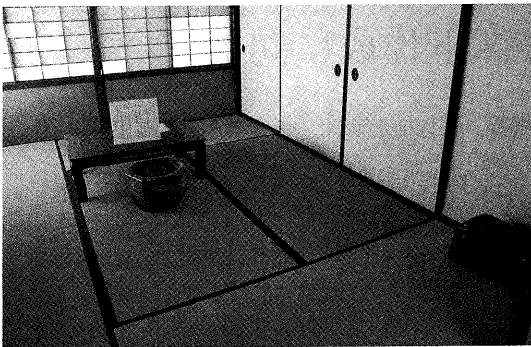
2013年8月12、13日に、本研究班チーフの木越康、研究員の望月謙二、箕浦暁雄、西本祐攝、研究補助員の拝原祥子、さらに調査補助として大学院生の田端彩子の6名で、清沢満之自坊の西方寺（愛知県碧南市）と清沢満之記念館、及び佐々木月樵自坊の上宮寺（愛知県安城市）を訪問した。

8月12日、西方寺到着後、本堂にて勤行、清沢の墓所を参拝、続いて、清沢が執筆活動を行ったと伝えられる書院を訪ねた。この書院で清沢が残した「病床雑誌」「臘扇記」（西方寺所蔵）等の日記類は、宗教的信念のあゆみが克明に記された思索録であり、清沢の信仰を究明する上で重要な資料としてよく知られている。また、暁烏敏、多田鼎、佐々木月樵、安藤洲一ら、浩浩洞の洞人と発行した『精神界』誌上に掲載される「他力の救済」「我は此の如く如来を信ず（我信念）」なども、この書院で執筆されたと伝えられ、当時、清沢が用いた机も残されている。

清沢終焉の部屋を訪ねた後、西方寺敷地内にある清沢満之記念館に場所を移しての調査を行った。本年は、

清沢満之生誕150年にあたり、記念館では、企画展が催されていた。清沢生誕の地、私塾（不怠堂）、第五義校、愛知外国語学校、医学校（現在の名古屋大学医学部の前身、当時は西本願寺の別院にあった）、覚音寺（清沢が衆徒となった寺院、友人小川空恵の自坊）等、育英教校（東本願寺の教育機関）入学に至るまでの清沢の幼少期の学びに関わる資料に触れ、情報の収集を行った。下級武士の家に生まれた清沢が、真宗大谷派宗門に関わるようになるまでの足跡を確かめる貴重な機会となった。翌日、訪れた上宮寺は1988（昭和63）年に火災で全焼しており、十分な資料調査は行えなかったが、現、坊守様から種々のお話を拝聴し、境内地の近くにある佐々木月樵の墓所に参拝し、その遺徳を偲んだ。

清沢が西方寺で過ごした主な期間は真宗大学の東京移転を主張した宗門改革運動の終結後から真宗大学の東京移転のために東上するまで、および真宗大学学監辞職後である。清沢は「開校の辞」で真宗大学を「宗教学校」と語る。その宗教観の形成に西方寺滞在中の思索は重要な意義をもつが、「開校の辞」に表明された純潔な宗教的精神に基づく教育・研究を現代的に具現化するためのテキスト作成を、どのようなかたちで成しうるのが今後の検討課題となるだろう。



清沢満之が執筆活動を行った書院



佐々木月樵の墓所



清沢満之記念館にて資料調査

# 公開講演会・公開研究会報告①

## 公開講演会報告

西藏文献研究 研究員・准教授 三宅伸一郎

2013年6月18日(火)、響流館3Fメディアホールにおいて、アジャ・リンポチェ=ロブサン・トゥプテン・ジクメー・ギャツォ (A skya rin po che Blo bzang thub bstan 'jigs med rgya mtsho) 師を講師として招き、「歴代アジャ・リンポチェの事績について」の講題のもと公開講演会が開催された。アジャ・リンポチェは、青海にあるゲルク派の開祖ツォンカパの生誕地に建つクンプム寺(塔爾寺)の化身ラマの1人であり、代々クンプム寺の僧院長を務め、青海やモンゴルに強い影響力をもち、藏蒙漢の関係史に深く関わった。講師はその第8世であり、パンチェン・ラマ10世(1938-1989)の教師であり自身の叔父であるジャヤク・リンポチェ (rGya yag rin po che) やツルティム・ラクサム (Tshul khriims lhag bsam) 師に師事し、文化大革命を経て、クンプム寺の僧院長を務めた後、1998年にアメリカへ亡命し、現在はカリフォルニアにあるチベット・モンゴル仏教文化センターの長を務め、後進の指導と世界各国での講演活動をおこなうとともに、クンプム寺で赤十字の活動に従事した経験から、インドにあるチベット人学校に対する支援や、チベット仏教寺院に対する援助(菜食主義の僧侶に対する豆腐作成機材の援助)、モンゴルにおける小児ガン予防病院の建設など、積極的な慈善事業も展開している。以下、当日講演で語られた歴代アジャ・リンポチェの事績を示す。

○「アジャ」は、東北チベット・アムド地方の方言で「父」をあらわす言葉であり、歴代のアジャ・リンポチェはツォンカパの父親の化身といわれる。クンプム寺には「シンサ (shing bza')」と呼ばれる化身ラマがおり、こちらはツォンカパの母親の化身といわれる。

### 1. ツルティム・ジュンネー (Tshul khriims 'byung gnas)

クンプム寺が建立されてまもなくの時期の人物。寺内のツォンカパの生誕地に建つ仏塔近くに弥勒堂を建立。

### 2. シェーラプ・サンポ (Shes rab bzang po, 1633-1707)

クンプム寺第16代僧院長。巨大な厨房と60の柱を持つ大集会堂を建立。

### 3. ロブサン・テンペー・ギェルツェン (Blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan, 1708-1768)

暦学や度量(仏像の身体各所の比率やプロポーションなど仏画を描く際に必要な知識)に秀で、多くの著作をなす。彼自身が描いたとされるタンカも残っている。乾隆帝より崇敬される。

### 4. ロブサン・ジャムヤン・ギヤムツォ (Blo bzang 'jam dbyangs rgya mtsho, 1768-1816)

12歳の時、クンプム寺を訪問中のパンチェン・ラマ6世ペルデン・イエシェー (Pan chen dPal ldan ye shes, 1738-1780) より沙弥戒を受ける。後、ラサを訪問、セラ寺に入門。ダライ・ラマ8世ジャムベル・ギャツォ (Jam dpal rgya mtsho, 1758-1804) と会見。その紹介により、現在のモンゴル国ウランバートルに赴き3年間滞在し、第4世ハルハ・ジェツン・タムパ (Khal kha rje btsun dam pa Blo bzang thub bstan dbang phyug 'jigs med rgya mtsho, 1775-1813) にカーラチェクラの教えを受ける。

### 5. イェシェー・ケルサン・ケードゥブ・ギヤムツォ (Ye shes skal bzang rgya mtsho, 1817-1869)

武術に秀でていたとされる。西寧近郊でおきたイスラム教徒による反乱が起こった際、人民や寺院を守るため、クンプム寺の若い僧侶たちに軍事教練をおこない、軍司令官のような努めを果たした。こうした功績が賞賛され、後に同治帝より「賢能述道禪師」の号と扁額を授与される。また人民より感謝の意を示す扁額が献上される。これらの扁額は今もクンプム寺のアジャ・リンポチェ邸に残る。トンコル (sTong 'khor、湟源) で没したとされるが、軍事的活動の中で戦死したのではない。

### 6. ロブサン・テンペー・ワンチュク・ソナム・ギヤムツォ (Blo bzang bstan pa'i dbang phyug bsod nams)

rgya mtsho, 1871-1909)

先代同様、武術に秀でていたとされる。1900年、寺本婉雅によって日本に招聘された。光緒帝により、北京にあるチベット仏教寺院の代表者として派遣されたともいわれる。来日時に贈られたとされる仏像や刀剣や写真（6世とその日本人の弟子とされる人物と一緒に写っているもの）、幻灯機などは雍和宮やクンプム寺のアジャ・リンポチェ邸宅に保管されており、講師である8世もこれらを実見したことがある。雍和宮に保管されていたものは文化大革命の間にすべて失われた。クンプム寺に保管されていたものは、毎年新年に展覧されてい

たが、1958年、中国政府に没収された。

7. ロプサン・ルントク・ジクメー・テンペー・ギェルツェン (Blo bzang lung rtogs 'jigs med bstan pa'i rgyal mtshan, 1910-1948)

僧院長として厳格な規則によって僧院を統治しようとしたものの、僧侶たちのモラルが低下。

会場となったメディアホールがほぼ満員になるほどの来聴者を集め、講演後の質疑応答も活発におこなわれ、盛会であった。



## 公開講演会・公開研究会報告②

### 国際仏教研究「公開講演会」7/1 講題：真宗大谷派の北米開教の現状について 講師：阿満道尋（アラスカ州立大学アンカレッジ校准教授）

国際仏教研究 研究員・講師 新田 智通

7月1日に、阿満道尋氏（アラスカ州立大学アンカレッジ校准教授）をお招きし、「真宗大谷派の北米開教の現状について」という題目でご講演いただいた。講演では、まず北米開教区には、現在五つの寺院（ロサンゼルス別院・パークレー東本願寺・ニューポートビーチ東本願寺・ウェストコピナ東本願寺・シカゴ仏教会）があるが、それらの成り立ちについての説明があった。それによると、多くの寺院が西本願寺からの転派により建てられたという。古いものでは、20世紀初頭に建立された寺院もあるが、それらのなかには、第二次世界大戦中に、多くの門徒が強制収容所に入れられたため閉鎖を余儀なくされたものもあった。だが、そうした困難を乗り越え、現在各寺院は地域に根ざした様々な活動を行っているということであった。

開教区の寺院の具体的な活動内容としては、日本の寺院でも行われているような通常の開法会や、修正会、お彼岸のお勤めなどに加え、キリスト教教会の慣習にならった日曜礼拝や日曜学校を行なっている寺院もあるそうである。また、資金集めを目的としたお盆フェスティバルやバザー、餅つき大会などが開催されたり、スポーツを通じた社会交流も図られたりしている。その他にも、日本語のクラスや、書道や和太鼓などの日

本文化を伝える講座を開いている寺院もあり、様々な活動を通して、日系人以外にも開かれた場となっている寺院の様子が伝えられた。また、ハワイ開教区の現状についても、簡単に触れられた。

さらに、ニューポートビーチにある真宗センターの活動に関する詳細な報告もあった。真宗センターは、北米における開教に加えて、現地のアメリカ人をおもな対象とした英語による大谷派教師の育成を目的として、東本願寺によって設立されたものであるが、現在いよいよ本格的な活動を開始しようとしている。そしてその活動に必要ないくつかの翻訳出版プロジェクトが進行中である。そのひとつは、清沢満之の「蠟扇記」の羽田信生先生による英訳（*December Fan: The Buddhist Essays of Manshi Kiyozawa*）再版である。また、教師育成との関連では、日本での教師育成の際にテキストとしてもちいられている『浄土の真宗』を英訳し出版する試みがなされており、阿満氏も翻訳者のひとりとしてそれに携わっている。こうした出版プロジェクトも含め、真宗センターが活動を充実させていくためには、大谷大学の真宗総合研究所や、真宗大谷派の教学センターが相互に連携を深めていくことが望まれるということであった。

## 共同研究調査報告

# モンゴル国立大学社会科学部との学術協定に基づく 共同研究調査

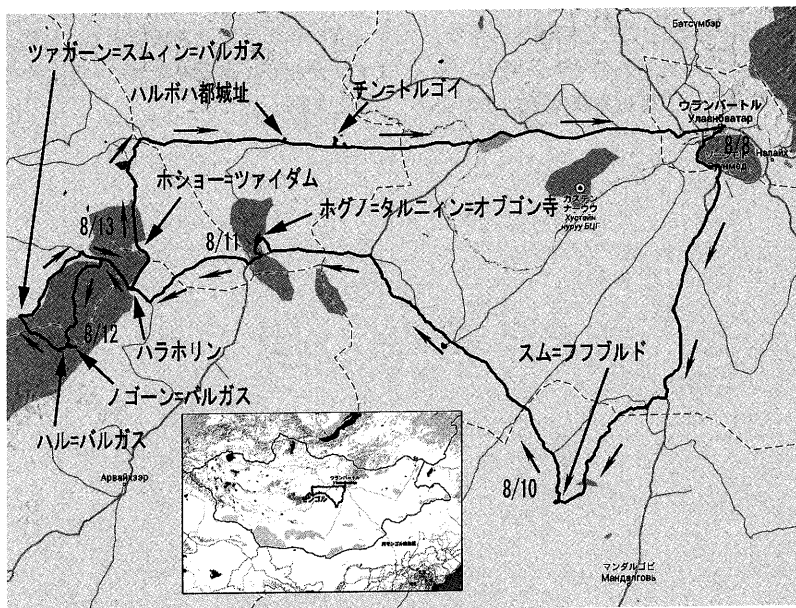
西蔵文献研究 研究員・教授 松川 節

2013年7月1日付で、モンゴル国立大学社会科学部と真宗総合研究所は学術交流協定を締結した。最初の3年間の研究テーマは「モンゴルにおける仏教の後期発展期(13世紀～17世紀)の仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学的的研究」であり、本年8月7日～8月16日の日程で、さっそく初年度の共同現地調査を実施した。参加メンバーは、大谷大学側が真宗総合研究所指定研究チベット班の松川節、三宅伸一郎、武田和哉であり、モンゴル国立大学側は、モンゴル国立大学社会科学部宗教学科のM. ガントヤー教授、D. エンフトゥル師、さらに、モンゴル側として、国際遊牧文明研究所のA. オチル研究員、ガンダン寺学術文化研究所のSh. ソニンバヤル師、N. アムガラ師が加わった。

3年間の共同研究では、モンゴル国において、今まであまり研究されていない16～17世紀成立の仏教寺院址について仏教学・歴史学・考古学的な調査・研究を行い、その共通点を見つけ出すことを目指す。3年目にモンゴル国でシンポジウムを開催し、その成果を検討する。その意義は、次の点にあると考えている。1. 13～

14世紀のモンゴル帝国・元朝期のモンゴルに仏教が伝播した。しかし、モンゴル帝国が崩壊した後、15～17世紀のモンゴル仏教については、史的制約があり、その実像はほとんど知られていない。それを明らかにする。2. モンゴル国には18世紀以降に成立した数多くの仏教寺院があり、一定の研究の蓄積があるが、16～17世紀成立の可能性が高い仏教寺院(いまのところ、5件が知られている)については、ほとんど実像が知られていない。その研究を行っていく。3. これらの研究を通して、13世紀～現在に至るまでのモンゴル仏教通史を再構築することができる。

8月7日、松川、三宅、武田は09:30関空発CA162便にて定刻通り北京に着陸し、乗り継ぎ。北京発ウランバートル行きCA955便は定刻15:10到北京空港のゲートを離脱したが、北京上空の悪天候と離陸順番待ちで3時間、機内で待機、19:58、2時間半遅れでウランバートルのチンギスハーン国際空港に到着した。空港にはガントヤー教授が出迎えており、教授自らの運転で20:30、ウランバートル市内のホテルにチェックイン。



2013年モンゴル現地調査行程図

8月8日 10:00、先発隊として、武田がモンゴル側考古学者1名、測量助手2名、コック1名を伴い、ワゴン車でホテル発。最初の目的地はドンドゴビ県アダーツァグ郡のスム＝フフブルド寺院址で、走行距離273キロ、途中昼食休憩をはさんで、16:30に現地に着した。

到着後、まず野営の準備を済ませ、次いで測量機材の点検を実施し、併せて今回初めて測量機材を使用するモンゴル側スタッフに対し機材の取扱方法や測量の原理、観測方法の基本等をレクチャーした。19:20から夕食を摂り、その後もモンゴル側との打ち合わせや情報交換等が続いた。21:00に就寝した。

一方、松川、三宅は8月8日はウランバートル市内に滞留し、ガントヤー教授の案内でガンダン寺の元ラマ僧であるジャンパー師の自宅を訪問した。ジャンパー師はモンゴルの歴代の僧侶がチベット語で著した仏教著作を精力的に影印出版しており、松川、三宅は2011年にも自宅を訪問したことがあり、再会を喜びつつ、ここ2年間の動向について意見を交換した。ジャンパー師は現在、ポーランド国立大学の外国人教師を勤めており、夏のあいだ、休暇でモンゴルに帰省していた。生粋のモンゴル人であるが、チベット語も流暢に話す。三宅はチベット語、松川はモンゴル語でそれぞれ会話し、師が今までに出版してきたシリーズMongol Bilig: Series for Studying Tibetan Works Written by Mongols Authorsがチベット・モンゴル仏教研究においてどのような意義を有するかを伺った。

8月9日 先発隊は07:20に幕営地を出発して10分程度の距離を徒歩で遺跡に向かう。7:30頃からまず遺跡全体の様相を確かめるべく、全員で踏査を行った。その上で、作業方針の打ち合わせを実施した。様々な意見が出たが、最終的には今回の人員体制や装備・機材、および時間制約等の問題などを勘案して、寺院の1/100スケールの平面略測図を作成することに決し、早速測量機材を用いて実測用の割付作業を開始した。昨夜短時間しかレクチャーする時間がなかったものの、モンゴル側スタッフの上達はめざましく、また集中力もあって、寺院の前殿部分の割付作業は13:00までに終了した。昼食と昼休みを経て、15:00時より作業を再開し、今度は実測図面の書き方のレクチャーを行った。ここでも、モンゴル側スタッフの作業内容の理解は素早く、直後から三人が実測・計測・確認補助の各役割を見事に分担して、その日の夕方までに前殿部分の実測は終えることができた。18:00に幕営地に帰投したところで、この日到着した松川、三宅ほか本隊と合流した。

本隊は09:50松川、三宅、ガントヤー、オチル、ソニ

ンバヤル、アムガランがモンゴル側コック1名を伴い、ジープとワゴン車計2台でホテル発。途中昼食休憩をはさみ、17:02、スム＝フフブルド寺院社着。18:00、先発隊と合流、そのまま各自テントを設営し、野営した。

8月10日 08:00、全員でスム＝フフブルド寺院址を視察しつつ、昨日以来継続中の実測図測量作業を見守る。武田が寺院址の考古学的特徴を解説。その後、ビデオ記録に移り、オチル、武田、三宅、松川がそれぞれの専門の観点からこの遺物について説明した。

10:58、武田が本隊に合流して出発。先発隊は現地に残留し、寺院址の計測を続行した。

11:30、アダーツァグ郡の中心地で給油。ハンディGPSを見ながら本日の目的地 hogno 山への最短ルートをとる。まさに道無き道を行く様相。もっとも、モンゴル人は草原での移動に際して、地図を見ることはほとんど無く、GPSでおおよその方角を知っておき、現地牧民のゲルに立ち寄って、目指すルートが問題なく走行できるか、渡河できるか、ぬかるみがあるかどうかなどを常に確認しながら進んでいく。我々のジープのドライバーは、「モンゴルには2つのGPSがある。衛星GPSと牧民GPSだ。どちらも精度は同じだ」と笑って言った。

13:00、トゥブ県ブレン郡中心地の手前24キロ地点で昼食休憩。モンゴル人コックが手際よく調理する。その間、隊員は様々なテーマで情報交換。今回、同行しているガンダン寺の2人のラマ僧のうち、ソニンバヤル師がドンドゴビ県出身、アムガラン師がブレン郡のとなりのデルゲル＝ハンガイ郡出身とのことで、現地の地名、風俗、仏教寺院、僧侶について、興味深い情報が交わされていた。

15:05出発、ブレン郡を經由し、さらに63キロ走って17:36、トゥブ県エルデネサントにて舗装道に出る。50キロほど快適な舗装道を走り、18:23、「モンゴル＝エルス」或いは「エルスン＝タサルハイ」と呼ばれる、草原ステップ地帯に突然あらわれる帯状砂地の手前で舗装道を北に逸れ、再びダートを13キロ走る。18:45、本日の目的地 hogno = タルニイン = オブゴン寺(下寺)着。ここは行政区としては、ボルガン県ダシンチレン郡に属する。寺院経営のツーリスト・キャンプが満員のため、4キロ離れた別のツーリスト・キャンプに宿泊。ゲル(天幕住居)形式の宿舎は快適。夜、エンフトゥル師が合流。本日の走行距離は262キロであった。

8月11日 08:28、ツーリスト・キャンプを出発。7キロ南方にある知り合いの民家に宿泊したソニンバヤル師をピックアップし、09:07、hogno = タルニイン

＝オブゴン寺（下寺）着。ここからの山道は車が走行できないため、徒歩で上寺へと登る。1700メートル離れており高低差は700メートル。各人のペースで歩き、小一時間で上寺着。下寺は再建され、現在宗教活動を行っているが、上寺は完全な廃寺である。現地伝承によると、ホグノ山は元々モンフ＝ハーン山と呼ばれていたが、17世紀後半に西モンゴル・オイラド部の支配者ガルダンがこの地に侵攻し、上寺を徹底的に破壊するとともに、ラマ僧たちを「ホグノして」大虐殺したため、この名となった。「ホグノする」とは、モンゴル語で、ヒツジを搾乳する際に鼻面をずらっと結わえつけることを言う。

この伝承にも示されているように、チベット仏教ゲルク派に帰依したガルダンが、ホグノ＝タルニン＝オブゴン寺を徹底的に破壊したのは、これらの寺院がチベット仏教のいわゆる紅帽派（サキャ派やカルマ派）に属していたからとされる。確かに、ホグノ＝タルニン＝オブゴン上寺址には、モンゴルの仏教寺院建築として普遍的な版築やレンガ構造ではなく、石積みによる寺壁が残っており、その構造はスム＝フフブルド寺院址、そしてこれから訪問予定のハルボハ寺院址にも共通している。

このホグノ＝タルニン＝オブゴン上寺址の考古学的測量図はまだ作成されていない。現在、我々が手にできるのは、モンゴル国の都市建築史研究者B. ダージャブ氏による概略図のみである。今回、スム＝フフブルド寺院址において我々が行ったような考古学的測量図の作成をここで言い、それに依拠しつつ発掘調査へと歩を進める必要がある。

13:00 下寺に戻ったところで昼食をとり、14:20、出発。ここからオボルハンガイ県に入り、ハラホリン郡を経由してオルホン河を渡り、ハンガイ山中経由で再びオルホン河上流域に出て、年代不詳の寺院址へと向かう。19:16 ハル＝バルガス遺蹟着。同名の有名なウイグル時代の都城遺蹟とは別。テントを設営し、野営。

8月12日 朝食後、08:40、ハル＝バルガス遺蹟を調査。「ハル」はモンゴル語で「黒」、「バルガス」はモンゴル語で「囲構、都城」の意。中央に盛り土による主マウンドがあり、左右に50メートルほど離れて、石造りの基壇が見られる。中央が寺院址、左右の基壇は仏塔の址と見られるが、発掘をしたわけではないので、確たることは言えない。中央マウンドの中央部分に盗掘穴あり。

09:40、ハル＝バルガスから東南東に5キロ離れた地点にあるノゴーン＝バルガスを調査。「ノゴーン」は

「緑」の意。オルホン河まで160メートルの地点で、対岸はポプラが群生したオリヤスタイーン＝デンジと呼ばれるところ。南東を正面とした囲郭が複数あり、緑釉の瓦片が散乱している。遺蹟名は緑釉から付けられたものであろう。もっとも、モンゴル高原の遺蹟から出土する緑釉は、13・14世紀のモンゴル時代に限らず、15～17世紀にも使われ続けていたことに留意する必要がある。

10:25、昨日のキャンプ地から南へ1.3キロ離れたところにあるナイガル氏の夏営地を訪問。ナイガル氏はエルデニゾー博物館の前館長である。ちょうどナイガル氏は近くの鉱泉で療養中とのことで、息子のトゥムルバト夫妻が迎えてくれた。短い時間ながら、草原の生活を満喫する。

11:16、キャンプ地に戻り、昼食。12:06、出発。再びハンガイ山中に分け入り、13:35、36キロ走ってツァーガン＝スムイン＝バルガス着。ウイグル時代と思われる城郭遺蹟。14:04出発、さらにハンガイ山中をツァーガン＝スム河に沿って走行し、15:36、アルハンガイ県ホトント郡にて給油。ここから舗装道となり、16:40、ハラホリン着。ところが、予約しておいたホテルがダブルブッキングのため宿泊できず、急きょ、別ホテルに移動。幸い、スムーズにチェックインでき、旅装を解く。17:30、カラコルム博物館訪問。館長は不在で、バトバヤル・マネジャーの接待。新たに発現した「勅賜興元閣碑」断片を調査・採拓。19:00、ホテルに戻る。夕食後、本日までの調査について総括会議を開催。

8月13日 08:35、ハラホリンを出発。進路を北にとり、45キロ離れたホシヨー＝ツァイダムまで快適な舗装道を走る。ホシヨー＝ツァイダムは突厥第二帝国時代のビルゲ＝カガンとその弟キョル＝テギンの祭祀施設があることで知られる。トルコ共和国の援助で建設された博物館があり、ビルゲ＝カガン紀功碑、キョル＝テギン紀功碑ともに博物館に移設されており、現地にはレプリカが立つ。時間の関係でここは素通りし、ダートを16キロ走ったところで、09:37、仏教寺院に立ち寄る。モンゴル語で「ホルチンギーン＝ヒード」という。「ホルチン」はチベット語の hor chen すなわち、「大モンゴル」の意である。1994年6月に再建された。門前に「孚佑帝君廟」と彫られた香炉が置かれる。孚佑帝君は中国道教の八仙のひとり、純陽真人呂洞賓のこと。いったいいかなる経緯で道教の香炉がモンゴルにもたらされたのであろうか。また、境内のゲル堂には様々なチベット語経典があり、三宅、アムガラにはじっくりと検分する。10:08、出発。さらに北上し、ウ

ギー湖東岸を通り過ぎ、10:58、幹線舗装道に出る。

12:03、ハルボハ都城址着。この遺蹟は、契丹時代に築城された一辺660～760メートルの城壁を伴う都市遺蹟であるが、城内北西が後代に再利用され、計12基の石造建築物と5基の仏塔が建てられた。現在は全て廃墟となっている。

これらの石造建築物は、2002、2003、2010、2011年にそれぞれ発掘調査され、大量の仏教文物や白樺樹皮に書かれた仏典が出土した。それゆえ、寺院址であることが判明した。

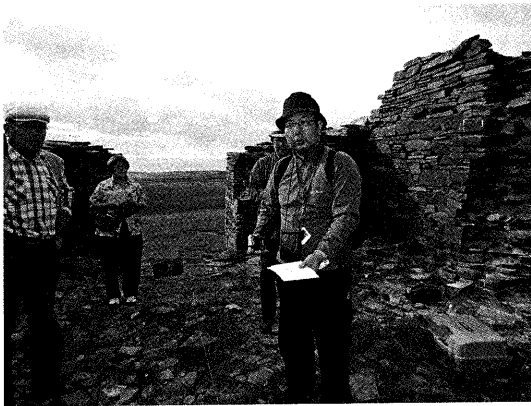
この寺院址に残る石積み寺壁の構造は、今回、我々が調査したスム＝フフブルド寺院址及びホグノ＝タルニイン＝オブゴン上寺址のそれと共通点をもっている。それゆえ、この寺院址の成立も、16世紀後半～17世紀前

半の可能性がある。

城外にある小さな博物館を見学。ここから東北東方向37キロ離れた地点のツァガーデン＝バイシン遺蹟に立つ有名なツォクト＝ホンタイジ碑文の良好な拓本（モンゴル文・チベット文対訳）が展示してあった。

昼食、写真撮影、ビデオ記録を終え、14:35、出発。東に31キロ離れた契丹時代の都市遺蹟チン＝トルゴイに15:15着。15:32、北北西1.3キロにあるチン＝トルゴイ丘に登る。頂上に明らかに人の手による巨大な石積みがある。

15:52、出発。16:01、幹線舗装道に戻り、一路、首都ウランバートルへと走る。19:50、市内のホテルに帰還。今夏の共同調査は無事、終了した。



スム＝フフブルド寺院址における概況説明



ノゴーン＝バルガスにおける調査



カラコルム博物館における調査



ホルチンギーン＝ヒードにおける香炉の調査

# 全国大学史資料協議会研究会報告

## 全国大学史資料協議会西日本部会 2013年度第2回研究会に参加して

大谷大学史資料室 研究補助員 松岡 智美

2003年当時、真宗学事史研究チーフをされていた神戸和磨先生が「『大学史研究』の必要性」のなかで、「大学の変遷は時代社会の移り変わりを写す鏡」であり、「大学史を研究することは、時代社会を明らかにするための一分野となり得るはずである」とし、「大学には時代社会の研究に資する歴史資料としての大学史資料を整理し提供する責任がある」（以上、『研究所報』No.43（2003年）より）と書かれた。それから5年後、大谷大学史資料室が誕生したのである。

現大谷大学史資料室は、大学史編纂研究班、大谷大学近代史研究班、真宗学事研究班の流れをくんでおり、『大谷大学百年史』などの編纂を初めとして各研究班が収集してきたさまざまな史料を引き継ぎ、保存していく役目を担っている。また、1960年代から90年代末にいたるまでの多くの大谷大学関係資料を寄贈して下さった武田武磨先生を初め、関係者からの寄贈された史料もあり、それらの調査、整理も継続的に行っている。そして、2011年からは、図書館1階エントランスにおいて、スポット展示を開催する機会を得ることができ、今まで整理してきた「大谷大学資料」などの公開も可能となった。

このように、当資料室では大学史資料の収集、整理、保存、公開を主な業務として促進するため、毎年全4回開かれる全国大学史資料協議会に参加することによって、他大学の大学史資料への保存などの取り組みや方法も学んでいる。今回は、全国大学史資料協議会西日本部会2013年度第2回研究会に参加する機会を得たので、それについて書いていきたい。

第2回研究会は、7月25日(木)に滋賀大学経済学部にて開かれ、下記のプログラムで行われた。

講演：阿部安成氏（滋賀大学経済学部）  
「史料から考える彦根高等商業学校」  
補足コメント：青柳周一氏  
（滋賀大学経済学部附属資料館）  
「滋賀大学法人文書について」  
見学：滋賀大学経済学部附属資料館書庫など

滋賀大学経済経営研究所高商資料室  
滋賀大学経済学部講堂1923年竣工 他

まず、阿部安成氏は「史料から考える彦根高等商業学校」という講演のなかで、大学史誌の編纂を行ううえで、滋賀大学経済学部の前身である彦根高等商業学校を起点とした資料の収集や史誌の編纂状況、彦根高商史料を初めとした史料の収集、整理、公開について論じられた。阿部氏は史誌編纂の課題として、作成時に参照された典拠資料の不明示や大学史資料としての保管、継承がなされなかったという不備を挙げられた。このことについては、当資料室としても、今までに編纂された書籍や資料において使用された史料や他部署所蔵史料の所在確認を早急に行う必要があると感じた。また、現在はこれらの滋賀大学経済経営研究所所蔵資料は、雑誌やホームページ上での情報公開がなされており、学外への公開なども行っているとのことで、当資料室でも今後の史料公開の手段として参考にしていくべきことだと感じた。加えて、彦根高等商業学校の修学旅行時の生徒執筆稿の調査報告書から、生徒を研究対象として大学を捉え直すとする試みが行われていることも紹介された。大学だけでなく、それを支える教職員や学生をも研究対象とする発想は、大変面白く感じられ、今後の図書館エントランスの展示などにも応用していければと考えている。

次に、青柳周一氏の「滋賀大学法人文書について」では、法人文書について報告され、現在、滋賀大学の公文書については情報公開法を適用しており、原課によって保存、管理し、廃棄資料に関しては規則を定めて、学内有識者会議に諮ったうえで処分をするというような体制をとっている、との報告がなされた。最後の質疑応答では、現在の法人文書の取り扱い方法について、それぞれの大学が抱える問題に則した質問がでた。

公演の後は、滋賀大学経済学部附属資料館とその書庫や、図書館内にある滋賀大学経済経営研究所高商資料室、滋賀大学経済学部講堂などの見学が行われた。とくに、滋賀大学経済学部附属資料館では、「近世近江の商人—その経済活動と商いの特徴—」展の観覧と書庫などのバックヤードの見学ができた。書庫では、古文書が所

蔵資料の中心となっており、所蔵史料を前にして、青柳氏が史料の大学へ保存された経緯や保存方法、書庫内の温湿度管理に至るまで幅広く説明された。

これらの講演を聞いて、「『大学史関係資料』の利用規定の策定により、保存と公開と活用の端緒をひらくこととなった」という滋賀大学の例などを参考にして、当資料室も史料の収集、保存、公開をより積極的に行ってい

かなければならないことを改めて認識するとともに、神戸先生が述べられたように、大学史資料室の使命として、『大谷大学百年史』で終わることなく、次の二百年史や三百年史を作成するために、将来に向かって継続的、体系的に史料を整理、公開していくことの重要性をも感じた。

真宗総合研究所彙報 2013. 6. 1 ~ 2013. 10. 31

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

◇7月12日(金) 13時~(博綜館5階第4会議室)

1. 研究員の追加認定(国際仏教研究)について
2. 嘱託研究員(国際仏教研究)及び客員研究員の委嘱について
3. その他

◇10月4日(金) 12時20分~(博綜館5階第5会議室)

1. ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との学術協定締結について
2. 「科研費」採択による特別研究員人事について
3. その他

◇10月23日(水) 9時30分~10時30分(博綜館5階第3会議室)

1. 真宗総合研究所の東京分室設置について
2. その他

◎2013年度研究補助員(RA)雇用契約事務説明会

◇6月11日(火) 12時20分~(真宗総合研究所ミーティングルーム)

1. 研究補助員(RA)雇用契約の締結について
2. 研究補助業務に関する事務説明
3. その他

「建学の精神」教育推進研究

【全体研究会】

第4回研究会

◇日時:2013年6月6日(木) 13:00~14:30

場所:響流館4階 真宗総合研究所内 ミーティングルーム

内容:第4回「建学の精神」推進教育研究研究会  
議題:清沢満之「開校の辞」について(3)

第5回研究会

◇日時:2013年6月20日(木) 13:00~14:30

場所:響流館4階 真宗総合研究所内 ミーティングルーム

内容:第5回「建学の精神」推進教育研究研究会  
議題:両訓辞の底本と表記について

第6回研究会

◇日時:2013年7月4日(木) 13:00~14:30

場所:響流館4階 真宗総合研究所内 ミーティングルーム

内容:第6回「建学の精神」推進教育研究研究会

議題:佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」について

第7回研究会

◇日時:2013年7月25日(木) 15:30~17:00

場所:響流館4階 会議室

内容:第7回「建学の精神」推進教育研究研究会

議題:大谷大学建学の精神テキストの検討

—佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」について—

第8回研究会

◇日時:2013年10月24日(木) 13:00~14:30

場所:響流館4階 真宗総合研究所内 ミーティンググループ

内容:第8回「建学の精神」推進教育研究研究会

議題:大谷大学建学の精神テキストの検討

【出張】

◇2013年8月12~13日(月~火)

調査員:(研究員)木越康・望月謙二・箕浦暁雄・西本祐攝、(研究補助員)拝原祥子、(研究補助)田端彩子

調査先:西方寺(愛知県)・上宮寺(愛知県)

目的:清沢満之(西方寺)・佐々木月樵(上宮寺)

関連自筆資料・写真等の研究調査

国際仏教研究

〈英米班〉

《研究会》

◇『浄土の真宗』英訳研究会

①6月27日 16:20~17:50

(於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

②7月5日 16:20~17:50

(於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

◇第23回世界哲学会議での研究発表のための研究会

①6月28日 12:00~13:00

(於 東方仏教徒協会事務室)

②7月4日 13:00~14:00

(於 藤枝研究員個人研究室)

◇エトヴェシ・ロラード大学との合同シンポジウム  
に向けての研究会

①7月2日 18:00~19:30

(於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)



②8月1日 10:40~12:10  
(於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

③9月30日 9:30~10:30  
(於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

#### 《海外学会参加》

①第16回国際真宗学会 5月31日~6月2日 (カナダ、バンクーバー市ブリティッシュ・コロンビア大学)  
「親鸞の浄土思想の特質—その信と証の解明に注目して—」というテーマで英米班がパネルを組織して研究発表を行なった。井上尚実研究員、マイケル・コンウェイ嘱託研究員、木越康教授 (特別派遣者)、ゲイレン・アムシュタツ博士 (特別招聘者)、嵩満也教授 (龍谷大学)、那須英勝教授 (龍谷大学) の7名で構成。嘱託研究員のマーク・ブラム教授 (カリフォルニア大学バークレー校)、マイケル・コンウェイ嘱託研究員は別に個人でも研究発表を行なった。

②国際シンポジウム「仏教における信」10月26日~27日 (ハンガリー、ブダペスト市、エトヴェシ・ロラード大学)  
ヨーロッパにおける学術交流提携校であるエトヴェシ・ロラード大学の東アジア研究所と大谷大学真宗総合研究所の共催による第1回国際シンポジウムに大谷大学から以下の5名の発表者と公募で選ばれた2名の博士課程学生が参加し、研究発表と学術交流を行なった。ロバート・F・ローズ教授 (特別派遣者)、藤嶽明信教授 (特別派遣者)、織田顕祐教授 (特別派遣者)、井上尚実研究員、マイケル・コンウェイ嘱託研究員、李曼寧 (D2, 特別派遣者)、竹林遊 (D1, 特別派遣者)。

#### 《公開講演会》

①2013年7月1日 16:20~17:50  
於 マルチメディア演習室 (響流館3階)  
講師: 阿満道尋氏 (アラスカ州立大学アンカレッジ校准教授)  
講題: 真宗大谷派における北米開教の現状について

また上記の他、従来収集してきた仏教関係の洋書・学会誌のデータベース公開のために資料収集・整理を随時行っている。

#### 《その他》

6月4日(火)~7月2日(火)ジェームズ・C・ドビンズ教授 (オーバーリン大学、2009~2011年大谷大学客員教授) が研究のために滞在され、国際仏教研究の翻訳研究や計画中の近代教学アンソロジーについて専門的な助言

をいただいた。

(ドイツ・フランス班)

◇2013年8月4日から8月10日にギリシア・アテネ大学で開催された第23回世界哲学会議 (World Congress of Philosophy) に、藤枝真研究員 (本学准教授) および Michael J. Conway嘱託研究員 (本学非常勤講師) が参加し、研究発表を行った。世界中から3000人を超す参加者を集めるような大きな学術大会であった。

4日には、藤枝研究員がBioethics (生命倫理) の部会において、“Between the secular and the religious: Japanese Buddhism in the public discourse on the issues of organ transplant” (世俗と宗教のはざままで: 臓器移植に関する公的議論における日本仏教) というタイトルで口頭発表をした。

6日には、Conway嘱託研究員がBuddhist philosophy (仏教哲学) の部会において、“The role of the doctrine of mofa in Daochuo's thought” (道綽における末法の意義) というタイトルで口頭発表した。

9日には、藤枝研究員が発表するRoundtable (討論会) が開かれた。これはキルケゴール生誕200周年を記念するものであり、午前の一つ、午後二つのラウンドテーブルが行われ、多くの発表者・聴講者が集まった。全体のテーマは“Kierkegaard's relation to Greek philosophy, religion and culture” (キルケゴールとギリシア哲学・宗教・文化との関係) であり、様々な研究上の関心から、北欧の思想と南欧の思想が横断的に考察された。藤枝研究員の発表タイトルは次の通りである。“Philosophy in the city: A socio-political reading of the Kierkegaardian notion of the public” (市中の哲学: キルケゴールの「公共」の概念に関する社会・政治的読解)

◇村山保史氏 (本学准教授)、廣川智貴氏 (本学准教授)、藤枝真研究員 (本学准教授) によって、マールブルク大学神学部Dietrich Korsch教授のLuther: Eine Einführung (Mohr Siebeck) の翻訳が進められている。全体の訳が一度完了し、その検討作業が続けられている。

#### 西藏文献研究班

《研究打ち合わせ》

◇6月12日(火) 16時30分~ (真宗総合研究所ミーティングルーム)  
議題: 研究業務の進捗状況の確認。

◇7月30日(火) 16時30分~ (真宗総合研究所ミーティン

グループ)

議題：研究業務の進捗状況の確認。

◇10月1日(火) 16時30分～(真宗総合研究所ミーティンググループ)

議題：研究業務の進捗状況の確認。

#### 《公開講演会》

◇6月18日(火) 16時20分～(響流館3Fメディアホール)

議題：歴代アジャ・リンポチェの事績について

講師：8世アジャ・リンポチェ師(チベット・モンゴル仏教文化センター・センター長/元クンブム大僧院僧院長)

クンブム寺の重要な化身ラマでありながら、その事績が十分に知られていない歴代アジャ・リンポチェの事績について、興味深い話をお聞かせいただいた。寺本婉雅と関わりの深い6世に関する話(日本から将来された仏像や写真などがアジャ・リンポチェの邸宅に所蔵されていたという話)は貴重であった。

◇6月26日(水) 16時20分～(響流館3Fマルチメディア演習室)

議題：モンゴルにおけるチベット研究の歴史と現状

講師：M. ガントヤー博士(モンゴル国立大学宗教学研究学科長)

#### 《研究会》

◇8月26日(月)～29日(木)(真宗総合研究所内ミーティンググループ)

『サンブ明鏡史』の研究

嘱託研究員・西沢史仁氏をお招きし、氏が作成した校訂テキストおよび試訳を検討する形で読み進めた。学内外からの参加があった。

◇9月20日(金)～21日(土)(真宗総合研究所内)

寺本婉雅日記の研究

嘱託研究員・高本康子氏をお招きし、寺本婉雅の日記のうち1899年9月から1900年9月までの記録である『新旧年月事記』(内題)の原本を確認しながら、不明瞭な箇所等を確認し、翻刻の確定作業をおこなった。

#### 《学会への参加》

◇2013年7月20日(土)～7月29日(月)

出張者：松川節(研究員)、三宅伸一郎(研究員)

出張先：モンゴル国・ウランバートル

7/21～27にモンゴル国・ウランバートルのモンゴル国立大学を会場として開催された第13回国際チベット学会に参加。松川は「New Perspective on the Historical Evidences and archeological findings from Monastery Erdene-Zuu (エルデニゾー僧院にて発見された考古学的遺物と歴史的資料に関する新展望)」、三宅は「A mdo mā yang dgon pa'i bla ma dang ye shu chos lugs spel mkhan bol hel bar gyi chos rtsod skor (アムド・マヤン寺のラマとキリスト教宣教師ボルヘルとの宗教議論について)」との題目で研究発表をおこなった。

◇2013年7月2日(火)～7月8日(月)

出張者：清水洋平(嘱託研究員)

出張先：ポルトガル・リスボン

第5回ヨーロッパ東南アジア学会議(5th European Association for South East Asian Studies Conference)に参加。写本などの第一次資料の研究をテーマにしたパネル(PANEL 95: Digging up Hidden Sources: The changing Roles of Libraries and Archives in Southeast Asian Studies)に参加、研究発表をおこなった。

#### 《共同研究・調査》

◇2013年8月7日(水)～8月16日(金)

出張者：松川節(研究員)、三宅伸一郎(研究員)、武田和哉(嘱託研究員)

出張先：モンゴル国

モンゴル国立大学社会学部との学術交流協定にもとづき、共同研究「モンゴルにおける仏教の後期発展期(13世紀～17世紀)の仏教寺院の考古学・歴史学的研究」を開始。今回は、ドンドゴビ県スム＝フフ＝ブルド寺址、オボルハンガイ県アラシャント郡ホグノ＝タルニイン＝オブゴン寺址、ハル＝バルガス遺蹟、ゴーン＝バルガス遺蹟、ハルボハ都城址などの遺蹟を調査した。

#### 大谷大学史資料室

〈研究会参加〉

全国大学史資料協議会西日本部会2013年度第2回研究会

日程：2013年7月25日(木)

場所：滋賀大学経済学部

参加者：松岡智美

全国大学史資料協議会2013年度総会ならびに全国研究会

日程：2013年10月9日(水)～11日(金)

場所：明治大学駿河台キャンパス

参加者：戸次顕彰・松岡智美

〈ミーティング〉

2013年6月21日 15:00~16:10

出席者：藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美

場 所：真宗総合研究所

内 容：大谷大学図書館における大学史スポット展示の企画、大学史資料の今後の収集・保管に関する意見交換、その他。

2013年9月10日 10:00~12:00

出席者：藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美

場 所：真宗総合研究所

内 容：後期の活動計画・内容の確認。

2013年9月25日 10:40~12:10

出席者：藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美

場 所：真宗総合研究所

内 容：大学史スポット展示の企画、大学史資料の今後の収集・保管に関する話し合い、その他。

2013年10月18日 12:20~13:00

出席者：藤田義孝・平野寿則・戸次顕彰・日野純悟・松岡智美

場 所：真宗総合研究所

内 容：大学史資料室における事務作業やアルバイトに関する意見交換。

〈大谷大学史資料室スポット展示の作業〉

2013年10月8日 10:00~13:00

タイトル：「100年前の大谷大学」

参 加 者：藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美

場 所：大谷大学図書館入口展示スペース

展示期間2013年10月8日~2014年2月中旬(予定)

2013年10月22日 11:00~12:00

「100年前の大谷大学」展の確認・追加作業を行った。

参加者：藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美

場 所：大谷大学図書館入口展示スペース

〈その他〉

大谷大学博物館の秋季企画展「赤レンガ100周年記念赤レンガの学舎」(2013年10月12日~11月28日)の展示に際する調査・協力。

上記活動以外にも、大谷大学史資料室では大学史資料の調査・整理や、閲覧・質問等への対応を日常業務として行った。

また大谷大学図書館入口展示スペースにおける大学史資料の展示に際しては、大谷大学図書館・博物館からの協力を得た。ここに謝意を記す。

デジタルアーカイブ資料室

〈資料引き継ぎ確認〉

日 程：2013年7月2日(火) 13:00~13:30

場 所：図書館地下書庫

参加者：藤田義孝・酒井恵光・松下俊英

内 容：旧大谷大学DB研究の研究者と研究補助員および図書館員の立ち会いの下、旧研究班より引き継いだ資料の目視確認を行った。

■人事(2013年4月1日付)

□客員研究員

\*大西和彦(ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院客員研究員)

研究期間：2013年4月1日~2014年3月31日(新規)

研究課題：真宗総合研究所とベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との学術協力及び共同研究

指導教授/共同研究者：織田顕祐 教授、  
箕浦曉雄 准教授

研 究 所 報 第 63 号

2013年11月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435